語研資料12

言 語 研 究 I

1991(平成3)年3月

東京外国語大学　語学研究所

刊行にさいして

「態」の問題は「格」(別の用語では「統辞機能」)の問題と密接にかかわっています。マージナルな現象を持ち出してこの関係に疑いを差しはさむことも出来ますが,それは必ずしも生産的な観方ではないでしょう。「態」が歴史的にも重要な位置をしめる言語体系では必ず格や統辞機能のパラディグムの新しい利用の仕方が,それもこのパラディグムの中心部分に関して,話者が「態」を選択する度に何らかのかたちで提起されるはずです。

この現象をとらえる枠組みは研究者のとる立場によって様々でしょう。しかし「態」問題が疑いもなく統辞研究の,ひいては言語研究の大きな課題であるのは,以上のような事情があるからです。

外国語大学の語研にまとまった研究誌があってもよいという声は前々からありました。それがこの度,「態」の問題を中心に若いエネルギーを結集して実現の運びとなったことは非常に喜ばしいことです。

これからも年に一度か二度,テーマを決めて我々の研究誌を刊行し,確実に我々の議論の輪を広げていきたいと願っています。この機会に多くの方々のご協力を心から願う次第です。

1991. 1

執筆者を代表して

渡　瀬　嘉　朗

目　　次

「態」の選択……渡瀬　嘉朗 …… 1
LE PASSIF ET LE PARALLELISME
PARADIGMATIQUE FONCTIONNEL ……敦賀陽一郎 …… 37
ドイツ語の受動表現……在間　　進 …… 56
ロシア語における態について……中澤　英彦 …… 89
中国語の受動文……望月　圭子 …… 98
マレーシア語の受動構文……正保　　勇 ……118

「態」の選択

渡瀬嘉朗

1. システム　　2. システムと選択
3. 「態」　　4. 受動「態」と代名「態」
5. 代名「態」のしくみ　　6. 再び、「選択」について
7. 選択のない代名動詞：　いわゆる「本質的」代名動詞
8. 結び

1. システム：

言語はシステムであると言われてきたし、言われている。言語が「システム」という観念とどの点でつながるのか、何故「システム」という捉え方がこの場合、相対的に有効なのか、という問題は言語研究者以外の人を加えた一般的な議論の場で余り論じられたことがないような気がする。それは多分、問題そのものがやや大きすぎ、そのような場でその全体を論ずることがそれ程、簡単なことではないからであろう。

「態」の選択、という表題を掲げたが、このことは直接的、間接的に言語の、いわば「システム」性といえるような性格に大いに関わりをもっている。だから本題に入る前に、何故、言語はシステムなのか、という問題を少しばかり考えておこう。

1-1. まずシステムと呼ばれるものは、何らかの独自の仕組みをもっており、一定の使用法に従いさえすれば誰のためでも、どんな時でも、最初に予定された働きを示すものであろう。これはいわばシステムに《内在する性格》である。

だが多くの人にとって、言語がシステムであるかどうかが問われるときに陰に陽に問題なのは、実は自分の経験の中で、一般にシステムと呼びならわされシステムと考えられているものと言語との関係であろう。

一般にシステムはその使用法を知った上で使うことになる。だから我々の意識の中ではシステムはその仕組みが明確で《explicite な》ものと相場が決まっている。これを《人とシステムとの関係》と呼んでおこう。言語のシステム性を論ずるときに合い反する二つの議論が食い違うのはしばしば、この第二の点、つまり《人とシステムとの関係》をめぐってではなかろうか。

1-2. 《人とシステムとの関係》が潜在的には常に明確に説明出来る（explicite な）関係であるのに比して、《人と言語との関係》は「思い込み」の（implicite な）関係である。人はいわば、即自的な存在としての言語の中に取り込まれているのであって、それ故、人は常に、（やや逆転した言い方をするなら）「自分が分析的に明らかにし得るよりはるかに多くのこと」を自分の用いる言葉について直観的に「知っている」と確信してい

る。（普通のことばで言い直すなら、人は自分の用いる言葉について到底、充分な説明はできない。）この関係は freudien な要因をも含む関係に比することが出来る程、複雑で複合的である。

この複合的な関係が人間と言語との間に生ずるのは次のような根源的な事情による。人間が自分の経験 —— 少なくともその主要なもの —— を「知」（情報）に換えるためには共通言語を借用しない訳にはいかない。そしてこの経験特性と「知」の変換は、完全な手探りの中で行われる。いわば人間はそこで、ことばを介した原初的な「知」に目覚めるといってもよい。この過程は一概念について段階的に何度も訪れるものと思われ決してそれほど単純ではないが、その複雑な過程を敢えて単純化して言えば、まさにそれは一種の「知」の目覚めであろう。「知」の道具が、「ことば」という形で登場することで、人間の精神世界は徐々に趣を変えていく。人間はことばを道具として《使用》できるようになるが、その仕組みは闇に包まれたままである。いかなる人間も自分の「ことば」を解明できず、自分の「ことば」を他の道具と取り替えることはできない。ことばを道具として使用しながら、逆に人間はある程度ことばに所有されている。

言語研究者は言語を、その内在的な《仕組み》の点から見ようとするが、もう一方の立場の人は言語を、上で見たような《人と言語との関係》において見ようとする。しかしこの点を見落としてはならないが、この二つは本来、どちらか一つを選ぶとそのことでもう一方の観点は放棄せざるを得なくなるといったようなものではない。内在的な《仕組み》の点から言語を見るか見ないかは、むしろ言語に対する一つの観点の選び方の問題であって、所持している経験や、知識や、哲学や、人生観の問題ではない。むしろ、こう考えるべきではなかろうか。我々は確かに日常の生活において、即自的な存在として言語の中に全面的に取り込まれているが、そういった「存在」としての「言語」も我々の意識の一部なのであって、我々は当然、そういった意識を突き破って、それを客観視する視点を選ぶことができる。言語研究者の間では人間がそれをしないのは、それなりによく理解できる《 paresse》のせいだということになっている。

2．システムと選択：

だが、それはそれとして、どうして言語を客観的にとらえるのに内在的な《仕組み》の視点が有効であるといえるのか。ここで我々はシステムの《内在的な性格》にもう一度、戻らなければならない。

2-1-1. 言語がその特性をすくい取る《現実》は一回限りでユニークなものだが、それに反しそこで用いられる言語要素は、反復使用のためにあるものであって、反復使用の度に、不特定多数の現実に共通な特性をそこにすくい取って我々に示す。このように言語は、言語要素の反復使用に耐えるよう一定の《仕組み》をなしていると考えられる。話者はその《仕組み》に本質的に縛られているが、しかし大枠においてはそのように縛られている

ものの、自分の自由な《選択》によって望みの言語要素を用いることができる[1]。

我々は現実については経験的、直観的に、それの一回性、特殊性を「知って」いるし、同時にまた言語要素については、それが慎ましやかに《不特定多数の現実に共通の特性》を我々に伝えるためにそこにあることを、おぼろげながら「知って」いる。但しこの意識は残念ながら、明確な対自的意識ではない[2]。だから恐らく我々が持つ、この、ありのままの意識に頼って事態を認識しようとすれば、言語のしくみは我々の探究の目を逃れ、我々は混乱に陥いるだけだろう。そのことは《選択》についても言える。言語の使用者は自分が言語に縛られていることを全く意識しないから、《選択》行為によってようやく言語からのいくばくかの相対的な自由を獲得することについても、殆ど知ることはない。

2-1-2. 我々は日常、我々の現実 — 正確には我々の経験としての内的あるいは外的な現実 — を伝えるのに言語を用いる。この伝達が多少とも（決して全面的にではなく、多少ともであるが）成功するのは何故だろうか。媒体になった言葉（言語要素）が、話し手と聞き手の双方にとって使い慣れたものであるからであろう。「使い慣れた」と言えるのは、その要素が何であれ、初めての、またその一回限りのものではないからである。その点を逃しては、問題の言語要素の認識は始まらない。

勿論、人間は媒体となった言葉を、言葉の彼方にある《我々の経験としての内的、外的な現実》の、ある《特性》を切り取るために用いている。狙いは彼方にある現実であって、媒体として働く言葉ではない。この現実は厳密に、一回限りのものである。だから我々の目には、言葉が切り取った現実、言葉により意識化された現実が、あたかもその現実の精密な、一回限りの《絵》かそれに近い芸術作品（詩!)のように映ることも、しばしばであろう。我々はいささかもこの事実を否認しようとしたり、軽視したりしようとは思わない。

しかしそのことは、用いられた言語要素がその一回限りのものでないというもう一つの厳粛な事実を決して弱めたり否定したりするものではない。むしろ、我々の前にユニークな現実を切り取ってくる言語要素が我々の日常の意識からはすっぽりと隠された組織を作っていて、ユニークな現実の《絵》がその前に立ちはだかっていることを示している。

このことは、このユニークな現実の《絵》も、とりわけ細部においては、その隠れた組織である言語を越えることは難しいという事実を問わず語りに我々に告げているのではないか。

---

(1) そこにいわば話者の自由がある。人間はこの自由を、無限の自由と感じることさえある。それには後で見るように《選択》に二つのものがあることが大いに役立っている。また、言語が我々に与える可能性については、我々はそれを具体的に感じとることが出来るが、言語が我々に《与えない》ものについては極めて漠とした不満しか持つことが出来ない。

(2) 《不特定多数の現象に共通な特性》を一概念（たとえば一つの名詞）で括るのは、人間の意識の本性に特徴的な《抽象作用》を言語が映しているにすぎない。だがこの事を対自的意識のレベルで「知る」には当然、一定の努力が要る。

2-2-1. 人も知るように二つの言語がその表現力で拮抗するのは表現されたもの全体の大枠においてであって、細部に到れば必ず、意義においては二つの社会集団における価値体系の相違、結合構造においては二つの言語の統辞体系の相違が写し出される。そういった細部において、我々は言語要素を操作するというよりは全体として我々の方が言語要素に引きずられているといった方が正しい。

我々が言語要素を《操作》するのは実に、我々が、与えられた言語要素の間で《選択》をする場合に限られている。この《選択》には、わかりやすくいえば凡そ二種類あって、一点においてそこに現れる言語要素を決定する《選択》と（たとえば C'est *bon.* 「おいしい」とするか、C'est *délicieux.*「とてもおいしい」とするか）、せりふを拡大するかしないかの《選択》（たとえば C'est bon. 「おいしい」とするか、C'est *très* bon. 「とてもおいしい」とするか）がある。多くの場合はこの二つの選択が重なり合って一つの言語要素の《選択》を形づくっているといってよい。（たとえば Il partira pour Paris *pour voir son ami.* 「かれは友人に会いにパリに向けて出発することになっている」の斜体〔下線〕の部分は拡大をなすが、同時に当然、ここで使用可能な他の拡大との間の選択を含む。）

第二の《選択》（拡大をするかしないかの選択）は必ずその点での新たな言語要素の選択を含むから、決してその言語から我々を自由にするとはいえないが、しかし、もし二つの言語の表現力が、表現されたものの大枠においては拮抗するということが言えるとしたら、いうまでもなくそれは、与えられた要素間の《選択》の他に、このような自由な拡大に関する《選択》を話者がなし得るからであろう。たとえば上で見たように、フランス語では C'est *bon.* / C'est *délicieux.* のような選択が可能であるが、日本語では「おいしい」(C'est bon) / 「とてもおいしい」(C'est *très* bon)のような選択（第二の選択）しか可能ではないとする時、おそらく「とてもおいしい」(*très* bon) は代償形として、bon の代わりに delicieux を選択すること（第一の選択）にほぼ匹敵する意味を持つだろう。

2-2-2. 与えられた言語を使用して我々が自分の意図を表現しようとする時、我々の責任が実際に問われるのは《選択》のレベルにおいてである。

そのことは二言語間の問題として考えてみると分かりやすい。日本語で délicieux に匹敵する内容が一単位で表現できないのは日本語の問題であってそれを使用している個人の責任ではない。とすると、その点で個人の責任を問うことは不適切である。日本語で可能なのは単なる「おいしい」の代わりに「とてもおいしい」を選択することでしかないであろう。日本語において「とてもおいしい」を選択することは、許される選択、できる選択である。

できる選択を、するか、しないかで、我々の《意図》は表現されることになるのではないか。それがフランス語において bon の代わりに délicieux を選択することの代わりになるのではないか。

そういった考え方は、一つの言語の中でも同じく有効だろう。一つの言語の中で、我々には言えることと言えないことがある。その言語がそのための表現形式を準備していないことがらを、一単位を用いて表現することを使用者に求めても始まらない。そんなことは誰にだって出来るはずはないからだ。人にできる範囲のことがらに照準を絞り、その範囲においてなされる行為を、使用者に《選ばれた》行為、使用者の《責任に裏付けられた行為》と考えるべきであろう。

2-2-3. そのように見る時、我々のせりふは上で見たような《選択》の集積と考えられるのではないか。そして、我々の《言語》はそのような《選択》を可能にする《要素》から成っていると考えられるのではないか。言語はそのような要素を準備する。使用者は自分の責任において、言語が準備した要素の中から必要な要素を選び出す。結合の《構造》も、結合される《要素》も、共に、そのような意味で言語が準備した要素であり（ともにそれぞれのレベルで表意機能の対立を含む）、せりふを構成する重要な要素となる。

話者が選ぶ要素そのものの成り立ち（signifiant）と意義の基本的な部分（signifié）は、話者の手の届かぬところ、つまり話者の責任を問えないところで準備されている。それに反して話者の選択は話者の責任である。話者はその要素を選ぶことによって、その要素に加担する。加担の仕方に関しては、話者の主観のレベルでは、相対的によしとする場合も、絶対的によしとする場合もあろう。しかし話者の置かれている立場を総体として見るならば、話者は言語の準備した要素の中から、《相対的な選択》を強いられていることになる。

言語研究者が《対立》という概念で捉えようとするのは、そのような《相対的な選択》の中で問題になる価値のことである。

我々がここで問題にしようとする「態」もそのような要素の一つである。一つの「態」が言語要素として働く場合は、必ずその前提として、その「態」が話者によって自由に選ばれるということがなくてはならない。当然、何らかの「態」が他の「態」を押しのける形で相対化し、自由な選択の対象となるのでない限り、一つの言語の中で「態」が問題になることはない。ただ一つの「態」が問題になるときには、その前提として、「態」のない場合（「態」ゼロ）が可能でなければならない。そのような場合、「態」ゼロと、一つの「態」が選択の対象となり、そのどちらかが《相対的な選択》の中で選ばれて、せりふの中に姿をみせることになる。

2-3. 既に述べたように、我々はそのような《要素》の集積として言語を考える。要素結合の《構造》（fonction syntaxique による）も、結合される《要素》（monèmes）も、また要素の形を構成する《音韻》（phonèmes）もそのような《要素》である。

意義をもつ要素が問題となる場合、一人一人の使用者がとらえる意義は、一人一人の思い込みにより存在している。すべての使用者のとらえる意義が正確に重なる可能性はきわめて少ない。だが使用者は、相手が自分の操作する意義を受け入れてくれると信じられる

場合にのみ、言葉に託して自分の想いを相手に伝えようとするはずであるから、その意味では言葉が交わされる時、皆がそこに、共通の意義が存在していると思い込んでいるということは言えよう。共通言語の現象学がそのようにして成立する。そのような意義によって裏付けられた《要素》とその《結合》、要素の形を構成する《音韻》。この三つの《要素》は、《使用者により選ばれる要素》である。我々が言語要素について語る場合は、厳密に、話者が言語活動の中で実際に選択できるものとして確認できるものでなくてはならない。その確認は、言語活動の観察を通じてなされる。後ほど《作用項》《被作用項》の違いを検討することになるが、これも厳密には対立を土台に成立している概念である。

さて、言語をこのような要素の集積と捉えておくことは、我々のせりふの構成が選択行為によってなされると考えられる以上、筋道の通った結論と言えるのではないか。我々は凡そ以上のような枠組みの中で言語の内在的な《仕組み》を捉えようとするのである。言語がシステムであるというのは、以上のような意味合いにおいて理解されなくてはならない。

3．態と統辞機能：

ここでは「態」を、とりわけ「態」と統辞機能との関係を通じて眺めてみよう。

3-1. 「態」(voix, *ou* diathèse) は動詞述部に結合する要素であり、その要素が加えられることにより一般に、動詞述部に従属する第一の（最もコンスタントな）統辞関係が全面的に、あらためて別の項と述部との間で組み直される。それ故、「態」の決定は述部に向かう統辞関係の設定に決定的な影響を及ぼす。

ここでは《第一の、最もコンスタントな統辞関係》という規定で、主辞機能がある言語ではその主辞機能を、主辞機能をもたない言語ではその言語において最も多くの述部に導かれる統辞機能を考えることにしよう。

この統辞機能は多くの言語で陳述関係を担う統辞機能（あるいは陳述関係を担う統辞機能の内の主たるもの）であろう。だから「態」の選択はほぼ常に、その言語において陳述機能が生ずる方向を決定するいってよいはずである。

多くの言語で知られているのはいわゆる「受動態」であるが (On bâtit *le pont*「人は橋をかける」 / *Le pont* est bâti 「橋がかけられる」) 、マダガスカル語では目的辞以外にも様々な補足辞が、それぞれの《態》において、それぞれの補足辞の位置からより中心的な位置に移される。

このように《態》は動詞述部に加えられる要素でありながら、述部周辺の統辞関係と深い関係をもつ。Fonction (syntaxique) × Voix （統辞機能×態）は文構成レベルでとりわけ重要な複合を形成する。次の例で統辞関係《ガ》は、動詞述部の態によって、動詞述部に「木」を繋いだり、「花子」を繋いだりしている。こうして「木」と「花子」は述部の統辞意義特性の、それぞれ異なる部分 — それぞれの動詞形の《態》特性（V ゼロ / V

passive) が動詞の意義特性の中から選んで引き立たせている特性である — に繋がることになる：

Fig. 1

花子が（は）　木を（は）　植える

↙

木が（は）　—　植えられる

そのことを次のように図式化して示しておこう：

Fig. 2

文中の構造	:	機能×態の複合形式			+	動詞
『が ... 植える』	:	《ガ》	×	V zéro	+	《植える》
『が ... 植えられる』	:	《ガ》	×	V passive	+	《植える》

「態」はこのように動詞の意義を、その特性の《統辞的配列》を換えることによって作り変える。もっと適切に言えば動詞の意義を《統辞的に組み換え》、そのことによって統辞機能と動詞述部との関係を組み換える。この組み換えは、意義特性のレベルでは当然、目には見えないが、その結果が統辞結合の中に明確に姿をあらわす。上の図式の中の《V passive 》は、記号列の中では態の要素「られ」（「植え<u>られ</u>る」）で示される外、そのような統辞結合の型（「花子が... 」に代わって「木が... 」）によって示される。

3-2-1. ただし動詞の意義の《統辞的な組み換え》のみが生じ、文の《統辞結合の型》には全く変化が現れない場合がある。これは本来マージナルな問題だが、ここでは、我々は体系全体の経済性に興味があるので敢えてこの問題をとり上げよう。

例えばトンガ語では対格構造と能格構造が共存しているが、このような言語では《動作主》はいわゆる能格 (ergatif)で示されるから、受動文：

Fig. 3

動詞述部・V passive　+　動作主項　+　被動作項

からV passive　をのぞいた文：

Fig. 4

動詞述部・V zéro　+　動作主項　+　被動作項

は、そのまま能格構造の文になる。言い換えれば動詞述部の意義の《統辞的な組み換え》が生じているだけで、動作主も被動作項もそのままであって文の《統辞構造の組み換え》を伴わない[3]。バスク語でも同様の事実が指摘されることがあるようだ[4]。

勿論、いわゆる能格構造、対格構造はそれぞれ独立して一つの言語の統辞体系の基礎を形成し得るものであるから、このような言語状態を前にしたとき、まず、考えなくてはならないことはこのような状態を二つの構造の混在と見做し、二つの構造を別個のものとして別々に捉えることはできないか、ということであろう。

ここでは、そのことを当然のこととして念頭に置いた上で、なお、その混在状態の中で「態」の選択がどのような意味を持ち得るのか考えてみよう。

3-2-2. とりわけここで興味深いのは《態》の要素の意義（表意機能）である。この点には後でもう一度、戻って来ることになるが（cf. §6-2)、受動態の《態》の要素は明確に独自の表意機能を持っている。一般に、被動作項とその統辞機能（一般に non marqué である）は態の表意機能により、強力に補強されているはずである。

それ故このような混在状態にあっても、述部に付加される《態》の要素（トンガ語では -mia)は、もしこの要素が《態》の要素として正確に機能しているとすれば当然、《被動作項》を軸にして、同じ言語の能格構造より明確な形で、動作主の働きかけを捉えているはずである。

トンガ語のように能格構造をもつ言語では、その能格構造においてはもともと《被動作項》を軸に、事態は述べられる。このように、そこではいわゆる《陳述》は、インド・ヨーロッパ諸語の習慣とは甚だしく異なるとはいえ被動作項を中心になされると考えてよいが、それは述部と被動作項の統辞関係が non marqué か、あるいはそれに近い簡素な形式をとっていて、両者の間に最も安定した、最も安価で利用しやすい関係が想定出来るからである。《被動作項中心》の体制はその意味で統辞機能の性格そのものから生まれている。述部動詞も最も素朴な形式でそこに加わっており、態のような何らかの有標の表現形式は一切そのことに関わってはいない。能格構造では述部もまた、それが何らの《態》も選択していないという意味において、被動作項との関係について完全に non marqué であるわけだ。

そこに一つの態が加わる。能格構造とならんで、受動態を含む構造が選択できることになる。それによって述部が、被動作項とのより積極的な関係（有標の関係）を軸に、事態

---

(3) Patrick W. HOHEPA, 《The accusative-to-ergative drift in Polynesian languages》, *Journal of the Polynesian Society*, 1969 :

(84) Na e tanu-mia / 'e Mahe / 'a e kapa
(past bury-passive agent. person Mahe nom. the:sing. can)
"The can was buried by Mahe";

(85) Na e tanu / 'e Mahe / 'a e kapa.

(4) 敦賀の指摘による。 David M. PERMUTTER and Paul M. POSTAL, 《Toward a Universal Characterization of Passivization》, §2.2 (13), *Studies in Relational Grammar 1*, 1983, The University of Chicago Press.

を述べることが出来ることになる。これがこの言語におけるほぼ正確な事態の展開であろう[5]。この条件の中で生ずる体系の《経済性 économie 》は、話者が、その気になれば同一の統辞構造（absolutif の項 + 述部）を、《態》を参加させる形でも利用できるし、《態》をまじえずに身軽に利用することも出来るということだけであろう。

ともに被動作項を軸とした《陳述》であると考えてよい。一方は、無標の述部と被動作項、他方は、受動態という《態》を含む述部と被動作項のあいだの陳述関係である。本論の後半では、ともに有標の述部で、一方は代名態という《態》を含み、他方は受動態という《態》を含んだ二つの述部と、被動作項の間の陳述関係の違いを問題にする。すべて、被動作項と述部との間の陳述関係の variations libres にすぎないように見える。が、そうではない。一見、同じ統辞構造の利用であっても、態の関与により動詞の意義構造の統辞論的な組み換えが述部の方に生じている。結果として陳述関係の性格は大きく違ってくる。

ここで問題のトンガ語の場合でも、統辞構造の利用に関して動詞の意義構造の組み換えがいささか寄与するという意味で、《態》の違いは成立していると考えなくてはならない。通常は異なった統辞構造を率いて態の違いは現れるのに、ここでは統辞構造は同一であるという意味において、恐らくこれは最も軽量の《態》の選択の一つであろう。しかし軽量の《態》の選択はこれ以外にもしばしばお目にかかる。フランス語の受動態、代名態における《態》の選択などもしばしば同一の統辞構造の中で行われると言う意味で、軽量の《態》の選択の一つということになろうが、この《態》の選択は、後で見るように統辞選択としてかなり重要な意味をもつ。見掛けが軽量の《態》の選択だからといって内実は決して無内容な選択ではないところが、この問題の興味深い所であろう。

3-3-1. 主辞のしくみをもっている言語（インド・ヨーロッパ諸語）に戻ろう。ここでは事態を言語によって分析的に述べるとき、動詞述部を使えば、必ず参加者の一つをそれに《添え》ねばならない。つまり述部の補辞の一つは、義務的である[6]。それが主辞である。

3-3-2. いま、「参加者の一つ」といったが、勿論どの参加者でもよい訳ではない。

動詞の意義の《ある特性》に応じることのできる参加者、つまり述部が要求する一定の

---

(5) 《被動作項》と述部をつなぐ統辞関係を absolutif (HOPEPA の nom.)と呼んでおくと、absolutif ×V passive と absolutif× V zéro があらわすのはそのような事態である。absolutif ×V passive は述部動詞が「態」に関して marqué である。absolutif × V zéro は統辞関係も述部動詞もともに non marqué である。absolutif で述部と結ばれる項は両者を通じて変わらない。

確かにこの状況では、V passive を選択することが話の流れに目立った変化をあたえない。 absolutif で述部に繋がれていた項は二つの場合を通じて absolutif で（つまり non marqué の統辞関係で）繋がれることになる。

(6) このことの implication については『「代名態」の役割』（東京外国語大学論集 42）、§§1-1, 1-2 参照。

条件を満たす参加者、ということは恐らく、ある一定の性格を持った参加者が主辞として立たなくてはならない。それ故、動詞述部が決まれば、しばしば大まかに、どのような要素（参加者）が主辞として立たねばならないかということも決まる。これは項目（ここでは動詞）の意義（その文脈で選ばれる意義）が、しばしば極めて大まかにではあるが、統辞構造を支配する一つのケースである。たとえば同じ栄養補給行為をめぐって、manger に対しては「栄養摂取者」、ということは人間を含む動物、 nourrir に対しては逆に「栄養物」、ということは動物達の食べ物が主辞に立つことができる。

3-3-3. いま動詞の意義の《ある特性》に応じることのできる参加者という言い方をした。実は主辞を導くそれなりの特性が動詞述部に含まれているのでないと、そういうことは言えない。またその述部が、目的辞も持つことができる種類のものだとすると、その述部にはまた目的辞を導くそれなりの特性が含まれているはずだ。もしそうでないとすると、その述部が何故、一定の性格の目的辞を好むのか説明ができない。

実を言えばこのような場合、個々の主辞の働きを引き受ける要素は様々であるが、そのすべてに述部が一定の性格を付与していると考えられる。その性格が我々の目には主辞機能の働きのように映ってしまう。この性格は、述部がどのような「態」を選んでいるかにより全く異なる。たとえば F_1 × V zéro （主辞×態ゼロ）を伴うとき主辞となる要素は「働きかけ要因」を含み持っていて、 F_2 × V zéro （目的辞×態ゼロ）の要素と明確に対立する。そのことはこの、この目的辞要素が F_1 × V passive（主辞×受動態）を伴って主辞となる場合と比べてみると、二つの主辞の働きの違いは極めてはっきりしている。受動態の主辞はもう一方の主辞のような「働きかけ要因」を全く与えられておらず逆に積極的な「受動要因」の存在を示すが、そのことは受動態に置かれた述部がそのような性格をその要素に与えているのだと考えないかぎり、説明がつかないであろう。

つまり《態ゼロ》（能動態）の述部、《受動態》の述部は、それぞれの中に、主部を導入するための異なった特性を含んでいる。前者は《働きかけ特性》を、後者は積極的《受動特性》を含んでいるのである。話者はその特性に応じる参加者を選ぶ。実を言えばこの選択の範囲は我々が一寸想像するよりははるかに広く、それぞれの述部が含む《特性》に応ずるものでありさえすればよい。我々が前節（§3-3-2)で、「しばしば大まかに」とか「極めて大まかに」といった類の限定を連発せざるを得なかった所以でもある。

3-4. このような述部の意義特性は、先ず主辞に関して言えば、述部の周囲で主辞を導く統辞機能が積極的な形態としては姿を消し要素の位置で目的辞と区別されるだけとなったとき、つまり有標の統辞機能（「名格」）が消え殆ど無標[7]の「主辞機能」になったと

---

(7) 主辞は目的辞なしでも現れ、その場合はとりわけ主辞は、位置の制約から自由である： Est tué *un skieur* par l'avalanche 「スキー客がひとり、なだれで死亡」。主辞は目的辞との区別が必要な場合、述部に先行する位置を離れることができないが、目的辞なしの場合はそのような制約から解放される。それに比して目的辞は、現れるとき必ず主辞との区別が必要である。

きに、述部に転移されたものである。ただし次のことは記憶されていてよい。「名格」が消えたのは述部にそのような潜在的な《特性》が出来上がっており、主辞と述部を直接結合させればそれで充分だったからであろう。一般に言語はこのような《潜在性》の活用をしばしば行う。統辞機能が全てをとりしきる場合は、述部には何らの潜在的な特性は準備されていない。しかし述部と一定の統辞機能の協同作業が恒常化すると（cf. *fr.* débarrasser [8] ... *de* の de)、述部の中にはその統辞機能に対応する潜在的な《特性》が生ずる。このような述部の意義特性と統辞機能の、もちつもたれつの協同作業はいたるところにみられる。ある恵まれた場合には統辞機能は後事を述部の中の《特性》に任せて姿を消す。統辞機能が形態としては落ち、述部との相互的位置関係に置き変わったとき、述部の中の意義特性は文脈によって発揮される。この場合、文脈とは主辞の出現、述部との直接的結合である。文脈が整わなければ、潜在的なものは、伝えられることなく終わる。

ほぼ同様なことが、目的辞の場合についても言えるであろう。ただし対格言語の場合、この項は明らかに第二参加者である。（第一参加者に比べ、動詞との結合の頻度もやや低い。）態がかわり、この項が第一参加者の位置に付いたとき、述部（+ 態）の中の意義特性がこの項を強力に支えることになる。

このような《特性》は、意義特性の一部であるとしても、統辞機能との関係で転移されたものであり、個々の動詞の語彙的な意義特性と関わりながらも、それを超越している。

それ故、他動詞の《目的辞》として導入される項は、動詞の意義との結びつきで、《動作を受ける項、被動作の項、被作用項》と見做されるわけだが、しかし「作用項」「被作用項」の違いがより明らかなのは個々の意義とのつながりよりもむしろ、主辞／目的辞の対立（とりわけそれが可能な場合は、態ゼロの主辞／受動態の主辞の対立）によってではなかろうか。個々の動詞の語彙的意義だけを見る場合、そこに真の意味の「作用項」「被作用項」の対立が形成されているかどうかは、かなり疑わしい。

4．受動「態」と代名「態」：

4-1. 以上で明らかになり始めたことを、もう少し突っ込んでいえば、次のようになろう。いわゆる「能動態」の主辞は、すでに見たように統辞的には無標（non marqué）に近く、強く述部の「働きかけ要因」（意義特性）に助けられている。「能動態」では、この「働きかけ要因」が主導性をもつといってよい。そこから積極的な（主導性をもつ）「作用項」が生まれる。この《作用性》は、それ故、統辞関係に起源を持つものではなく述部の表意機能に起源を持つものと考えるべきものであろう。

それに対して「能動態」の目的辞は、述部の意義構造の中の中立的な「受けの要因」に

---

(8) Cf. Yoshiro WATASE, 《Introduction》, *Recherches linguistiques en hommage à André MARTINET(1990)*, Tokyo, pp. 1-9, surtout p. 8.

導かれている[9]。この要因は述部の意義構造の中で《過程・事態（procès）の実現》を担う部分であり、述部（態ゼロ）は意義のこの部分を通じて《第二参加者》と結合すると考えられる。「被作用項」（能動態の第二参加者）はそのような関係図式の中で生まれるものなのである。だから「受けの要因」は、それが持っているもう一つの面からいうなら、《事態（procès）の実現》を表す部分と考えておいてよい。《実現》は潜在的には受動的でも能動的でもあり得るが、狭い意味の「受動態」が加わって受動性が強調されるまでは、意義的にはむしろ中立的（neutre）であるようだ。だから、こうして生まれる「被作用項」は（統辞的にはむしろ、しばしば有標の accusatif をもつが）意義的には neutre である。

述部に態が加わり述部の中立的な「受けの要因」が主導性を獲得すると、「被作用項」が主辞になり、統辞的には無標だが、意義的には述部の中心部分につながって、主導性をもつようになる。

フランス語では、実はここで二つの態（受動態と代名態）の間で選択が行われなくてはならない。選択の対象となるのは、受動性を強調した《受動態》と述部の「受けの要因」を中立的なままにした《代名態》である。代名態の場合（あとで述べるように再帰型と相互型を副次的なものと考えるなら）《事態の実現》を述べることが中心となり受動性、能動性はむしろカッコに入れられる。ここでも言語の潜在性の活用が問題なのであって、その活用は専ら文脈の整備による。古くは動作主（par ...)を文脈で整えて、受動性の表現としても用いられているが、文脈をどう利用するかは当然、時代の言語状態による（現在では殆ど用いられない）。

4-2. だいたいの見通しとして、このようないくつかの点が問題になるわけであるから、操作概念には注意を払いたい。操作概念が粗すぎると現象のいくつかが初めから洩れ落ちてしまう：

(i) "主辞" と "目的辞"：
「主辞」は統辞的には、位置による区別を除けば、無標。態によっては「作用項」でも「被作用項」でもあり得る。「主辞機能」によって述部につながれるが、この機能は動詞述部とともにいつでも、どこにでも見られるから、情報量はゼロ。

---

(9) 「受けの要因」、または「事態実現の要因」：facteur-récipient *ou* facteur de réalisation du procès. この要因はその二面性のためにとらえにくい。インド・ヨーロッパ諸語の言語図式では、動詞の表す動作・状態はとりわけその動作・状態の《実現》する場が「目的辞」の形で想定されている場合、何らかの《働きかけ要因》（「主辞」）と組み合わせになっていて、そういう言語図式の中では《動作・状態の実現》の場はいきおい、主として《受けの要因》として捉えられることになる。ただしこれは、インド・ヨーロッパ諸語の言語図式の中で初めて一般的に言えることである。そういう言語図式を離れて見るなら、これは《事態実現の要因》もしくは《動作・状態の発生・推移の要因》に他ならない。インド・ヨーロッパの言語図式においても、我々がここで扱う代名態の場合は後で見るように、《働きかけ要因》を無効にし働かなくすることが大きな狙いとなるから（§8-6)、そこでは述部の《受けの要因》としての働きはなくなる。そしてその後に《動作・状態実現の要因》だけが一種の純粋状態で残される事になる。

「目的辞」：動詞述部の「受けの要因」または「事態実現の要因」に導かれる項。態ゼロ（能動態）における「被作用項」。

(ii) " 述部の意義特性"：

「働きかけ要因」(facteur agentif) は、態ゼロ（能動態）の述部に潜在する主要な特性。態ゼロの主辞を導く。

「受けの要因」または「事態実現の要因」(facteur-récipient *ou* facteur de réalisation du procès) は受動態の介入しない neutre な形では、《事態の実現》にのみ関連する。受動態はこの neutre な「受けの要因」を「受動要因」に組み換える。代名態は neutre のまま残す。代名態の場合、受動的実現・能動的実現の可能性が潜在性のまま留め置かれると言ってもよい。(文脈によって受動性が現れることもある。)

(iii) "受動態" " 代名態"：

「受動態」と「代名態」は共に、「受けの要因」（または「事態実現の要因」）に主導性を与える「態」。これらの態により態ゼロの被作用項が主辞となる点は共通している。neutre な「受けの要因」を「受動要因」に組み換えるのが受動態で、そのまま使うのが代名態と考えられる。

(iv)その他：

「受動要因」は受動態で述部に潜在する主要な特性。主辞を導入する。

「作用項」（または動作項、動作主）：「働きかけ要因」に導入される項。

「被作用項」（または被動作項）：目的辞として動詞述部の「受けの要因」に導入される。あるいは主辞として、 neutre のままの「受けの要因」に導入される場合もあり(代名態) 、「受動要因」に組み換えられた「受けの要因」に導入される場合もある(受動態) 。

4-3. さて、もう一度、動詞 manger, nourrir に戻ってみよう。すでに見たように、mangerに対しては栄養摂取者、 nourrir に対しては栄養物が主辞に立つことができる。通常このとき能動態で主辞に立つ要素は、能動的な参加者(partcipant actif)という役割を担わされ、それに対し目的辞は、受動的な参加者 (participant passif) という役割を担わされる、といわれる。しかしこの「能動的参加者」という性格は単なる個々の語彙的意義の中に確認出来る特性を超えて、態の選択を持った動詞に共通する統辞特性と考えてよいだろう。その理由は、この特性が先に述べたある種の動詞（他動詞）に潜在する「働きかけ要因」から来るものであるからだ。そうしてもう一つ、目的辞の《受動的》参加者という捉え方における「受動的」という概念は狭義の《受動》ではない。この参加者を事態の《実現》の場としてとらえているのである：

Fig. 5

participant actif	+	procès	+	participant passif
L'homme	+	mange	+	du pain.
「人がパンを食べる」				
Le pain	+	nourrit	+	l'homme.
「パンが人を養う」				

このように manger を動詞述部に用いる限り、何らかの「栄養摂取者」が主辞に立って「栄養物」に対して働きかける。この問題は個々の語彙的意義の問題である。この「栄養摂取者」と事態との関係は manger を用いる限り決まった関係でもあるので、言語的または語彙的に決まった関係と考えてよい。 nourrir を動詞述部に用いると、この言語的・語彙的な関係が逆転し、「栄養物」が「栄養摂取者」に働きかける図式が選ばれる。(この図式も語彙的な関係図式と考えてよい。) このように語彙的に決まる関係がそれぞれの動詞述部に対して決まっている。《態》はそのような関係を全く変えることなしに、文の中での提示のやり方だけを変えようとするところに成立するということができるであろう。それは述部を《働きかけ要因》(*cf.* 態ゼロ) で動くものから《受動要因》(*cf.* 受動態) で動くものへ組み換えたり、《実現要因》(*cf.* 代名態) そのもので動くものへ組み換えることだ、と言い換えてもよい。

たとえば、主辞 + 述辞として : L'homme *mange*, Le pain *nourrit* があるときに、「態」を「代名態」に換えれば : Le pain *se mange;* L'homme *se nourrit* (結果は含まれない — 未完了的) となり、更に、この「態」を「受動態」に換えれば : Le pain *est mangé;* L'homme *est nourri* (事態は、結果を含め総体としてとらえられている — 完了的) のようにすることが出来る。

4-4. 最初の例 (3-1)に戻って、代名態と受動態の差を示せば、On *construit* le pont. 「(ひとは) 橋をかける」(態ゼロ) に対して :

(i) Maintenant, le pont *se construit*. 「今や、橋がかけられる (かかる)」
(代名態 :《事態の発生、推移》が問題で、結果は言及されない)

(ii) Maintenant, le pont *est construit*.「今や、橋がかけられている」
(受動態 : 主として《結果》が言及される)

のようになるだろう[10]。主辞の位置は、態が受動態であれ、代名態であれ「被作用項」で埋めることができる。事態そのものは態がゼロであれ、受動態であれ、代名態であれ変わることがない。

4-5. このように、受動態と代名態とではその表意機能に大きな差があるとはいえ、両者

---

(10) construire 「建造する」 (On *construit* le pont) は、動作主を中心に《事態の進行》を問題にするのにたいして、(être) construit (Le pont *est construit*) は一貫して《結果の実現》(しばしば完了、時に進行中) を問題にする。それに対して se construire (Le pont *se construit*) は、作用を受けるものを中心に、《事態の進行》を問題にしていると考えることができる。受動態は《結果の実現》を問題にするが、文脈によっては、《結果の実現》が《進行中》であることを含意することもある : Le pont est construit rapidement. (進行中)/ Le pont est construit par une équipe. (両義的)/ Maintenant, le pont est construit. (状態) Cf. A. MARTINET, *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, Didier, §3.3c.

が、《態》として統辞機能に関わるレベルにおいては、共に《被作用項》を主辞に押し上げる（格上げする）点で、同じ働きをする。主辞機能（fonction sujet）をどの項（参加者）が引き受けるかという点は、「態」が決まらなければ決まらない。話者は、《態を決めることによって主辞の立て方をきめる》のである。

4-6.「態」は、その体系で最も頻度の高い、コンスタントな統辞機能 —— 主辞機能をもつ体系では「主辞」機能 —— に結びついて、その機能が新しく活用される機会を生み出す。他の機能（例えば「目的」機能）とともに用いられていた項が，いわば格上げされてその最も頻度の高い、コンスタントな統辞機能（例えば「主辞」機能）を引き受けることになる。フランス語は「主辞」(sujet) を持つ言語であるから「態」の選択によって格上げされる項は「主辞」となり、「態」は「主辞」機能と共同作業をすることになる。

「態」と統辞機能の共同作業はこうして、言語体系の経済性に対して重大な意味をもつと考えられる。

5．代名《態》のしくみ：

代名態はかなり入り組んだ形で、いわゆる代名動詞の中に混じりこんでいる。それを見分けるにはそこに「態」の選択があるかないかを検討していくことが必要となる。それ故、とりわけ代名動詞を代名「態」の観点から検討することになる。

5-1.　現代フランス語のいわゆる「代名動詞」には後で見るように（§5-4)、(i) 目的辞として立つ項が軸になるものと、(ii)主辞として立つ項が軸になるものがある。前者のタイプは、少数の例外を除けば、他動詞のすべてに潜在的な可能性が認められるのに対し、後者のタイプは当然、主辞として立つ項が、自発的な意思をもつ行為項であることを要する（これは、通常のいわゆる再帰動詞のタイプである）。「態」の選択の観点から重要になるのは当然、前者であるが、この問題は次節で検討しよう。更にまたフランス語には、(iii)「代名動詞」としてしか用いられない動詞がある。通常、「本質的代名動詞」と呼ばれているこのタイプのものは、形式的にも代名動詞 / 非代名動詞のあいだの選択の可能性を全くもたない。よってこのタイプのものは、「態」の選択を考える場合、除外しておいてよいだろう（cf. §7)。

5-2.　現代フランス語において、代名「態」の効用はどこにあると考えられるか。代名「態」が一つの選択として加わることによって、言語は何を得るのだろうか。この問いに答えるためには文中で代名「態」を選択することにより何が変わるかを見ることが必要である。このような観点から見ると、フランス語における代名態（目的辞中心の代名動詞）は独自な表意機能において受動態と競合しつつ文の統辞構造を決定的に支配する。具体的に言えば、代名態は、「態」ゼロの統辞構造で「目的」機能の項を満たしていた要素に、全面的に話者の注意を集中させることを許す。その要素をあらためて主辞に立て、もとも

と主辞の位置にあった要素を随意的な要素として基本構造の外に追いやるのである。このようにして代名「態」は「主辞」が使える場合を多様化する。そのことによって、いわゆる他動詞に関しては我々が「主辞」を利用できる機会がほとんど倍増する[11]。

要するにここで新しい《態》の意識（とらえ方）が発生しており、統辞型においては被作用項を主辞に立てる点でそれは受動態と同じであるが、意義（表意機能）から見るならばこの二つは全く別のものである。ここで登場した新しい態を、従来、「受動型」と名付けて来たのは、この統辞型の同一性にのみ目を付けたとらえ方といえるであろう。

5-3. わかり易い例を一つ挙げよう：

Fig. 6

Cela	*trouble*	cet homme.
Une vérité		Simon.

この trouble に SE（目的辞の働きをひきうける）を加えてみよう。それだけで主辞の場に、一つの可能性として、(SE が形式上、述部 troubler の目的辞であり、また形式上、主辞と同一の項を指すので）述部 troubler の目的辞である cet homme, Simon を立てることができるようになる。この場合、問題の《被作用項》cet homme, Simon は animé であるが、この項が animé であるか inanimé であるかは、ことの本質に全く関わりがない：

---

(11)この点については『「代名態」の役割』（東京外国語大学論集42）で若干述べる機会があったが、そこでの論点を要約的に繰り返すと、第一に（「主辞」機能を持つ言語では）「主辞」機能が統辞機能の経済性の中心をなしていると考えられること、第二に（フランス語のように主辞機能を持つ言語では）「態」が「主辞」機能をフルに活用するために出てきたものと考えられること、そして第三に、いわゆる「代名動詞」をこのように新しく定義し直された「態」の観点から改めて捉え直して見ると「再帰型 + 相互型」は、歴史的にはこの型の方が先行しているに違いないにしても単なる「再帰動詞」の域を脱しておらず我々の興味をそれほど惹かないが、しかしいわゆる「受動型」―― その意義から言って本来の《受動態》とは全くの別物である ―― はまさにここで定義し直された意味における「態」の「役割」を果たすために現れたものであり、それが現れたことによってフランス語における再帰動詞の再編、組み換えが始まったと考えられ、その意味で「再帰型 + 相互型」は「態」の観点からはいわゆる「受動型」に従属するものであると考えられること、この三点であった。
従来の分類は、「態」の問題を避けて「再帰型」「相互型」「受動型」等を羅列するだけであるため、分類の趣旨が不明である。「受動型」は「態」の観点からは理解されず、「主語が inanimé であるとき」あらわれる特別な型であるかのごとき説明がなされるのが普通である。しかし「再帰型」「相互型」からは説明できない以上「受動型」は独自な型と考える他はなく、「再帰型」や「相互型」の、〈特別な型〉ではあり得ない。

Fig. 7

Cet homme se trouble devant *cela*
Simon devant *une vérité.*

ここで《被作用項》が SE を介して、主辞に立つ仕組みは、さして理解が困難ではない。SE は形式上、主辞と同一の項を指す。と同時に SE は、また述部（troubler）の目的辞として働くべきものでもある。この筋道を、仮に《troublerの目的辞》を出発点としてそこから辿り始めれば、当然、《被作用項》として立てられていた、cet homme あるいは Simon から話は始まることになり、この cet homme あるいは Simon を主辞に立てれば、それで話の筋道は完結することになる。この変化で、大きく変わるのは文の基本構造（「最小発話の構造」）で、それを図式的に言えば：

Fig. 8

Cela *trouble*		Cet homme *se trouble*
Une vérité *trouble*	⟶	Simon *se trouble*
.....		.....

となる。

もう一つの筋道は、逆の方角から、つまり述部（troubler）の主辞を出発点としてそこから始めるもので、この方角からいけば SE は主辞の Cela や Une vérité を受けそれを述部（troubler）の目的辞としてたてることになる。これが、主辞のしくみを備えたフランス語のような言語における、いわゆる「再帰動詞」が辿る道筋であろう。

5-4. 非常に一般的な形で問題を設定すれば、この二つの《筋道》の問題は次のように整理できるはずである。

まず、主辞を設けるか否か、つまり述部に対して、その存在が《義務的な補辞》を設けるか否かはその言語の自由であるとする。また《作用項》を主辞とするか（対格言語の場合）、《被作用項》を主辞とするか（能格言語の場合）も、その言語の自由であるとしよう。条件をそのように一般的に設定した場合、ある言語が《主辞》を設定したとしてその《主辞》のあらわす項は、当然、作用項である場合もあり、被作用項である場合もあることになるから、《主辞》があらわす項をあくまでも一般的に規定する概念は《第一参加者（premier participant)》でしかあり得ない。態ゼロの時《主辞》が能動的 participant "actif" であるか、それとも受動的 participant "passif" であるかは、決して一般的な形では言えないだろう。それが言えるのは個々の言語のレベルにおいてでしかない。

同じく、「態」の選択によってそれと交替し得る項は《第二参加者（deuxième participant）》でしかあり得ない。（多数の「態」の選択がある言語では《第二参加者

(deuxièmes participants) 》が多数存在することになる。)

フランス語の場合、態ゼロでは主辞は《作用項》から選ばれる。そのように作用項から選ばれた主辞に対して再帰的な代名詞 SE が設定される時、この代名詞は先ず《作用項》(＝主辞) を受けつつ、その作用項が事態の再帰的な動きにより、述部の被作用項となることを示す。これがフランス語のような対格言語における、通常の意味での再帰的な働きであろう。

それに対していわゆる「受動型」では SE が、いわば述部の《被作用項》をまず受け、それを出発点として、その被作用項から《主辞》を生み出している。これは明らかに逆転した使い方であって、用法の拡大として後から通常の意味での再帰的な働きに付け加えられたものであろう。

5-5. この点に関連してやや気になるのが、ある種の、使役的な意義を隠し持った動詞である。

たとえば revêtir / se revêtir / (être) revêtu を見よう。Il *est revêtu* d'un uniforme 「彼は制服を着用している」では「彼」は陳述の中心になっているが被作用項である。事実 Il *revêt* son enfant d'un uniforme「彼は息子に制服を着せる」、Il *se revêt* d'un uniforme 「彼は制服を着用する」で、 revêtir の第二参加者(最後の例文では、第一参加者をも兼ねているが) は一貫して被作用項をあらわす。

おなじく、 tourner / se tourner / (être) tounré を見てみよう。Il *est tourné* à gauche「彼は左を向いている」では「彼」は被作用項である。事実、 Il tourne son dos au soleil 「彼は背を太陽の方に向ける」、Il *se tourne* au soleil「彼は太陽の方を向く」では tourner の第二参加者は(最後の文では第一参加者をも兼ねているが) 一貫して被作用項をあらわす。

この二つの例を見ただけで気が付くのは、il *se revêt*, il *se tourne* などにおける主辞 il の本質的な両価性であろう。この「彼」は作用項であり、かつ被作用項でもある。彼は「自分に着せる」つまり、結果として「着用する」わけであり、「自分を(ある方向に) 向ける」つまり、結果として「向く」わけである(《事態の発生、推移》)。そこで仮に我々が il *se revêt*, il *se tourne* の il を il *est revêtu*, il *est tourné* の il と、その実質において重ねてみると —— 前者では《事態の発生、推移》が述べられているのに対して、後者では、同じ事態の《結果》が述べられるだけの違いである —— il *est revêtu*, il *est tourné* の il も、両価性を持つことになろう。つまり彼は「自分に着せた」結果、「着て」いるわけであり「自分を(ある方向に) 向けた」結果、その方向を「向いて」いるわけである(《状態》)。

勿論、たとえば est revêtu が「自分で着た」結果なのか「誰かに着せられた」結果なのか、その点は判然とはしない。しかし est revêtu は潜在性としては両方の場合をふくむ。その点が重要である。両方の場合が含まれれば当然、表現は一見、《曖昧》だが、文

脈の整備によってこの《曖昧さ》は消える。言語が《多義的な潜在性》を活用する場合は枚挙にいとまがないが、「完了形」を《過去》と《完了》に使い分けるのもその一例であろう（様々な言語の過去完了や、フランス語のいわゆる複合過去など）。

使役的な意味をもった他動詞（「（人に）着せる」 revêtir）は、被作用項である人が「着せられる」立場にありながら、その結果として何かを「着ている」状態にあることを示すが、この場合は形は受動形式でありながら（On *le* revêt...→ *Il est* revêtu...）その形式的受動性が、意義の使役性を消す働きをしているといってもよい。同じことは代名態を用いた、On *le* revêt... → *Il se* revêt...（《過程の発生、推移》）についても言える。類例は沢山あるが、たとえば *Paris est* situé... 「パリは... に位置している」、*Paris se* situe géographiquement au centre de la France du nord「パリは地理的に見て北フランスの中央に位置している」なども挙げられよう。

使役的な意義をもつ他動詞の場合このように、態ゼロの第二参加者を中心に、もう一度《作用の展開》を考えることができる。ただ、この場合の「使役性」はかなり広い意味で理解されなくてはならず、例えば次の débarrasser X de Y なども、ひろく捉えたそのような動詞の一つとして数えなくてはならなくなるだろう：

On débarrasse *X* de Y 「Yを厄介払いしてXの重荷を取り除く」
X est débarrassé de Y 「Yを厄介払いして（もらって）Xはせいせいしている」
X se débarrasse de Y 「Yを厄介払いしてXはせいせいする」

では réveiller「目を覚まさせる」、 troubler 「濁す、混乱させる」はどうか。この種の問題を考えるときに翻訳に頼るのは禁物だ。早い話が、troubler は「濁す」とやれば通常の他動詞だし、「混乱させる」とやれば使役的な意味をもった他動詞になる。réveiller は「目を覚まさせる」とすれば使役的だが、それは要するに「目の覚めた状態にする」ということではないか。つまり極く普通の他動詞でもあるということだ。では vendre 「売る」はどうだろう。「売られた状態にする」に当たる使役的な表現がありさえすればこれも同じ仲間になるところであろう。

以上の考察から結論として言えることは何だろうか。多くの他動詞が潜在的には使役的な意義を隠し持っているということである。しかしそれは、ある意味で当然のことであろう。総べての動詞が少なくとも一つの《実現要因》からなっていることは、まず当然の潜在的事実として想定して置かなくてはならない。それに《起動要因》《働きかけ要因》が加わったものが、いわゆる他動詞であろう。この起動要因が使役的意義として paraphrase 出来るか、出来ないかは、実は極めて些細な問題である。他動詞の言語図式からいえば起動要因の対象(objet) となるのが形式上の「目的」であるが、それは潜在的には《実現要因》の固有の参加者（participant unique）に他ならない。代名態とは、手っ取り早くいえば起動要因をカッコにいれて、動詞の《実現要因》とその《固有の参加

者》（目的辞）の関係を、未完了の形で（つまり être + pp. という複合形式を使わないで）表に引き出そうとする言語図式である[12]。

5-6. さて、上で見た、いわゆる使役的意義を持った動詞では、その《実現要因》だけを取り出して、自分が「回る」あるいは「向く」と言いたい場合に、とらえ方を簡略化して一つの自動詞（自己完結的な作用概念）を設定しない限り、「自分をまわす」「自分を向ける」という式の一見《まわりくどい》表現が避けられない。

もちろんこれを《まわりくどい》表現と感じるかどうかを、ここで議論してもはじまらない。この方式の表現に慣れれば、この種の表現はむしろ筋が通っていて扱いやすいはずである。というのはこの種の表現では、被動作項あるいは被作用項の表現（SE）が、あって当然の（従って少しも面倒ではない）要素となっているからだ。ここで規則性は行動を容易にするという人間行動の経済法則を思い出しておく必要があろう。そしてこの被動作項、被作用項の表現は、事態の実現にむけて働きかける《起動》の部分（主辞の表現）に対して、それを受ける部分、事態の実質的な《実現部分》を構成する。再帰性は（しばしば非常に形式的に）その《実現部分》が起動者の自らの行為として生じることを示すわけだ。まさにこれは（合成的な）自動詞表現であるといってよい。しかもこの仕組みがあるお蔭で、il *est tourné* vers ...「彼は... の方を向いている」という状態表現まで可能になる。

こうして我々は、一つの事実に気付かされることになる。

それは「ものをまわす」vs「自分がまわる」(se tourner)という図式と、「ものを濁す」vs「自分が濁る、混乱する」(se troubler) の本質的な同質性である。「（人の）眠気をさそう」vs「（自分が）ねむくなる」(s'endormir) の関係も、本質的に最初の図式(se tourner)と同質である。「ものを売る」vs「（自分が）売れる」(se vendre) の関係さえ同質的といえるのではないだろうか。言い換えれば tourner / se tourner, troubler / se troubler, endormir / s'endormir, vendre / se vendre はいずれも、同質的な関係を隠しもっている。

この関係は再帰的な被作用・被動作の項が animé であるか、inanimé であるかを全く問わない。ある作用または動作が、再帰的被作用・被動作の項を《含む》(se tourner)か、《含まない》(tourner) かの違いによって生ずる関係といってよいだろう。こういった関係がひろく成立するかしないかは、分析の道具として再帰的被作用、被動作をあらわす好都合な標識（SE）が、手の届くところにあるかどうかによる。それがなければ、こういった関係は決して汎用の関係としては成立しない。その意味ではこの関係は再帰的被作用・被動作の《相関》corrélation de *SE* と呼ばれるにふさわしい。分析的には広大な領域

---

(12) participant unique（「唯一の参加者」、ここでは「固有の参加者」とした）については A. MARTINET, 《Agent ou patient》, 1987, repris dans *Fonction et dynamique des langues*, §5.5.2, 1989, Paris, Armand Colin; cf. aussi A. MARTINET, *Syntaxe générale*, §§8-9,8-12, 1985, Paris, Armand Colin.

が、ただ SE を選択するかしないかによって成立するのである。

もしもこのような関係の広範な同質性がなかったら、代名動詞における、いわゆる再帰型から受動型までの用法の、これ程の拡がりはなかっただろう。すでに見たように（§5-5)、他動詞は潜在的に、《起動要因》とは別個の《実現要因》を隠しもっている。それを引き出すのが形式的には「目的辞」であり、SE はそれを引き出しながら、返す手で実現要因の《固有の参加者》を形式的な主辞として立てることを可能にする。これによって、SE + 動詞のいわゆる受動型が可能になる。だから SE + 動詞はその潜在的能力として、当初より、再帰型から受動型までのすべての可能性を含み持っていたというべきだろう。しかしその秘密の根源は動詞の潜在的な《実現要因》の存在にある。《実現要因》は能格構造にあっては始終一貫して動詞の主要意義特性であり、動詞の《起動要因》はつけたりであって、ergatif が、それをいわば有標の意義特性として引き出す役割を担っている。しかし《実現要因》は対格構造にあっては、他動詞の《起動要因》のかげに隠れる。そして accusatif が、それをいわば有標の意義特性として引き出す役割を担う。SE + 動詞は《実現要因》を引き出すことを目的としてつくられた動詞形式である、といってもよかろう。対格構造は他動詞において、《起動要因》で《実現要因》を押し隠したが、代名態によりもう一度《実現要因》を正面に引き出した。そのことによって、きわめて合成的に、能格構造の一つの特徴を回復したのである。

6．再び、「選択」について：

代名態を「態」の選択の観点から少しばかり突っ込んで考えていくと、やや、厄介な問題にぶつかることになる。文脈の問題である。少し具体的に見てみよう。

6-1. 今ここに Les vagues *se brisent* aux rochers という文があるとしよう。この文の中心をなしている se briser は他動詞 briser が、能動態（「態」ゼロ）から代名態への転換により「態」を変えた結果である。たとえば *briser* les vagues とか Le vent *brise* les vagues aux rochers を考えてみるなら、この briser が他動詞として使われる動詞であることははっきりしている。しかしここで、代名態の選択が行われているのなら、それが行われる前の形、つまり「態」ゼロの形は正確には何だろうか。ここで与えられている文脈の中で「態」の選択が行われたのだとすると、《Les vagues *se brisent* aux rochers》（述部核が「代名態」に置かれた文）に対応する、「態」の転換を経る前の文があるはずだが、それは正確には何だろうか。

確かに Le vent *brise* les vagues aux rochers は文として可能である。だが Les vagues *se brisent* aux rochers という文は果たして le vent を動作主として隠し持った文と考えるべきだろうか。むしろ *briser* les vagues の第一参加者（「主部」）の位置をうめることが難しいから、そしてまた話者の発話意図から見てそのことが少しも重要でないから、「態」ゼロの文の第一参加者（「主部」）を話者の選択の外にはじき出

したかったのではないだろうか。そしてそのことをまさしく可能にしてくれたのが、フランス語に準備されていた「代名態」の仕組みだったのではないか。

ことばを換えて言えば態ゼロの表現：

《(　?　) *brise* les vagues aux rochers.》

をまさに回避せんがために、もう一つの、代名態による発話：

《Les vagues *se brisent* aux rochers.》

の可能性を試す必要がここではあったのではないか。

6-2. 本来の受動態、例えば Le pont *sera construit* rapidement dans deux heures. 「橋はすばやく、二時間でかけられるだろう」は、それに比して、明確に建造者を想定した表現である[13]。

たしかにここでも、「態」（受動態）の表現を取り巻くまわりの統辞構造はよく似ており、建造者は表現されていないのである。だから統辞構造から見ると、我々は類似の問題を前にしているように見えるかもしれないが、しかし、ここには決定的に違うものがある。それが受動《態》の表現の意義特性である。その特性をひとまず具体的に：

〔A〕『橋がひとりでに出来上がるとは誰も考えていない』

という表現で、ここでは言い表しておこう。実は、最終的にはこの表現では不充分であるが、その点を改めて問題にする時まで（§6-6)、ひとまずこの表現で満足しておくことが出来る。つまりここでは、事態は建造者により進められていることが了解されており、ただその事態が建造者の側からでなく、《被作用項》である「橋」の側から間接的に眺められている。

言い換えるならこの表現は、おもてに示してはいないが、建造者の存在をはっきり想定した上でそのことを不必要だから話題にしてはいない。話題にしてはいないが《受動態》を通じての事態の表現が、「作用項」の働きかけをはっきりととらえている。

先程、能格構造と体格構造が混在しているトンガ語を見た時に（§3-2-2)、そこで《受動態》の要素が《もし正確に機能しているとすれば》、その表意機能が明確に（「被作用項」を通じて）「作用項」からの働きかけを補捉しているに違いないと想定したのは、まさにこの点があるからである。

6-3. 代名態の場合はその点が甚だ違う。代名態の場合、 Les vagues *se brisent*...

---

(13)受動態を、少なくともフランス語の現実の中で見る限り、これは一種の複合形であり、受動態は複合形（copule + pp)の応用編として成立しているということができる。複合性（内容的には《完了》）の特徴は用法の到るところに顔を出している。

においては、「波」(vagues) が《自ずから砕ける》場合も事態の可能な幅の中に入っているから、厳密に言えば態ゼロの表現 (たとえば Quelque chose *brise* les vagues...) とでは《事態の幅》(extension) が違う。態ゼロの表現は当然、可能であるが、代名態の表現 Les vagues *se brisent* ...の方が表す事態の幅が広いから、与えられた文脈の中では「態」ゼロの表現はお呼びでないことが起きる。態ゼロの表現と代名態の表現が拮抗したとき、事態を表現する幅が食い違うため微妙な表意機能の対立が生じてしまう。そうなると、片方がもう一方と同じ事態を、異なった《態》によって表現しているとは、もはや到底、言えなくなってくる。だとすると話者の《選択》も、影が薄いと言いたくなるのではないか。話者の《選択》は同じ文脈の中でなされて初めて、実際的な意味をもつのではないか (§6-7)。

6-4. もう一つ別の例を見てみよう。Là, le mur *s'abaisse*. 「そこで塀は低くなっている」においても、勿論、意味は違うが Là, on *abaisse* le mur. 「そこで、われわれは塀を低くする」が充分に可能である。だが今、問題なのは、そこらで塀が《低くなっている》という一つの事実である。この事実は恐らく Le mur *est bas* といってもよい程のものなのだ。この ... *est bas* には行為性または《働きかけ》(「低くする」) がない。一方、代名態の ... *s'abaisse* には、そのような行為性または《働きかけ》の含まれない場合まで入っている。これは on *abaisse* le mur では表現できない部分である。

このように ... *s'abaisse* には、何かが《自ら低くなる》場合まで、それが表す事態の可能な幅の中に入っているから、厳密に言えば「態」ゼロの表現 (on *abaisse*) とでは事態の幅が違う。だからここでも「態」ゼロの表現はお呼びでないのである。

6-5. さてそこで、もう一度、受動《態》の表現の意義特性に戻ろう。先程、受動文では、おもてには現れていなくても《作用項》の働きを想定した事態が問題になっていることを強調した (§6-2)。その点は勿論、態ゼロの文も同じである。ともに、作用項の働きを前提にした事態をあらわす。たとえば：

La lettre *sera écrite* avant midi. 「お昼までには手紙は書かれていよう」

On *aura écrit* la lettre avant midi. 「お昼までには手紙を書いておきます」

は共に、間接的にあるいは直接的に書き手の行為を問題にしている[14]。それに対して代名態の文:

La lettre *s'écrira* vite. 「手紙はすばやく出来上がるだろう」

---

(14) たしかに Cela *est situé* ... は時に動作主の働きかけを度外視して用いられる場合がある：Paris *est situé* au centre de la France du nord 「パリは北フランスの中央に位置している」。この点は、§6-8 で代名態の選択について述べるところと大いに関連がある。Cf. 注 (15)。

は、手紙の出来に焦点を合わせた文である。だが、だがここでも、《事態》は書き手の行為によってしか進行しないのではないか。橋が建造者がなければ、架からなかったように、手紙も、書き手がいなければ書かれないのではないか。勿論その通りであり、事態は、受動態と代名態のもとで、このように完全に重なることが少なくない。そのことは当然、予期されていることであって、受動態と代名態の差は《事態》の問題ではなく、それぞれの表現が思い思いにどのようなやり方で、その事態を一定の特性としてすくい上げるかの問題でなくてはならない。

6-6. 意義特性は《事態》ではない。しかし意義特性は事態を《知》の形で伝えるものであるから（§1-2)、そこにしばしば、一種の混同が起きる。とりわけ《事態》と《知》を示す《ことば》のレベルで混同は起きるのである。

ここではやや乱暴な手段を用いて、《知》の identité を示さなくてはならない。人が手紙を書く、 —— そしてその結果、手紙があるやり方で書かれる —— という事態を、今、我々は代名態を用いて示した。この代名態は知の形式としては、《人が介入しない事態、事柄が自ら進行する事態》を示す代名態と同一である。背後にある《事態》に全てを戻せば、一つ一つが違うことになるが、それを一定の特性のかたちで取りまとめた結果として見るならば、つまり代名態が《知》として取りまとめたものを見るならば、そのレベルにおいてはそれらは別物ではあり得ない。二つの《知》は同一である。そのことを具体的な例で示そう。

《ひとりでに進行することも
ありうることがら》（＝知）として眺められた事態 ：

La lettre tombe dans l'assiette et *s'imprègne* de gras.

「手紙は皿の中に落ち、脂が滲みてしまう」

La lettre *s'est coincé* sous la porte et *se déchire.*

「手紙はドアの下に挟まり、裂けてしまう」

Elle tape la lettre et elle la voit *s'écrire* en rouge.

「彼女は手紙をタイプする、と手紙は、赤で打たれて出てくる」

Cette lettre ne *se lira* pas si facilement.

「この手紙はそれほど楽には読めない」

このように事態には人間が介入していても、していなくても、その要因を特性の中に取り込まずに、《被作用項》の側だけから事態の進展を見る事が出来る。それを可能にするのが代名態の役割である。

受動態はそれに対して ：

〔B〕『作用項（人間）の、事態への介入を明確に特性の中に取り込む』

わけで、それが受動態を通じての事態の捉え方であろう。先程〔A〕で受動態の特徴を見ようとした時には、「橋が《独りでに出来上がる》とは誰も思っていない」ことを前提として橋が架けられる事を述べるのが受動態であるとした。それはその通りあるが、受動態が《独りでに出来上がるのではない》という事態の性格を示すわけではない。もしそうだとすると、《独りでに出来上がるのでないもの》は、先程の手紙も含めて、すべて受動態で述べなくてはならないことになってしまう。そうではなくて、むしろ代名態が《独りでに出来上がる》ことも《ありうる》事態を、そのような《知》の形式ですくって表現し、一方、受動態の方は、〔B〕で述べたように、「作用項」の介入を積極的に《表現の中に取り込む》点に特徴をもつ。

《知》の形式は、当然、個々に事態を扱うより幅広く事態を纏める。もともと、事態を《潜在性》(latence) のレベルで扱うのが《知》の特徴である。この点については、潜在性の活用の問題として既に、大まかに、§4-1 で述べてあるので参照願いたい。言語において《潜在性》の活用が絶えず問題になるのは、言うまでもなく、言語が本質的に《知》の形式であるからである。

6-7.《選択》の問題を考える時に、やや面倒なのが文脈の問題である。一定の文脈の中で複数の表現が使い分けられる（選び分けられる）場合に初めて、我々は諸単位の自由な《使い分け》を考えたくなるのではないか。

しかし勿論、人間の能力は本来、文脈を越えて広がるものである（*cf.* §§6-8, 8-3, 脚注(18)）。言語能力も例外ではない。そうなると言語単位の《選択》の問題を同じ文脈の中に閉じ込めて置こうとすることは決して得策とはいえない。

先に受動態の対極には行為性（積極的働きかけ）の要因が想定されるといった（§4-1)。それに対して、代名態は本来、「積極的働きかけ要因」を持つ他動詞（*ex.* briser, abaisser, etc.）を起源とする自動詞的表現として成立するわけだが、そのとき既に行為者（作用項）の働きをカッコに入れた上で焦点は《事態の実現》そのものに移っているから、結果として生まれる自動詞的表現には、対応する「積極的働きかけ要因」を含んだ他動詞が欠けているかの如き観を呈するのである。表意機能が異なれば、それぞれが異なった文脈の中で必要とされ、求められることになる場合があって当然である。《態》の選択がいつも同じ文脈の中の、《作用項》の側からも《被作用項》の側から自由になされる選択に限られるかの如く考えるのは、明らかに大きな幻想であろう。それ故、態ゼロ（能動態）の代わりに代名態が選択される時、システムのレベルでは両方の態が《可能》であっても一定の文脈の範囲では態ゼロが《無効》である場合が当然生ずる。それが§§6-1, 6-3, でみた（ ? ）*brise* les vagues, etc. の場合であった。

6-8. 我々の言語能力が確かめられるのは、単位を、より大きな結合に変えていく過程においてである。たとえば第1次分節の単位をただ記号素の形だけで知っていることは、その言語を操作する能力の、いわば端著をものにしたと言えるに過ぎない。単位をより大

きな結合に変えていく過程が人間にとってきわめて重要なのは、言うまでもなくそれが、より限られた数の要素から無限定のもの、無限のもの、つまり無限にひろがる《ことば》を作っていく過程であるからである。

さて、そういう過程で、システムのレベルでは《可能》だが具体的な文脈の中では選択の一方の項が《無効》であるという状況が起きる。これは、実は選択がもともと存在しないのではないのだから、対立の中和 (neutralisation) が起きているために表面的には選択の可能性が見えなくなっている場合に他ならない[15]。

事実、あとで見るように (§8-2)、代名態を含む構文には二種類ある。一つは、Il se réveille à *un moindre bruit qu'on fasse* 「彼は人がちょっと物音をたてても目を覚ます」や、Il se trouble devant *une vérité* 「彼はある真実を前にして混乱する」のように、態ゼロの文で《働きかけ》あるいは《起動》の要素として働くものを文脈に含む構文で、この二つの文では ...un moindre bruit qu'on fasse「人がたてるちょっとした物音」や ...une vérité「一つの真実」がそれに当たる。この二つの文はそのような《起動要素》を主辞に仕立てて、二つの態ゼロの文にすることが出来る：*Un moindre bruit qu'on fasse* le réveille; *Une vérité* le trouble. もう一つは、Il se réveille chaque matin à sept heures 「彼は毎朝、7時に目覚める」や Il se trouble facilement 「彼はすぐ混乱する」のように、《起動要素》となりうるものを一切、排除した文で、これらの文の中には《実現要因》(réveiller, troubler) とその《固有の参加者》(事態の生起する「彼」) があればよい。この文脈では態ゼロの文が生まれる可能性は全く無い。

一般に、一つの動詞の使用をめぐって現代フランス語では、 I.(a) X fait Y. (b) On fait Y. II. Y se fait. III. Y est fait. のようなパターンの間で多様な選択が許される。Yが右側に来ていれば態ゼロ (能動態)、左側に来ていれば II.代名態か、III.受動態である。 II. III. は、作用項 (X)を任意使用の項 (主辞以外の項) にするタイプである。当然、 II. III. の文には作用項が含まれないことがしばしば生じ、その結果、そこに含まれる資料からでは I. のタイプの文が作られない事が起きる。

上で見た代名態の二種類の文を見ると à un moindre bruit qu'on fasse 「わずかな物音で」も facilement 「簡単に、すぐ」も、ともに、いかに表現力に優れていようとも統辞的には任意使用の項である。un moindre bruit qu'on fasse は言語図式の中で作用項として使える (*Un moindre bruit qu'on fasse* le réveille) が、それは主部の位置で、主として述部の《働きかけ要因》《起動要因》に支えられてのことであろう。主部の位置

---

(15) 全く同じことが受動態でも生じる。 Cela *est situé* ... は On *situe* cela と対立する (両者の間には選択がある) が、Paris *est situé* au nord de la France のような文脈では、一般にもはや On *situe* ..の選択はない。なお、A. MARTINET, 《La notion de neutralisation dans la morphologie et le lexique》, *Travaux de l'Institut de Linguistique*, 2, 1957 を参照。

を外れてこのように任意使用の項として現れると、同じ言語要素であるのにその作用性はやや、おぼろげになってしまう。言語によく見られる、あの潜在性の底に沈んでしまう。それでも作用性は文脈の整備により相手に伝わるが、主部の位置で述部の意義構造に支えられていた時とは様子が全く違う。態ゼロ（1.）でも情報量を極度に抑えれば（*cf.* (b) On）作用項は極めて形式的になるが、それでも作用項の側からの《起動性》は残り、Il se réveille facilement 「彼はすぐ起きてしまう」と On le réveille facilement「彼を起こすのに手はかからない」とでは当然、含みが、全く違って来よう。代名態はこのように《作用項を消してしまう》か、それとも《潜在性を通して》しかそれが見えないようにする仕組みである、と考えて置かなくてはならない。そこから言えることは、《態ゼロ/ 受動態》の場合と違い《態ゼロ/ 代名態》の場合は、その対立関係がそれほど簡単ではないということである。

代名態は、態ゼロの統辞構造を根本的に造り直すから、作用項も様々な前置詞の後ろで、表向きは《場所》その他を示す補辞に造り変えられて姿をあらわす[16]。だがそのような作用項が、《潜在性》を通してであれそこにある限り、同じ文脈の中で話者は自由に《態ゼロ/ 代名態》を選び分けることができる（つまり、両者の間の対立は維持されている）。作用項が全面的に姿を消したときに初めて態ゼロは形として姿を消し、両者の間の選択はなくなる（対立はなくなる）。この時の代名態は、たしかに形は代名態の形を備えているが、一面、《態》を動詞述部から分析的に切り離すことは完全に不可能になっており（*cf.* Il *se trouble* facilement「彼はすぐ慌ててしまう」）、内容的には態ゼロの自動詞のようなものになっている、といえば判りやすい。ここで《態ゼロ/ 代名態》の対立が無効になった（《中和した》）という意味は、ほぼ、以上のような内容をもっていると考えておいてよいだろう。

7．選択のない代名動詞　：いわゆる「本質的」代名動詞

代名動詞の中には「態」の働きを含まないものがある。どのような代名動詞がそうなのか、「態」の働きを含まないということはどういうことなのか、どのようにすれば、その事実が確かめられるのか、そのあたりがはっきりしなくては、代名「態」として働く代名動詞を、代名「態」として働かない代名動詞から明確な形で囲いわけることができない。ということは、代名「態」として働く代名動詞の研究にも差し支えが生じるということである。だからここで二つの代名動詞をはっきり分けておこう。

7-1.　最初に、Dictionnaire Robert その他が挙げている être moqué の例を見ておこう：

---

(16) Il se trouble "devant" une vérité.「彼は一つの真実を "前にして" 混乱する」
Il se réveille "à" un moindre bruit.「彼はわずかな音 "で" ("において")目を覚ます」

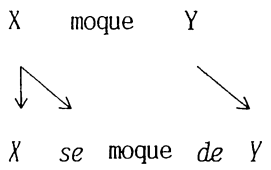
"Il ne me déplaît pas d'*être moqué*"
(André GIDE, cité dans le *Dictionnaire Robert*)

という文は、

Y est moqué par X / X moque Y

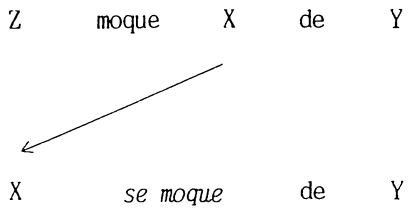
という構文型を土台にしている。この X moque Y という構文型を、現在一般に用いられている X *se moque de* Y と比較してみると、二つの文の主部 X が一致し，また 最初の文の Y と二番目の文の Y が、ともに主辞でないという点で一致している。se は加わったが、そのことにより最初の文の目的辞が二番目の文の主辞になることはなかったのである。事実、二つの文の主辞は一致しており、moquer Y の目的辞 Y が se moquer の主辞に立つことがない。むしろ Y は、最初の文では目的辞として il moque を補い、第二の文では de Y という形で il se moque を補っている（第二の文では形式上、目的の位置が使えないので、それに次ぐ第三の参加者の位置 — deで示される — が用いられているのである）：

Fig. 9



se moquer de Y が代名「態」であるためには他動詞 moquer に「（誰々を）軽蔑させる」という使役的な意味が必要であった[17]。（丁度 troubler が「混乱させる」という意味をもち、それが se troubler で「混乱する」となったように。）つまり moquer がそのような使役的な意味をもち、 moquer X de Y が「X に Y を軽蔑させる」という意味を表わしえた場合に初めて、

Fig. 10



(17) 目的辞として「人」が立つ場合そのことが必要である。

という代名「態」が成立するはずのところであった。しかしそういった事実背景は全く存在しない。 moquer は「軽蔑させる」ではなく「軽蔑する」であって、それゆえ X moque Y も X *se moque de* Y も、ともに「X が Y を軽蔑する」という意味なのである。だとするとこの代名動詞は何のために生まれたのだろうか?

se は形式上は moquer の目的である。しかし X se moque は決して「X が自らに(誰かを) 軽蔑させている」でも「X が自らを軽蔑している」でもないのだから、これは真の意味の目的ではなく、「見せかけの目的」である。この見せかけの目的は、結局、主体が自分自身 (se) に対して働きかける —— 自分をより積極的に事態に関与させる —— ことを表すためにのみ、ここに挿入されていることになる。この位置で自分自身をもう一度持ち出すことによって、事態に積極的に関与することを示そうというのである。そのような se は他動詞の moquer がもつ通常の統辞論的働きの範囲をこえて、本来はなくてよいものとして (余剰的に) そこに導入されるものであるといわなくてはならない。このような se がとりだすのは、むしろ、事態が何であるかということよりも、事態への積極的な参加の姿勢そのものである。

7-2. 日常言語の感情が強くからむ経験領域では、行為者が「本気」で事態に加わっていることをしめすことは事態の表現性を大いにひきあげることに役立つに違いない[18]。そのようにして意味を強められた表現 (*se* moquer *de* ...) は、やがて古い表現を駆逐してしまうにちがいない。日常言語の世界はたえずより強い表現を求めそれを当たり前の表現に変えていく世界だからである。こうして通常の他動詞表現に、強意の代名動詞表現がとってかわる。

しかし se moquer de の用法が確立した後に生まれ、se を伴わない moquer を習得する機会に全くめぐまれなかった世代にとっては、 se moquer de はもはや強意の表現ではありえない。彼らにとっては il le moque はもはや考えられない形であって、il se moque de lui だけが使用に耐える形式だからである。そうなれば se moquer de の強意性はもはや姿を消している。形は昔のままだが言語価値からは〈強意〉がすっぽりと抜け落ちている。このように考えると、この型の se は日常的な強意表現としての代名動詞を生むときにのみ〈主体〉の積極的参加という強意性を持ちうるのであって、古い型の表現が忘れ去られればこの強意性も忘れ去られる。その位置で se / ゼロ の対立が生きているあいだだけ (se / ゼロの両者がともに用いられているあいだだけ) se は一種の強意をあらわすのである。ゼロの可能性が消えれば se は完全に無意味な、ただ形式的にのみ必要な存在に転落する。

同じような現象は、自動詞 (たとえば exclamer)が代名動詞化する場合にも見られた現象である。このような場合があるのを見ると、 se が他動詞の目的 (直接または間接) の

---

(18) Antoine MEILLET, *Linguistique historique et linguistique générale*, tome 1, Paris, Champion, 1921, p. 197

役割からは全く離れて使用される場合があることがわかるが、ここでも se は〈主体〉の積極的関与をあらわすだけだから、古い自動詞表現が駆逐され、忘れ去られれば(つまりゼロの可能性がなくなれば)、se の強意性も消え去る。

7-3. だが、時として強意が、行為の内容をより積極的なものに変えてしまうことがある。たとえば「(遠くに)ちらりと見かける」という感覚的受容をあらわす apercevoir(感覚動詞)が *s'*apercevoir となり、積極的な「認知」「認識」をあらわす(s'apercevoir de ... = 「... を明確に認識する」)場合などがそうである。このときは、古い表現と新しい表現とは全く別の表現として両立する:

Il *aperçoit* son ami.	「彼は友人の姿をちらりと見かける」
Il *s'aperçoit d'*une erreur.	「彼はそれが誤りであることをはっきりと認識する」
Il *attend* une chose.	「彼はあることを漠然と待っている」
Il *s'attend a* une chose.	「彼はあることが起きることを期して待っている」
Il *entend* son voisin.	「彼は隣人のたてる物音を聞く」
Il *s'entend avec* son voisin.	「彼は隣人とうまくいっている」

8. 結び:

8-1. 主辞を持つ言語では、態を変えることによって、主辞以外の言語要素を新しく主辞の地位に押し上げる。主辞をもたない言語でも、多くの述部と共存し、目立たない、無標に近い統辞機能があるが(例えば能格言語の absolutif)、態を変えれば他の項を埋めている要素を、そのような統辞機能(《第一統辞機能》)を担う項の地位に押し上げる。一般にどの動詞述部にも、態ゼロのとき第一統辞機能を担う参加者が決まっているが、我々はそれを《第一参加者》と名付け、そして態の選択によって第一参加者と役割交替する参加者を《第二参加者》と名付けよう。そのように約束すれば、《態》は《第二参加者》を《第一参加者》に格上げする為の仕組みであるといえそうだ。たしかに§3-2-1 で見たような例外的な状況もある。しかしここでも《態》は、同じ言語の態ゼロの場合にくらべて、その表意機能で問題の統辞機能を強力に補強しようとしているのが見える。それ故、態は《述部の意義構造を組み換える》ことによって、《第二参加者》を《第一統辞機能》の方へ押し上げるか(通常の場合)、あるいは少なくとも、《第一統辞機能》と述部とのつながりを、述部の意義構造の組み換えによって強化しようとする仕組みであると理解しておくことができそうである。態については後段で、もう一度、それを言語の働きの全体の中に位置づけて整理するが(§8-5)、ここではひとまず、以上のような捉え方で満

足しておこう。

8-2.　フランス語の受動態、代名態の場合をよく見るならば、態が決して構文の単なる形式的な組み換えではないことは明らかである。この二つの態は共に同じ第二参加者を第一統辞機能の方へ押し上げるが、そのための述部の《意義構造の組み換え方》が甚だ違う。共に、いわゆる《被作用項》を主辞に格上げするが、代名態の場合は、少なくとも表現の上では、いわゆる《作用項》の働きかけを全く無視して、あたかも被作用項が作用項に生まれ変わったかのように振る舞う。

《Les vagues *se brisent* ... 》「波が... くだける」（§6）という現実の分析が、《(?) *brise* les vagues ...》「(?) が波をくだく」というもう一つの分析の可能性を頭から排除しているように見える状況がしばしば生じうるのはそのためである。同じくまた《Le mur *s'abaisse* ...》「塀は... 低くなっている」(*ibid.*) が《(?) *abaisse* le mur... 》「(?) が塀を低くする」という別の分析の可能性を閉ざす状況が生じうるのもそのためである。

システムのレベルでは、一般に《X *brise* les vagues 》《X *abaisse* le mur 》は百パーセント可能な表現である。さらに X *brise* les vagues / Les vagues *se brisent* にしても、X *abaisse* le mur / Le mur *s'abaisse* にしても、システムのレベルで共に可能な選択の範囲をなすだけでない。一般的には、対立の一方の項をなす《態ゼロ》のモデル（X *brise* les vagues, X *abaisse* le mur）が利用可能な状況（文脈）では、他方の《代名態》のモデル（Les vagues *se brisent,* Le mur *s'abaisse* ）も、視点を《起動》《働きかけ》から《事態の実現》に移すことを前提にすれば利用可能となる。

では、この態ゼロの分析モデルが与えられた文脈で排除されるということが起きるのは何故か。代名態の場合、少なくとも表現の上では、いわゆる《作用項》の働きかけを全く無視して、あたかも《被作用項》が —— 新しい述部構造（SE + 動詞）の —— 《作用項》に生まれ変わったかのごとく振る舞う。そのため、態ゼロ⇒代名態の転換は可能だが代名態⇒態ゼロの転換が不可能な場合が生じる。実際に選ばれた《態ゼロ》の背後には、潜在態としての態ゼロと代名態とがあり、態ゼロの選択も代名態の選択も可能であるが、実際に選ばれた《代名態》の背後には潜在態の態ゼロがない場合があるといってもよい。代名態には態ゼロとの対立を、持つものと、持たないものとがあることになる。

8-3.　我々はひとまずこの現象を、選択の揚棄、対立の《中和（neutralisation）》という形でとらえたが（§6-8)、そのことの当否はさて置くとして[19]、代名態の場合これ

---

(19)　ことの当否をさらに詳しく論ずるのは別の機会に譲る。しかし一定の文脈の中での対立の消失は、その同じ対立が、別の文脈の中で使い分けられている事実を消すことはできない。一定の言語における平均的な話者の言語能力は、ただ、その人間の言語使用を支えるだけでなく、対立（使い分け）の実践を通じてその対立の有効性に触れ、こうして実際の言語使用の中に、自分を肥らせるのに必要な養分を汲み取っているものである。たとえば態ゼロと代名態が対立する文脈で話者がその二つを使い分けることは、同時に話者

うは比較的よくお目に掛かるケースである。受動態の場合にも、これとパラレルの現象が無いわけではない。システムのレベルでは On le *situe* ...「それを... 位置させる」 / Il *est situé* ... 「それは... 位置させられている」は共に可能であるが、Il *est situé*（受動態）の方にはまた Il *s'est situé*...（代名態）に由来する il *est situé* が含まれ、この系列は、例えば Paris *est situé* au nord de la France 「パリはフランスの北部に位置している」のように、態ゼロのモデル（On *situe* ...）を不可能にする場合を含む。従ってここでも、実際に選ばれた《態ゼロ》の背後には、潜在態としての態ゼロと受動態とがあり、態ゼロの選択も受動態の選択も可能だが、実際に選ばれた《受動態》の背後には、潜在態の態ゼロがない場合があるといわなければならない。

しかし Paris *est situé* ...「パリは ...位置する」のような、対立する態ゼロのモデルをもたない受動構文は一般的に代名態のない言語でもあり得ると想定される。受動態そのものの中にも、《被作用項》が《作用項》の働きかけを無視して、あたかも自分が《作用項》に生まれ変わったかのように新しい述部構造 *(est + pp)* との結合を求めていく潜在的必要が多少なりともあるはずである。つまり、受動態にも、本来の《作用項》からの働きかけを逃れて自動詞化する潜在的必要はあるはずである。だがそのような場合を除けば、受動態の意義特性は本来の《作用項》への依存度が高い。

代名態の領域ではまさに《被作用項に作用が及ぶ》範囲で事態（procès）の実現を捉えようとする。だからここでは、作用項の介入を完全に度外視した形で表現が成立する。表現のレベルで作用項が不必要であるだけではない。事態（procès）の実現を捉える意義特性の中で既に、作用項の存在が完全に無視されている。その点が受動態の場合と全く違うといえよう。受動態の場合は受動表現そのものが作用項の存在なしには想定できない。§6-6,〔B〕が定式化しているように、受動態の方はその周辺で作用項の表現が明示されているかいないかに関係なく、本来、態の表現そのもの(Le pont *est construit*...) が、作用項の働きを取り込み、前提としなければ成立しない。

8-4. さて、《態》の役割の問題に話を戻そう。勿論、たとえば代名態で問題にされているのは《事態》そのものではなく《表現》であり、表現の中にすくい上げられた《知》の形式である。作用項の存在を我々が知らなかったり、知りたいと思わない現象（「波が《砕ける》」）もあるが、我々が作用項の存在を敢えて無視する現象（「手紙が《書かれる》」）もある。事態そのものは当然、作用項の働きによって成立するものであってよい（手紙の場合など）。事態のレベルで見るならこの二つは別のタイプのものだが、我々は

が、即自的(sans le savoir)にその能力を確認し、確実にすることである。ここに人間の《言語能力の尽きない根源》があるが、また平均的な話者は実際には対立（使い分け）の効果のない文脈の中にまで、言語能力の利用領域拡大を図るものである。ただそのような文脈の中では、話者は対立（使い分け）の実践を通じてその対立の《有効性》に触れる訳ではないから、自分の言語能力を肥らせる養分を汲み取ることはできない。いいかえれば、《対立の中和》のある文脈はそのような文脈である。話者の能力はそこでも生きているが、その文脈の中の消滅した対立から言語分節について学び、受け取るものはない。

それを同一の表現形式で扱い、同一の《知》の形式として扱うことができる。我々が作用項の存在を《敢えて無視》すれば、両者は同一のものとなるのである。《知》はこのようして、ある形式に従って事態を大きく纏める。そこで我々の目に《事態》（現実）と見えるものは、実は我々にすくい上げられるかどうかが、やや、あやふやな、《潜在性》(latence) の状態で浮遊する様々な《特性》からなっている。そのような特性のいくつかを、我々は《知》の要素としてすくい上げる。そのしくみには当然、言語もかかり合っている。この小論では一貫して、そのような観点から《態》の問題を考えようとしてきた。

§3から§6にかけて扱われた諸問題をもう一度、その観点から纏めるなら、およそ次のようになるだろう。

8-5. それぞれの言語に述部に補辞をつなぐ最も簡素な、《無標》に近い統辞形式があるが（対格言語における sujet や能格言語における absolutif の項がそうである）、そのような統辞形式に対しては述部の方でも統辞形式を支える特有の意義特性をつくり出していると考えられる。統辞形式は簡素であっても述部の意義の支えで以て充分な結合がなし遂げられるようになっているのである。この想定は様々な言語の現実から裏付けられる。我々が統辞形式と態の《複合形式》という概念で表そうとしたのがそのような統辞形式と述部の共同作業である。この場合、一つ一つの《複合形式》の重みを仮に1と置けば、統辞形式の簡素さと述部においてそれを支える意義特性の重さは、反比例の関係にあると考えておいてよいだろう。こうして統辞形式の簡素さとそれを支える意義特性の重さが反比例の関係にあるという前提の上に立つなら、対格言語における sujet の項、能格言語における absolutif の項の一般性、頻度から見て、それらの項の統辞形式が軽い（統辞機能の情報量が少ない）だけ、それを補う述部の意義特性の重みが極めて重いことは疑いをいれない。

態はまさしく、そのような意義特性を組み換えるために存在するもののように思われる。その点はトンガ語やバスク語の場合のように対格構造と能格構造の混在が見られる言語にあっても本質的には同じと考えてよい。能格構造の述部には本来、受動 / 能動の区別がないわけであるから、勿論そこで absolutif の項を支えている述部の側の意義特性には受動的位相の入り込みようがない。それに対して対格構造の受動態では述部はその《意義特性》として、被作用項の側から見た事態の《受動的実現》を強調する。（§3）

態はこのように、述部の《意義特性を組み換える》ためのものである。態ゼロは作用項の側からの《働きかけ》を強調する意義特性をもつ。この特性は個々の動詞の語彙特性を超えて被作用項と対立する《作用項》を生み出している。態ゼロのこの働きに対して、受動態は《被作用項》の側からみた《受動的実現》を強調し、また代名態は同じく《被作用項》の側から見た、受動的位相の全く介入しない、事態の《非受動的実現》を強調する。（§4）。

8-6. 最後に、代名態への転換に際して行われる述部の意義の組み換えについて少し見

て置こう。代名態の中心をなしているのは、被作用項を目的辞から主辞に押し上げるタイプのものである (X trouble Y → Y se trouble)。そこで観察される述部の意義の組み換えは ：

Fig. 11

《作用》 ： 作用項 ⇨ 作用 ⇦ 被作用項
(X) (trouble) (Y)

《起動部分》 ： 作用項 ⇨ 作用 (X trouble)
《実現部分》 ： 作用 ⇦ 被作用項 (trouble Y)

の実現部分をまさに起動部分から切り離して独立させるために行われる ：

Fig. 12

作用 ⇦ (被) 作用項 (trouble Y)
(目的)
↓
(被) 作用項 ⇨ SE 作用 (Y se trouble)
(主辞)

ここで《SE 作用》が表すのは、作用そのものが、《非受動的》に、しかも《(被) 作用項》を軸に組み換えられたものであるが、とりわけ、実現部分が起動部分から切り離された瞬間に被作用項の《被》は意味を失っていることを忘れてはならないだろう。《(被) 作用項》は、いわば《疑似・被作用項》である。前身である《被作用項》とのつながりを明らかにしておくために《(被) 作用項》とするが、その中身は新しい《作用項》、《新・作用項》である。

もともとこの組み換えが捉えにくいのは、《非受動的》な《作用》を、相も変わらず《被作用項》を軸に捉えようとするからである。それは統辞概念としてはやや捉えにくいものであるに違いない。被作用項は、アプリオリーに《受動的》であると考えられ易い。だから、そのような「被作用項」を概念として残しておいたのでは、いくら作用そのものが《非受動的》であることを強調しても、代名態の働きからどうしても潜在的な受動性を消し去る事が出来ないだろう。

8-7. ある言語を学習するのは、短期的な目標からいえばその言語を使えるようになりたいからであろうし、仏語学概論のような講義が大学に置かれているのも、そのような学

習をわきから援助したいからであろう。しかし言語の学習が、その言語のいわゆる「運用技術」に我々の目を釘づけにするあまり、我々の精神をそこから出られないように、がんじがらめに、その技術の中に閉じ込めてしまうだけだとしたら、そのような言語学習が我々に対してもつ意味はたかの知れたものである。言語学習の持つ本当の意味は、言語の仕組みに対して我々の目を開かせてくれる点にあろう。一言語のいわゆる「運用技術」を身につけながら、そこに人間の言語が示す仕組みの一つを読み取ること。そしてそれが自分のそれまでに出会った仕組みとは本質的に異なるタイプの仕組みであれば、そこに驚きを感じること。そのような「知」のささやかな喜びがもし初めからないとしたら、言語学習が人間の研究に、そして、人間を「知る」ことの喜びに通じる道もまた、無残に、閉ざされていると言わなければならない。そのような学習が人間精神の「解放」に役立つとは到底、思えない。

「知」にはこのように、人間精神の解放に役立つものと、そうではないものがある。言語学習が我々にその言語の「運用技術」を身につけさせるだけだしたら、その中に人間の解放に役立つ要因そのものが含まれているとは言えない。

だが言語学習が、もし単なる「運用技術」の習得だけでなく、人間の言語が示す様々な仕組みに少しづつ我々の目を開かせてくれるものだとしたら、そして学習者が、やがては、人間の言語のもつ一般的な仕組みに大きな理解を示すことができるようになるとすれば、言語学習はまさしく、「技術」（言語運用の技術もその一つである）が一般に人間に対してもつ疎外のしくみから、人間を解放するのに役立っている。我々が目指さなくてはならないのはまさに、そういう言語研究であろう。その意味では言語研究も多少とも、人間の paresse に対して戦闘的（militant）でなくてはならないと思うが、如何なものであろうか。

Bibliographie

HOHEPA, Patrick W., 《The accusative-to-ergative drift in Polynesian languages》, *Journal of the Polynesian Society,* 1969.

MARTINET, A. *Travaux de l'Institut de Linguistique,* 2, 1957.

——— *Grammaire fonctionnelle du français,* 1979, Paris, Didier.

——— *Syntaxe générale,* 1985, Paris, Armand Colin.

——— 《Agent ou patient》, *La transitivité et ses corrélats,* 1987, Centre de linguistique, Travaux n° 1, Université René Descartes, Paris.

——— *Fonction et dynamique des langues,* 1989, Paris, Armand Colin.

MEILLET, A. *Linguistique historique et linguistique générale,* tome I, Paris, Champion, 1921.

PERMUTTEFR, David M., and POSTAL, Paul M., 《Toward a Universal Characterization of Passivization》, *Studies in Relational Grammar I,* 1983, The University of Chicago Press.

WATASE, Y., 《Introduction》, *Recherches Linguistiques en hommage à André MARTINET (1990),* 1990, Tokyo.

——— 《Une vue fonctionnelle de la "voix pronominale"》, *ibid.*

——— 『代名態の役割』, 東京外国語大学論集, 42, 1991 (印刷中).

LE PASSIF ET LE PARALLELISME PARADIGMATIQUE FONCTIONNEL

Yoichiro TSURUGA

1. INTRODUCTION

La construction passive peut être caractérisée comme un procédé permettant de changer d'orientation[1] du prédicat par rapport aux expansions. Le passif est aussi mentionné comme transmettant un sens de "subir" ou d'"affectation". Là c'est le sujet qui est présenté comme subissant ou étant affecté. Mais si l'on examine quelques exemples de corpus, on voit que ni la caractérisation formelle (celle d'orientation), ni celle sémantique ne sont suffisantes.

Nous nous proposons, ci-dessous, d'abord de jeter un coup d'œil sur les constructions qui permettent, en français contemporain, de transmettre le sens du sujet qui "subit" ou "est affecté". Ensuite, nous examinerons diverses manifestations de la construction passive proprement dite, ce qui mettra en évidence ce qu'est, en fait, la ou les correspondances entre les constructions active et passive, et aussi les caractéristiques de ce qu'on appelle la voix passive[2]. Et enfin, nous essayerons d'éclaircir la place qu'occupe la construction passive dans l'ensemble des types de consctructions.

2. LE SENS "PASSIF"

La construction typique qui présente la fonction sujet comme "pasive" ou comme "étant affectée" est bien entendu la construction passive caractérisable comme: Sujet - être-Vé - par-Agent[3].

(1) "(...), et les Jeux n'ont été vraiment affectés que par les guerres."
(Le Monde, le 17.7.1976[4])

Le sujet les Jeux est présenté comme subissant l'action émanant de l'agent extérieur à lui les guerres. (Cf. W.v.Wartburg et P.Zumthor, Précis de syntaxe du français contemporain, 1958, p.194) Mais la notion sémantique de "passif" ou de "subir" ne se cantonne pas à cette construction.

Ce qui est aussi mentionné concernant le sens "passif", c'est une construction du verbe pronominal.

(2) L'art de Paul Valéry ... ne s'analyse pas: il se subit.
(exemple de K.Togeby, Grammaire française, t.I, 1982, p.422)

(3) "Ainsi s'explique l'escalade du terrorisme et de la répression, chacune des actions des rebelles entraînant des représailles qui, au cours des derniers mois, ont de plus en plus frappé les populations civiles." (le.4.2.1975)

Le verbe s'analyse de (2), par exemple, n'a pas nécessairement le sens "passif". Dans Il l'interrogea sur elle, la forçant à des précisions, l'aidant à s'analyser, l'interprétation passive est inacceptable. C'est bien entendu le contexte qui nous permet de comprendre un sens "passif" dans des constructions pronominales. Et justement concernant le contexte, il est quelquefois dit qu'un sujet de personne n'est pas ou guère possible avec la construction pronominale passive (cf.F.Brunot, La Pensée et la langue, 1965, p.369). Mais en fait, il y beaucoup de grammairiens qui donne des exemples d'un sujet de personne.

(4) Les amis de jeunesse ne se remplacent pas.
(exemple de K.Togeby, Op.cit., p.423)

(5) Un homme s'y apercevait.
(exemple de R.L.Wagner et J.Pinchon, Grammaire du français classique et moderne, 1962, p.294)

(6) Un homme s'est rencontré...
(exemple de G.et R.Le Bidois, Syntaxe du français moderne, 1971, t.Ier, p.409)

(7) Tu t'appelles Bertrand.
(exemple de F.Brunot même, Op.cit., p.369)

Ce qui est curieux à propos de la construction pronominale, c'est que l'agent par-N[5] n'est pas exprimable même si le contexte permet une interprétation passive. L'exemple suivant est difficilement acceptable.

(8) *Cette maison s'est construite en un an par un architecte de mes amis.
(Cf. G.et R.Le Bidois, Op.cit., p.408)

Ce fait même n'indique-t-il pas que la construction pronominale ne signifie ni n'implique aucun sens passif, qui n'est qu'un résultat contextuel, au moins en français contemporain[6]?

En français moderne, l'agent devient compatible si l'on ajoute un élément causatif de faire, ou autres.

(9) Pierre s'est fait renverser par une grosse voiture.

(10) Pierre s'est laissé gagner par le sommeil.

(11) Pierre s'est vu remplacer par Jean.

Ces constructions de (9) à (11) ne sont pas réservées à la transmission d'un sens passif, et il faut remarquer qu'un autre facteur (factitif, etc.) y est ajouté et que ce facteur même semble permettre la présence du syntagme agentif.

Il y a aussi des constructions impersonnelles passives.

(12) Il n'est plus parlé que de cela.
(exemple des Bidois, Op.cit., p.411)

(13) Il fut décidé qu'on irait.
(exemple, Ibid.)

La construction de (12) rend possible la passivation d'une construction intransitive, qui est en général évitée. (13) transmet le sens passif tout en ne mettant pas en relief l'idée de "subir" du sujet.

Les constructions suivantes aussi pourront transmettre un sens passif:

(14) J'ai une vitre brisée.
(exemple de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.19)

(15) Il y a un couvert de mis[7].
(exemple, Ibid.)

Et pourra-t-on refuser catégoriquement une idée passive dans l'exemple suivant?

(16) L'Arc de triomphe, on l'a construit au 19e siècle.

Et enfin il sera difficile de ne pas reconnaître le sujet qui "subit" dans les exemples suivants:

(17) L'ennemi a subi des pertes considérables.

(18) J'ai reçu un coup.

Il y a certes d'autres constructions qui permettent de présenter le sujet comme subissant une action. Si l'on accepte la caractérisation du passif par W.v.Wartburg et P.Zumthor (et beaucoup de grammairiens traditionnels)

qui disent:"(...) si le sujet est présenté comme subissant l'action émanant d'un agent extérieur à lui, cet état de choses est exprimé par la voix passive: (...)."(Op.cit., p.194), on devra accepter comme voix passives toutes les constructions énumérées ci-dessus. Le sens passif peut s'insérer dans toutes sortes de constructions syntaxiques, puisqu'il s'agit d'un sens qui n'est délimité que sémantiquement. Notre intérêt pour la construction passive n'est bien sûr pas là. Ce qui nous intéresse c'est de savoir s'il y a une construction syntaxique proprement passive qui a une certaine correspondance avec une autre construction; ensuite de voir quel "sens" est constammment transmis, s'il y en a, par cette construction passive; et enfin de déterminer la place qu'occupe cette construction dans l'ensemble des constructions.

3. CORRESPONDANCES ENTRE ACTIF ET PASSIF

Les correspondances entre constructions se rencontrent partout, mais il s'agira ci-dessous principalement de voir s'il y a des correspondances régulières entre les constructions actives des verbes transitifs et leurs constructions passives proprement dites du type: Sujet - être-Vé - par-Agent, et aussi et surtout d'examiner s'il est significatif de privilégier ces correspondances, s'il y en a, par rapport aux autres.

D'abord, tous les verbes dits transitifs n'acceptent pas la passivation.

(19) Pierre a un appartement à Paris.
*Un appartement est eu par Pierre.

(20) La maison comporte trois pièces.
(exemple de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.2)
*Trois pièces sont comportées par la maison.

Le nombre des verbes transitifs qui n'acceptent pas la passivation n'est pas négligeable, et il faut voir que la passivation n'est pas une caractéristique essentielle et indispensable de la transitivité.

Ensuite, ce qui semble correspondre à la fonction sujet de la construction passive n'est pas toujours la fonction objet de la construction active.

(21) Pierre obéit aux parents.
Les parents sont obéis par Pierre.

(22) On ne m'a pas livré (de marchandises) cette semaine.
Je n'ai pas été livré, cette semaine.
(exemple de R.L.Wagner et J.Pinchon, Op.cit., p.288)

(23) La première chute est résistée.
(exemple de M.Grevisse, Op.cit., p.1164)

(24) Il ne me déplaît pas d'être moqué.
(exemple, Op,cit., p.1165)

(25) Néanmoins les requêtes présentées au tribunal (...) seront répondues par le président de cette chambre.
(exemple, Ibid.)

Même en se limitant aux verbes transitifs qui acceptent la passivation, il y a le problème de l'aspect. C'est justement ce problème qui semble faire dire que le passif ne s'emploie pas facilement en français.

(26) ?Toute la viande est mangée par les invités.
Toute la viande a été mangée par les invités.
(exemples de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.7)

(27) "(...) et le Vietnam du Sud est désormais coupé en deux."
(le 26.3.1975)

(28) "Techniquement, rien n'est changé, (...)."
(les 23-24.5.1976)

(29) Il est aimé par cette femme.
Il a été aimé par cette femme.
(exemples de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.7)

(30) "Hélas! sociaux-démocrates et libéraux, qui disposeraient d'une confortable majorité avec quatre-vingt-quinze sièges, sont séparés par de graves désaccords." (le 2.3.1975)

(31) La ville est traversée par un grand fleuve.
?La ville est traversée par une grande voiture.
(exemples de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.2)

On peut remarquer qu'il y a des difficultés à construire des phrases passives au présent. D'abord, si l'on efface par les invités dans (26), (soit, Toute la viande est mangée), ce qui reste signifie plutôt le résultat de Les invités ont mangé toute la viande. La première phrase de (26) ne correspond donc pas à Les invités mangent toute la viande. Au passé composé, il y a une correspondance satisfaisante entre l'actif et le passif: Les invités ont mangé toute la viande - Toute la viande a été mangée par les invités. Dans le cas de (29), les deux formes passives, au présent et au passé composé, sont acceptables. Mais au passé composé, il y aurait un effet de "révocation": Il n'est plus aimé par cette femme, que n'implique pas nécessairement l'actif Cette femme l'a aimé. L'exemple (30) ressemble au premier énoncé de (29), mais sans par de graves désaccords, (soit, soiciaux-démocrates et libéraux sont séparés), il ressemblerait plutôt à Toute la viande est mangée de (26). Dans (31), il s'agit d'un même verbe traverser. On peut dire que les différences constatées entre (26) et (29) proviennent de celle qu'il y a entre les deux verbes manger

et aimer. Et une de ces différences est provoquée, dans le cas de (31), par les choix de fleuve et de voiture. C.Blanche-Benveniste appelle "statifs" les verbes comme aimer de (29), et les verbes comme manger de (26), "non-statifs". La première phrase de (31) appartient donc au groupe statif, tandis que la phrase La ville a été traversée par une grande voiture (cf. ?La ville a été traversée par un grand fleuve) est au groupe non statif. Remarquons bien qu'il n'y a aucun problème de ce genre à l'actif présent, puisque Un grand fleuve/Une grande voiture traverse la ville sont tous les deux acceptables. A l'actif présent, la distinction entre statif et non statif n'est pas mise en relief.

Le verbe traverser est statif au passif présent. Il est statif ou non statif à l'actif présent. Au passé composé, il est non statfif, que ce soit à l'actif ou au passif, d'où ?Un grand fleuve a traversé la ville, ?La ville a été traversée par un grand fleuve. Un grand fleuve ne peut être l'agent que du statif, tandis que une grande voiture ne peut être l'agent que du non statif.

(31-1) ?Un grand fleuve traversera la ville.
Une grande voiture traversera la ville.

?La ville sera traversée par un grand fleuve.
La ville sera traversée par une grande voiture.

Il semble difficile de conclure que le verbe traverser soit statif au temps simple non composé. Le futur simple, bien qu'un temps simple, est plus marqué que le présent, et même à l'actif, le futur simple met en relief la distinction statif-non statif de traverser. (Mais, peut-on conclure qu'à l'actif de tous les temps marqués —— c'est-à-dire, de tous les autres temps que le présent —— ce verbe soit destiné à être non statif?) A la voix marquée, à savoir au passif, mais au passif présent, le verbe reste statif. Au futur, il est non statif, d'où l'impossibilité du troisième énoncé de (31-1). Il ne s'agit peut-être pas seulement du verbe traverser. Par exemple, Toute la viande sera mangée par les invités ne pose aucun problème, et correspondra plutôt à Les invités mangeront toute la viande et non à Les invités auront mangé toute la viande[8].

Ensuite, bien qu'on parle souvent de l'agentif en par ou en de, tous les sujets de l'actif ne correspondent pas nécessairement au syntagme en par ou en de.

(32) La bouteille contenait ces objets.
Ces objets étaient contenus dans la bouteille.
(exemples de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.2)

(33) "Elles sont contenues dans une longue intervention de Mgr Giovanni, substitut de la secrétaire d'Etat, collaborateur le plus proche de Paul VI." (le 8.5.1976)

Si le locatif dans la bouteille de (32) correspond à la fonction sujet La bouteille, peut-on complètement rejeter la correspondance entre Pretoria recevait une mission centrafricaine et la phrase suivante:

(34) "A quelques jours d'intervalle, une mission centrafricaine était reçue à Pretoria, tandis que M.Vorster se rendait à Monrovia pour y rencontrer le président du Libéria." (le 20.2.1975)

(35) "Le gouvernement du général Gaisel sera mieux connu à l'extérieur, (...)." (le 29.4.1976)

Sans doute les fonctions coorespondant à la fonction sujet de l'actif ne sont-elles pas limitées à la fonction locative.

(36) "L'immense Papouasie-Nouvelle-Guinée est menacée d'éclatement avant même d'accéder à l'indépendance totale". (le 18.3.1976)

Par exemple, Les conflits internes menacent la Papouasie d'éclatement et Un éclatement menace la Papouasie sont tous les deux acceptables. On ne peut pas tout à fait négliger la correspondance entre le sujet Un éclatement et la fonction en de: d'éclatement. Et il y aura certainement d'autres fonctions qui peuvent correspondre à la fonction sujet de l'actif.

Enfin, il faut remarquer que toutes les formes "passives" de être-Vé n'ont pas de formes actives correspondantes:

(37) Elle sont finies.
(exemple de C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.18)

(38) Marie est trop ouverte à la pitié.

(39) "(...) et à Lai-Khe, était située la fameuse 1ère division aérienne de cavalerie, dotée d'une fantastique flotte d'hélicoptères." (le 19.3.1975)

(40) "Le temps est bien éloigné où le roi Très Chrétien et les 'papistes' de l'île verte partageaient la même exécration pour les 'schismatiques' de Londres." (le 15.3.1975)

Comme explicité ci-dessus, il est difficile de reconnaître une correspondance suffisamment stable et simple du type: N_o - Vt - N_1 —— N_1 - être t-Vé - par-N[9].

Il est vrai qu'on peut trouver ce genre de correspondances sous certaines conditions assez strictes. Elles sont si strictes que l'on sera tenté de dire que les correspondances de ce genre se rencontrent un peu partout. Jetons ci-dessous un coup d'œil sur ces correspondances entre divers types de phrases.

4. CORRESPONDANCES VARIEES ENTRE CONSTRUCTIONS

Notre correspondance peut être ici définie, suivant C.Blanche-Benveniste, comme rapport entre les "constructions syntaxiques apparentées que peut avoir un même verbe." (Op.cit., p.3) En effet, l'essentiel est qu'il s'agit d'un même verbe. Autour d'un seul et même verbe, les expansions qui restent identiques —— d'un certain point de vue —— peuvent être organisées de différentes manières:

(41) Le soleil jaunit le papier.
Le papier jaunit au soleil.

Ci-dessus, le sujet et l'objet du premier énoncé s'échangent, ce qui donne le second. Il est peut-être difficile de ne pas reconnaître le sujet qui "subit" dans le second énoncé, et la définition sémantique de la construction passive ne pourra pas exclure les énoncés du type de ce second énoncé. Remarquons qu'il y a dans (41) un changement d'orientation des expansions vis-à-vis du prédicat.

(42) On baisse le niveau.
Le niveau baissse.

Ci-dessus, l'objet du premier énoncé devient le sujet du second, et le sujet du premier disparaît. C'est comme dans le couple On a mangé une pomme - Une pomme a été mangée.

(43) On rembourse une somme à Pierre.
On rembourse Pierre d'une somme.

Dans (41) et (42), il y a un changement interne du verbe: le transitif devient intransitif. Dans (43), le transitif reste transitif, et le sujet reste le même. C'est l'objet direct et l'objet indirect qui s'échangent. Il y a en même temps un changement de préposition. Remarquons qu'en français il y a un changement d'orientation des expansions, et surtout du sujet, dans la

correspondance actif-passif. Et on peut poser ce changement d'orientation comme une des conditions indispensables à la passivation[10].

(44) Un accident arrive.
Il arrive un accident.

Le sujet du premier énoncé de (44) vient à la position de l'objet dans le second énoncé, sans, toutefois, le devenir tout à fait. Mais un accident n'est plus le sujet dans le second énoncé: Il en arrive un.

(45) Un problème reste.
Reste un problème.
Il reste un problème.

Un problème reste à résoudre.
Reste à résoudre un problème.
Il reste à résoudre un problème.

Il reste à partir.
Reste à partir.

En comparant Un problème reste et Il reste un problème, on peut reconnaître un même changement d'orientation qu'en (44). L'énoncé Reste un problème peut se situer entre les deux autres. Si un problème reste le sujet dans Reste un problème, il n'y a pas de changement d'orientation des expansions mais simplement une inversion directe du sujet. Mais si l'on suppose l'effacement du sujet impersonnel Il dans Reste un problème, alors il n'y a là plus le sujet, et il s'est produit un changement d'orientation en question. Il en va de même pour le second groupe de (45). Le second énoncé du troisième groupe semble démontrer un changement d'orientation des expansions dans Reste un problème et Reste à résoudre un problème, car il est impossible d'accepter l'énoncé *A partir reste (avec A partir comme sujet).

(46) On a parlé de Marie.
Il a été parlé de Marie.

Ce couple d'exemple est intéressant en ce qu'il ne manifeste pas de changement d'orientation important mais qu'il y a un changement d'actif-passif. Cela rappelle le cas du basque discuté dans la note 10). Mais On est un sujet personnel, tandis que Il est un sujet impersonnel. Le paradigme de On est naturellement ouvert, et il n'y a plus de place pour ce sujet personnel dans le second

énoncé de (46). Dans ce sens il y a un changement d'orientation dans le couple de (46).

(47) Pierre sacrifie sa carrière à l'action syndicale.
Pierre se sacrifie à l'action syndicale.

Fonctionnellement, l'objet du premier énoncé de (47) sa carrière devient se du second énoncé qui assume lui aussi la fonction objet. Il n'y a aucun changement, dans ce sens, entre les deux ensembles de fonctions constituant les deux énoncés. (47) est distinct des exemples de (41) à (46). Il y a des changements d'orientation dans (41) à (46), mais les deux fonctions qui se correspondent, par exemple, gardent là chacune leur paradigme identique. Dans (47), pourtant, il est difficile de reconnaître que le paradigme de sa carrière soit identique à celui de se. D'ailleurs, c'est de là que se sacrifie semble beaucoup plus intransitif que sacrifie sa carrière qui est tout à fait transitif. Rappelons que dans la correspondance type actif-passif du français, il n'y a pas et il ne peut pas y avoir de parallélisme fonctionnel, cela justement à cause d'un changement d'orientation fonctionnel.

Les correspondances données ci-dessus, et beaucoup d'autres ne sont possibles que sous certaines conditions. Et c'est justement la même chose pour le cas de la passivation.

Ce qui est syntaxiquement fondamental, c'est d'identifier, parmi toutes sortes de constructions, quels sont les types de constructions essentiels qui sont à la base de toutes les réalisations phrastiques. Chaque construction différenciée a sa propre pertinence syntaxique. Et de ce point de vue, il ne semble pas que la correspondance entre actif et passif soit particulièrement exceptionnelle.

5. CARACTERISATION DE LA VOIX PASSIVE

Il est clair, par ce qui précède, qu'il n'y a pas de correspondances simples entre la voix passive et la voix active de la classe de verbes dits transitifs. Mais il est aussi clair que parmi les verbes transitifs il y en a qui permettent une plus ou moins bonne passivation, sous certaines conditions, Par exemple, concernant les verbes dits statifs, on peut reconnaître une bonne correspondance entre actif et passif, au présent (et peut-être à l'aspect non accompli, en général). Pour les verbes non statifs, il y a une bonne correspondance entre les deux voix, au passé composé (et peut-être à l'aspect accompli, en général).

Nous allons essayer, ci-dessous, de caractériser la voix passive. Ce qui

sera en question, ce seront seulement les cas où on peut reconnaître une bonne correspondance. Dans ces cas-là, que peut signifier cette bonne correspondance? Si l'actif se transforme en passif, et vice versa, "sans que le sens profond change" (M.Grevisse, Op.cit., p.1162), quelles sont les raisons d'être de la construction passive et même de celle qui est active? Si le sens en changeait pas, l'une des deux serait suffisante.

Nous nous limitons aussi seulement à la construction du type: N_o - Vt - N_1 —— N_1 - être t-Vé - par-N_0. Et nous excluons toutes les autres constructions transmettant le sens passif. (On pourra même exclure le passif avec l'agentif en de, car ce qui nous importe, c'est de voir les raisons d'être du passif typique et en quelque sorte idéal, les correspondances entre actif et passif de tous les transitifs étant évidemment impossibles.)

Tout d'abord, il faut remarquer que l'objet de l'actif devient le sujet (et bien entendu, réciproquement). Il y a une différence fondamentale entre le sujet et l'objet en ce que le sujet est syntaxiquement, donc du point de vue de la construction, indispensable à une phrase verbale type, tandis que ce n'est pas le cas de la fonction objet. Distinguons nettement le sujet et le thème. Ce n'est pas, comme on le dit assez souvent, pour thématiser l'objet de l'actif qu'on a besoin de la construction passive. Il est vrai que le thème et le sujet sont souvent le même, mais ce n'est pas toujours le cas. La passivation peut servir à la thématisation de l'objet de l'actif, mais il y a d'autres moyens de thématisation. D'ailleurs, si le sujet était toujours le thème de la phrase, il y aurait plusieurs inconvénients, étant donné que le sujet est indispensable:

(48) On a construit l'Arc de triomphe au 19e siècle.
L'Arc de triomphe a été construit au 19e siècle.
L'Arc de triomphe, on l'a construit au 19e siècle.
Au 19e siècle, on a construit l'Arc de triomphe.

Le premier énoncé de (48) montre bien que le sujet n'est pas toujours le thème. Bien évidemment, ce n'est pas une phrase où l'on parle de On. (D'ailleurs, la notion de thème ne semble pas pouvoir être définie rigoureusement.) Certes, dans le second énoncé, on peut considérer comme thème l'Arc de triomphe qui est le sujet. Mais le même syntagme qui n'est plus le sujet dans le troisième énoncé sera toujours le thème. Dans le quatrième énoncé, ce sera Au 19e siècle qui est le thème, et non on. Dans Au 19e siècle il a été construit, c'est non il mais Au 19e siècle qui est le thème.

La thématisation se situe au niveau sémantique, au niveau du déroulement du

discours, et non pas au niveau de l'organisation des fonctions syntaxiques, car le thème ne se réduit pas à une caractérisation syntaxique et fonctionnelle. Le choix du sujet se fait justement au niveau de la construction phrastique. Le sujet est la fonction la plus importante pour le prédicat. Une fois le sujet et le prédicat choisis, la possibilité des autres expansions est limitée du point de vue de la construction caractéristique. Dans ce sens, on peut dire que le sujet est la fonction, après le prédicat bien entendu, qui "influence" ou "décide" le plus l'organisation du reste de l'énoncé. Il faut préciser que cette influence est tout d'abord syntaxique. La passivation signifie donc "mettre l'élément assumant la fonction objet à la fonction qui influence le plus le reste de l'énoncé tout en gardant le même prédicat". N'oublions pas que l'élément assumant la fonction sujet dasn l'actif assume nécessairement une autre fonction dans le passif, le sujet étant unique.

Ce qui est dit ci-dessus est une caractéristique fonctionnelle du passif. Il s'agit d'une caractérisation syntaxique qui tient à la forme de la construction.

Ensuite, ce qui semble commun, du point de vue dusens, à tous les passifs qui ont une bonne correspondance avec les actifs, c'est que le sujet y est présenté comme l'élément qui "subit" ou "est affecté". Cela ne signifie absolument pas que le sujet de l'actif ne soit jamais présenté comme affecté ou qu'il soit toujours présenté comme affectant. Ce qui nous intéresse c'est que au moins tous les passifs qui ont une bonne correspondance avec les actifs semblent avoir cette caractérisation du sens, ce qui vient, pensons-nous, de leur forme commune: <u>être</u> t-Vé - <u>par</u>-N. Par exemple, dans (39) ... <u>à Lai-Khe, était située la fameuse 1ère division aérienne</u> ..., <u>était située</u> ne pouvant pas avoir un <u>par</u>-N, <u>la division</u> ne semble pas être présenté comme étant affecté par quelque chose.

Ces deux constatations semblent à première vue banales, mais expliquent suffisamment les raisons d'être de la voix passive[11]. Si la construction est nécessaire au système syntaxique, c'est premièrement parce que le locuteur veut faire assumer la fonction la plus influente à un élément et en même temps qu'il veut le présenter comme étant affecté par quelque chose (action, etc.). La construction syntaxique qui satisfait à ces deux conditions, indépendamment de tout contexte, n'est que celle du passif.

6. INDEPENDANCE SYNTAXIQUE DU PASSIF

Les raisons d'être de la construction passive étant maintenant claires, nous

voudrions essayer ci-dessous d'éclaircir la place qu'elle occupe dans l'ensemble des constructions syntaxiques en français.

Nous voudrions tout d'abord préciser que l'essentiel de la syntaxe est la fonction même, l'organisation des fonctions, au moins dans la perspective fonctionnelle.

Or ce qui saute aux yeux, en comparant les constructions active et passive, c'est que les deux façons d'organiser sont radicalement et irrémédiablement différenciées.

Les deux ensembles des fonctions organisées sont différents. Certes, du point de vue de la correspondance discutée ci-dessus, le sujet du passif correspond à l'objet de l'actif, mais le sujet et l'objet ne peuvent pas se réduire à une autre fonction syntaxique. L'agentif en par du passif correspond au sujet de l'actif, mais de la même manière, ces deux fonctions ne se réduisent pas non plus à une autre fonction syntaxique. Il n'y a aucune fonction syntaxique qui englobe ces fonctions.

En fait, quand on dit que le sujet du passif correspond à l'objet de l'actif, que peut signifier exactement cette "correspondance"? Lorsque les grammairiens traditionnels disent comme suit, qu'entendent-ils exactement par là?

> "Les phrases contenant un verbe transitif peuvent, sans que le sens profond change, être transformées de telle sorte que le complément d'objet devient le sujet, le sujet devient complément d'agent, et le verbe prend une forme spéciale, au moyen de l'auxiliaire être et du participe passé. C'est la voix passive." (M.Grevisse, Op.cit., p.1162)

Le passage, ci-dessus, "sans que le sens profond change" peut-il signifier quelque chose de syntaxiquement bien délimitable? Il y a une différence sémantique entre les deux constructions, ce qui a été constaté dans 5., ci-dessus. Du point de vue sémantique et extralinguistique, on peut dire qu'il s'agit, dans les deux constructions, d'une même action avec ce qui assume cette action et ce qui est affecté par cette action. Plus exactement, il faut dire que les éléments linguistiques qui correspondent grosso modo à cette action, et à ces participants sont organisés et exprimés.

Nous avons vu que du point de vue de l'organisation thématique, on ne peut rien dire d'exact, concernant la correspondance actif-passif: le passif ne thématise pas nécessairement l'objet de l'actif, et la passivation n'est pas le seul moyen de thématiser l'objet en question.

Du point de vue syntaxique, il y a quatre choses a traiter: 1. dans les deux constructions, il y a la fonction sujet, 2. dans les deux constructions

il y a la fonction prédicat, bien que formellement différente, 3. le verbe assumant la fonction prédicative est le même dans les deux constructions, 4. les éléments assumant la foction sujet de l'actif sont identiques à ceux qui assument la fonction agentive en par du passif, et ceux qui assument la fonction objet de l'actif sont identiques à ceux qui assument la fonction sujet du passif.

Comparons les deux constructions fonctionnellement et paradigmatiquement.

	Fonction sujet		Fonction prédicat		Fonction objet		Fonction agent
actif	N_o	-	Vt_x	-	N_1		
passif	N_1	-	être t-$Vé_x$	-		-	par-N_o

Du point de vue de l'organisation des fonctions, il y a la fonction prédicative verbale qui est le centre de phrase, et la fonction sujet qui est automatiquement exigée par le prédicat verbale. Ensuite, il y a la fonction objet dans l'actif, qui ne peut pas être organisée par le prédicat passif du genre en question. Et dans le passif, il y a la fonction agent en par qui, lui non plus, ne peut pas être organisée par le prédicat actif. Donc les deux ensembles des fonctions organisées sont distinctes. Mais n'oublions pas qu'il y a deux fonctions bien syntaxiques qui sont communes dans les deux constructions.

On ne peut pas négliger que, ci-dessus, les éléments N_o sont exactement identiques dans les deux constructions, et il en va de même pour les éléments de N_1. Cela n'indique pourtant qu'une bonne correspondance entre les deux constructions, et nullement que N_o et par-N_o se ramènent à une fonction syntaxique identique. Il faut bien remarquer que cette bonne correspondance est plutôt assurée par leur distinction fonctionnelle explicitée. De la même manière, les deux N_1, différenciés par leurs positions pertinentes, ne se réduisent pas à une autre fonction syntaxique. Notons cependant que les deux mêmes ensembles de noms, bien qu'en assumant des fonctions distinctes, sont organisés autour d'un même prédicat.

Et enfin, remarquons qu'il s'agit d'un même verbe qui organise les deux ensembles de fonctions syntaxiques, qui organise différemment les deux ensembles de noms. Il s'agit donc d'un même monème qui organise les deux constructions. Cela signifie qu'il y a un facteur important commun aux deux constructions, mais cela du point de vue des signifiés non relationnels (c'est-à-dire, non fonctionnel). N'oublions pas qu'une même unité significative ne donne pas toujours de constructions syntaxiques qui se réduisent à une même et seule

construction fondamentale. La syntaxe ne se réduit, bien entendu, pas aux signifiés non relationnels. Si les unités significatives sont fondamentales pour la syntaxe, ce qui est d'ailleurs bien le cas, c'est justement en leurs signifiés relationnels organisateurs de constructions. Les signifiés relationnels d'un verbe ne se révèlent qu'en examinant toutes les constructions qu'organise ce verbe.

Du point de vue fonctionnel et paradigmatique (donc "vertical"), il semble difficile de ramener les deux constructions à une même et seule construction.

Comparons les constructions suivantes.

(49) Pierre aime Marie.
Pierre l'aime.
Pierre s'aime.
Marie est aimée par Pierre.

Du point de vue de la construction, donc de l'organisation des focntions, tout le monde sera d'accord que les deux premiers énoncés de (49) ont une même construction. Nous dirons même que les trois premiers énoncés se ramènent à la même, car il s'agit d'une construction qui est composée finalement des fonctions sujet, prédicat et objet. Or, ce n'est pas le cas de la quatrième phrase. Nous pouvons reconnaître un parallélisme paradigmatique dans les premiers trois énoncés mais par dans le quatrième. Le parallélisme paradigmatique n'est rien d'autre que celui qui est fonctionnel.

Tout ce qui précède aura montré que les deux constructions active et passive, tout en gardant lexicalement, donc du point de vue des signifiés non relationnels, quelques facteurs communs intéressants, ne se réduisent pas à une même construction, du point de vue des signifiés relationnels. Autrement dit, non seulement le passif n'est pas une variante de l'actif, mais les deux constructions ne sont pas des variantes d'une autre construction supposée plus fondamentale.

Mais rappelons bien que fonctionnellement les deux constructions ont deux fonctions communes. Que peut signifier ce fait?

En essayant de classifier les constructions syntaxiques en français, on voit facilement qu'il y a des constructions sans sujet: Voici Pierre, Il faut partir. (Le sujet dit impersonnel ne peut pas être considéré comme assumant la fonction sujet par rapport au prédicat, vu que son paradigme est fermé. Le paradigme fermé signifie qu'il n'y a que Il, et rien d'autre, qui est organisé par le prédicat en question. Ce n'est pas un fait syntaxique.), Peu importe, Reste à dormir. On remarquera aussi qu'il y a même des énoncés véritablement

non verbaux: "De là, sous la présidence du général de Gaulle et celle de Georges Pompidou, la répétition de conflits franco-américains que M.Giscard d'Estaing n'atténue aujourd'hui qu'en érigeant la conciliation en système." (les 6-7.4.1975) Tout cela indique que la fonction sujet peut servir à caractériser, donc à classer les constructions. Cela peut signifier que les quatre constructions de (49) peuvent appartenir à une classe de constructions qui est caractérisée seulement par la fonction sujet,les autres fonctions étant mises à part. Ce classement n'est pas tout à fait dénué de sens, bien qu'il s'agisse d'une sous-classe très large.

La discussion sur l'indépendance syntaxique de la construction passive est effectuée ci-dessus en nous limitant seulement aux passifs qui ont une plus ou moins bonne correspondance avec les actifs.

Concernant la correspondance, en général, entre toutes les formes passives et toutes les formes actives de la classe des verbes transitifs, il a été démontré qu'il n'y a rien de tel entre les deux constructions. Pour ce qui concerne les formes passives, en général, il faudra envisager aussi d'examiner la comparaison avec la construction: être - Vé/Adjectif, par exemple. (Cf. C.Blanche-Benveniste, Op.cit., p.20.) Ainsi il y aura d'autres correspondances et regroupements qu'il faudra expliciter. Il n'y a aucune raison qu'on puisse justifier pour privilégier les correspondances entre actifs et passifs.

7. CONCLUSION

Le sens passif peut être transmis par diverses constructions. La caractérisation des constructions passives ne peut donc pas être faite par le sens passif seul. D'ailleurs, la forme passive: être - Vé, ne transmet pas nécessairement ce sens passif. Ensuite, les correspondances entre l'actif et le passif des verbes dits transitifs sont très peu régulières. Tous les verbes transitifs n'acceptent pas la passivation, tandis qu'il y a des intransitifs qui permettent la passivation. Concernant seulement les verbes transitifs acceptant la passivation, il y a des restrictions sévères, comme celle de l'aspect, par exemple.

Et même en parlant des cas où il y a des correspondances plus ou moins régulières entre les deux constructions, le problème essentiel est plutôt de savoir s'il y a une correspondance fonctionnelle entre les deux constructions. Si l'on peut trouver des correspondances paradigmatiques fonctionnelles entre les deux ensembles de fonctions organisées, il faudra parler de variante syntaxique. Or, concernant les constructions active et passive, ce n'est pas

le cas. D'un point de vue non syntaxique, sémantique, peut-être, on peut reconnaître quelques bases communes entre les deux constructions. Mais du point de vue de l'organisation des fonctions syntaxiques constituant une phrase, il est clair qu'il s'agit de deux façons bien distinctes d'organiser un message (identique d'un certain point de vue non fonctionnel).

On peut bien sûr être tenté de supposer une base non syntaxique et donc non fonctionnelle qui sous-tende les constructions syntaxiques. Dans ce cas, il y a toutes sortes de correspondances à examiner (non seulement entre les constructions phrastiques mais aussi entre toutes sortes de syntagmes et même les synthèmes). Le problème essentiel sera dans ce cas de trouver un ou des critères non fonctionnels formels et plus ou moins opératoires qui permettent de construire la base en question. Les critères seront forcément du domaine des signifiés non relationnels. En tout état de cause, les raisons sont loin d'être évidentes pour privilégier les prétendues correspondances entre l'actif et le passif.

NOTES

1) Cf. A.Martinet, Elément de linguistique générale, 1960, 1973, p.127.

2) Notre cadre d'examen s'inspire de l'analyse du passif effectuée par C.Blanche-Benveniste, "Commentaires sur le passif en français", 1984.

3) "Vé": participe passé

4) Nous indiquons ci-dessous seulement la date, concernant les exemples tirés des éditoriaux du journal Le Monde.

5) "N": nom

6) Les Bidois donnent un exemple du 17e siècle où un agent se rencontre avec la construction pronominale passive: Sans cesse, vous prêchez des maximes de vivre Qui par d'honnêtes gens en se doivent point suivre. (Op.cit., p. 409) Mais M.Grevisse donne un exemple intéressant: Tout ce qui touche à l'indépendance nationale et à l'intégrité du territoire ne se décide ni à Moscou, ni à Washington, ni à Genève. Cela ne se décide à Paris que par moi-même. (Fr.Mitterrand) (M.Grevisse, Le Bon usage, 1986, p.523) Il y a des expansions en par qui se rencontrent autour des verbes pronominaux. "(...): le 'recyclage' des sommes énormes perçues par les pays producteurs de pétrole se traduit par l'accroissement continu des fonds liquides sur les marchés internationaux." (le 24.1.1975) "En Union soviétique, les crises politiques se dénouent maintenant par un euphémisme; (...)." (le 18.4.1975) "Les guerres, surtout les guerres révolutionnaires, se terminent toujours par des épurations." (le 30.4.1975) Ces expansions en par ne sont pas tout

à fait identiques à l'agent par un architecte de (8). Par exemple, on ne peut pas accepter *On a construit cette maison par un architecte (à partir de (8)), tandis que On termine les guerres toujours par des épurations (à partir du dernier exemple donné ci-dessus) est acceptable. Mais il faut remarquer aussi que les énoncés Un architecte a construit cette maison et Des épurations terminent toujours les guerres sont tous les deux acceptables.

7) En fait il y a une grande possibilité qu'il y ait un sens passif au moins là où il y a le participe passé d'un verbe transitif. Cf. "C'est d'une manière détournée que je me trouvais mise en question:(...)." (Beauvoir, Mémoires d'une jeune fille rangée, Gallimard, Collection Folio, Paris, 1958, p.405)

8) Il reste à vérifier si le verbe traverser est non statif à l'imparfait qui est quand même plus marqué que le présent.

9) Cf. Z.S.Harris, "Introduction to Transformations", 1970, p.384. "t"(de "Vt"): temps.

10) En caractérisant la passivation de différentes manières, D.M.Perlmutter et P.M.Postal donnent un curieux exemple, en basque, où il n'y a aucun changement d'orientation.

"a. Piarresek egin du etchea.
Peter-ERG make has house-ABS
'Peter made the house.'

b. Piarresek egina da etchea.
Peter-ERG made is house-ABS
'The house was made by Peter.'"

(D.M.Perlmutter et P.M.Postal, "Toward a Universal Characterization of Passivization", 1983, p.8)

Si ces exemples sont judicieux, il faut dire qu'il s'agit, dans ces constructions, seulement de la différence entre le sens actif et le sens passif du prédicat sans aucun changement d'orientation des expansions. Il reste bien sûr à demander quelle place occupe ce passif dans le système des voix du basque en général.

11) Cf. M.H.Klaiman, "Affectedness and Control: a typology of voice systems", 1988.

BIBLIOGRAPHIE

BLANCHE-BENVENISTE, Claire : "Commentaires sur le passif en français", Travaux 2, Cercle Linguistique d'Aix-en-Provence, Aix-en-Provence, 1984, pp.1-23.

BRUNOT, Ferdinand : La Pensée et la langue, Paris, Masson, 1926, 3e éd., 1965, p.227, pp.361-374, pp.460-461.

CHEVALIER, Jean-Claude et alii : Grammaire Larousse du français contemporain, Paris, Larousse, 1964, p.322, pp.328-329.

COMRIE, Bernard : "Passive and Voice", dans Passive and Voice, éd. par Shibatani, M., Amsterdam, John Benjamins, 1988, pp.9-23.

DAMOURETTE, Jacques, PICHON, Edouard : Des Mots à la pensée, Essai de Grammire de la Langue Française, Ed.d'Artrey, 1911-1936, tome 5e, pp.18-23, pp.660-790.

GREVISSE, Maurice : Le Bon usage, 12e édition, Gembloux, Duculot, 1986, pp.301-302, 413-414, 522-525, 1162-1167, 1179-1180, 1229-1230, 1244.

HARRIS, Zellig S. : "Introduction to Transformations", dans Papers in Structural and Transformational Linguistics, D.Reidel Publishing Company, Dordrecht, 1970, pp.383-389.

KLAIMAN, M.H. : "Affectedness and control: a typology of voice systems", dans Passive and Voice, éd. par Shibatani, M., Amsterdam, John Benjamins, 1988, pp.25-83.

LE BIDOIS, Georges et Robert : Syntaxe du français moderne, Paris, Edition Picard, 1971, p.26, pp.168-169, 178-179, 405-412, 473-474.

MARTINET, André : Eléments de linguistique générale, Paris, A.Colin, 1960, 1973.

– : Syntaxe générale, Paris, A.Colin, 1985, pp.200-201, 213-214, 239-240.

PERLMUTTER, David M., POSTAL, Paul M. : "Toward a Universal Characterization of Passivization", dans Studies in Relational Grammar 1, éd. par D.M.Perlmutter, Chicago, The University of Chicago Press, 1983, pp.3-29.

SHIBATANI, Masayoshi : Introduction de Passive and Voice, éd. par Shibatani, M., Amsterdam, John Benjamins, 1988, pp.1-8.

TOGEBY, Knud : Grammaire française, Copenhague, Akademisk Forlag, 1982,vol.1, pp.421-424, vol.III, pp.19-39.

WAGNER, R.L., PINCHON, J. : Grammaire du français classique et moderne, Paris, Hachette, 1962, pp.233-234, 279-280, 286-289, 293-294.

WARTBURG, von Walter, ZUMTHOR, Paul : Précis de syntaxe du français contemporain, Berne, Francke, 1947, 2e éd., 1958, pp.191-192, 194-197.

ドイツ語の受動表現

在間　進

0．はじめに

本稿の目的は、まず、ドイツ語の受動文の様々な形式をリストアップし、次に、それぞれの受動形式の表現機能を述べ、最後に、それぞれの形成条件に触れることにする。ドイツ語の受動態に関して主に問題になるのは、受動文がどのような表現機能を持つのか、また、受動文はどのような動詞から形成されるのかされないのかという二点である。後者について言えば、受動形という形式そのものは、「過去分詞＋受動の助動詞」という組み合せなのであるから、過去分詞が作れる限り、どのような動詞からも形成可能ということになる。したがって、形成される受動文が容認可能か否かは結局、当該の受動文の表わす意味内容、すなわち受動文の持つ構造的意味と当該の動詞の持つ意味とが形成する文意味が発話意味として有意義であるか否かによって決まると言えよう。能動文がほとんどすべての動詞から形成されるのに対し、受動文は一部の動詞からしか形成されないのは、能動文の場合と異なり、受動文の表現機能が有標（一義的）であるためと考えられる。

1．受動態の下位区分

ドイツ語の受動態は、受動の助動詞として werden をとるのか、 sein をとるかによって、動作受動と状態受動に大きく分かれる。まず始めに、動作受動について述べる。

1．1．動作受動は、「過去分詞＋助動詞 werden 」の組み合せをもとにして作られる。この組み合わせを受動の不定詞と呼ぶ：たとえば gelobt werden「ほめられる」。 gelobt は動詞 loben「ほめる」の過去分詞である。動作受動文はふつうさらに、主語の有無によって、人称受動と非人称受動とに分けられる。ドイツ語の受動文は、本動詞の４格目的語のみを主語にしうるため、４格目的語をとらない動詞で受動文を形成した場合、主語になるものがなくなり、無主語文になるのである。主語の伴うものを「人称受動」と、主語の伴わないものを「非人称

受動」と呼ぶが、「人称受動」は他動詞（＝４格目的語を取る動詞）から、「非人称受動」は自動詞（＝４格目的語を取らない動詞）から作られることになる。以下、人称受動と非人称受動の様々な統語タイプを挙げる。なお、非人称受動の定形は、主語が存在しないため、３人称単数になる。

（イ）人称受動

a.〔４格目的語のみをとる〕

j4 loben

→ Der Schüler wird gelobt.

その生徒はほめられる。

b.〔４格目的語と３格目的語をとる〕

j3 et4 schenken

→ Die Uhr wird dem Lehrer geschenkt.

その時計は先生に贈られる。

c.〔４格目的語と２格目的語をとる〕

j4 et2 anklagen

→ Der Mann wird des Mordes angeklagt.

その男は殺人罪で訴えられる。

d.〔４格目的語と様態の形容詞（Adj）をとる〕

j4 Adj finden

→ Sie wird schön gefunden.

彼女は美しいと思われる。

e.〔４格目的語と前置詞句（pp）をとる〕

et4 pp legen

→ Das Tuch wird sorgfältig auf den Tisch gelegt.

クロスは注意深くテーブルの上に敷かれる。

et4 pp halten

→ Deine Worte werden für wichtig gehalten.

君の言葉は重要視される。

（ロ）非人称受動

a.〔３格目的語のみをとる〕

j3 helfen

→ Immer wird dem Lehrer geholfen.

いつもその教師には手助けがある。

b.〔２格目的語のみをとる〕

j2 gedenken

→ Des Toten wird gedacht.
死者を思い出す。

c.〔前置詞格目的語のみをとる〕

für et4 kämpfen

→ Für den Frieden wird gekämpft.
自由のために戦いが起こる。

d.〔目的語を一つもとらない〕

tanzen

→ Gestern wurde getanzt.
きのうダンスの集いがあった。

なお、動作受動のバリエーションとして bekommen（kriegen）受動を認める学者もいる。これは、「過去分詞＋ bekommen（kriegen）」の組み合せに基づくもので、人を表わす３格目的語を持つ動詞において形成される。これは間接目的語を主語にした英語の受動文に対応するもので、ドイツ語では間接目的語を主語にして人称受動文を作ることができないのである（注１）。

j3 et4 schenken

→ Er hat eine Krawatte geschenkt bekommen.
彼はネクタイを贈られた。

〔参照〕４格を受動文の主語にした場合：
Die Krawatte wurde ihm geschenkt.
そのネクタイは彼には贈られた。

１．２．状態受動は「過去分詞＋助動詞 sein 」の組み合せをもとにして作られる。たとえば geöffnet sein「開けられている」。geöffnet は動詞 öffnen「開ける」の過去分詞である。なお、状態受動の形式「過去分詞＋助動詞 sein 」に関して、これを動詞からの派生形式と考えるか、当該の過去分詞を一種の「派生形容詞」と考えるかの論争がある。前者の立場は、当該の形式が動作受動形式から規則的に派生できる点に集約されよう。

die Tür öffnen

→ Die Tür ist geöffnet worden.（動作受動現在完了）
ドアは開けられた。

→ Die Tür ist geöffnet.（状態受動現在）
ドアは開けられている。

後者の、派生形容詞と考える立場は、この構造の動詞 sein が bleiben によって書き換えられるのであり、それぞれの構成素に独自の意味を認めることのできる点に基づく（注２）。

Das Geschäft ist geschlossen.
店は閉められている。
→ Das Geschäft bleibt geschlossen.
店は閉められたままである。

また、接頭辞 un- を付加して作られる「否定受身」の存在も、一つの論拠になるであろう。すなわち、この構造の過去分詞に造語的自立性が認められるのである。

Das Problem ist gelöst.
→ Das Problem ist ungelöst.
その問題は未解決である。

なお、接頭辞 un- の付加した過去分詞は当然、形容詞的性質を十分に備えているのであるから、bleiben とも結合して用いられる。

Das Problem blieb ungelöst.
その問題は未解決のままだった。
Die beiden blieben unentdeckt.
両者は見つけられないままだった。
Der Einwand blieb unberücksichtigt.
その異議は考慮されないままだった

以上の事例を見る限り、状態受動の形式「過去分詞＋助動詞 sein 」を本動詞からの派生形式と考える立場にも、過去分詞を一種の「派生形容詞」と考える立場にもそれぞれの論拠があるのであるのであり、結局、どちらの立場が「正しい」かは、文法の記述上どちらがより多くのメリット（逆に言えば、デメリット）を示すかという実証的な検証によって決められるべき問題であろう。

２．表現機能

２．１．態は、基本的に「事柄の捉え方」に関する問題である。ただし、態にお

ける表現機能上の相違は、能動態と受動態の両形が可能な動詞で明示的になる。したがって、態の無標形式である能動態の表現機能は、態の対立の存在しない事例、すなわち能動文のみが可能な動詞を含めると、非常に多様であり、能動態一般に共通するような「事柄の捉え方」を認めることはできない。たとえば、

（イ）Er schlägt Hans.
　　（主語は動作者で、動作者の視点から当該行為を表す）
（ロ）Er bekommt einen Schlag.
　　（主語は被動作者で、被動作者の視点からの出来事を表す）
（ハ）Das Buch gehört ihm.
　　（主語は所有関係における所有物で、所有物から見た所有関係を表す）
（ニ）Er hat ein Buch.
　　（主語は所有関係における所有者で、所有者から見た所有関係を表す）

このような能動態に対して、受動態は有標形式であり、明確な表現機能が認められるが、受動文の表現機能は、すでに上述の文例から推測できるように、動作受動と状態受動とで、動作受動の場合にはさらに、人称受動文と非人称受動文とで異なる。それらについて順に述べる。

２．２．動作受動の表現機能は、次のように特徴づけることができる。

２．２．１．まず、人称受動について述べる。能動文が、被動作者に対して動作主（能動文の主語）がある動作を行うことを表わすのに対し、人称受動文は、被動作者（能動文の目的語）に対してある動作が動作主によってなされることを表わす。すなわち、能動文が動詞の表わす事柄を動作主の視点から提示するのに対し、人称受動文は、当該の事柄を被動作者の視点から提示するのである。これをもう少し分析的に述べれば、人称受動文の表現機能には、２つの側面が認められる。第１の側面は、当該の事柄に関与する「項」の関係である。すなわち、能動文では動作主が発話の中心に位置するのに対し、受動文ではそれが背景に引き込み、代わりに、被動作者が発話の中心に位置づけられるのである（注３）。したがって、人称受動文は、被動作者が動作者に対し発話のテーマを形成する場合など、被動作者が発話の中心に位置づけられる場合に用いられるのである。その論拠一つのとしてたとえば、次例が示すように、特定の動作主が明示される場合、人称受動文は「不特定」の被動作者を主語として形成することができないことを挙げることができよう。

*Autos werden von dem Händler verkauft.

→ Die Autos werden von dem Händler verkauft.
それらの自動車はそのディーラーによって売られる。
〔参照〕Der Händler verkauft Autos.
そのディーラーは自動車を売る。

受動文は一般的に、動作主が不明あるいは表したくない場合に用いると言われるが、これは、人称受動文が被動作者の視点からの表現であり、その当然の結果として、動作者が発話の背景に引き込もる表現であるために可能になるのである。また、別の言葉で言えば、人称受動文を用いるということは、視点を被動作者に置く必然性があるということなのであるから、裏返せば、その一例は、動作主が不明あるいは表したくない場合であるということにもなろう。
第２の側面は事柄の表わす内容に関する。すなわち、能動文では「人の行為」が発話の前面に出るのに対し、人称受動文ではそれが発話の背景に引き込み、代わりに、被動作者に関して起こる「出来事」が発話の前面に出るのである。すなわち、人称受動文は、「人の行為」を表わすよりも、「出来事」として事柄を表わすことになる。これは、次例が示すように、動作主が不特定の場合に典型的に認められるが、事物を表わす被動作者が主語になりうることも一つの論拠になるであろう。

Die Möbel sind beim Umzug beschädigt worden.
家具は引越しの際に破損した。
An dieser Stelle ist schon zweimal jemand überfahren worden.
この場所ですでに二度人が車にひかれた。
Durch einen Druck auf den Knopf wird die Heizung eingeschaltet.
そのボタンを押せば、暖房のスイッチが入る。

以上のことをまとめると、人称受動文は、動作主を発話の背景に置くことによって、被動作者の視点から当該の事柄を捉える表現であり、また、動作主を発話の背景に置くことによって、時には動作主を不特定のままにし、当該の事柄を「出来事」として捉える表現であると言えよう。

２．２．２．非人称受動

非人称受動文も、人称受動文と同じ様に、動作主を発話の背景に置く表現であるが、被動作者が存在しないのであるから、人称受動文と異なり、被動作者の視点からの表現にはなりえない。非人称受動の場合、上述の第２の側面がもっぱら中心的な表現機能になると言える。すなわち、非人称受動は、動作主を主語の位置

から外し、行為のみを際立たせて、一つの「出来事」として捉える表現なのである。したがって、非人称受動文は、行為者が不明の場合やそれを表示する必要がない場合、あるいは話者の関心が行為にのみ向けられている場合に用いられるのである。なお、非人称受動の使用頻度は低く、受動文全体の１％にも満たないと言われる。

２．３．動作受動が被動作者にある行為が加えられる＜加えられた＞ことを表すのに対し、状態受動は、被動作者がある行為によって引き起こされた結果的状態にあることを表す。すなわち、被動作者の視点に立ち、当該の行為による結果的状態を表すのである。この点で、状態受動は、人称受動と一種の対立をなすと言えよう（注４）。また、状態受動の構造は、過去分詞を状態を表わす一種の述語と考えると、「述語＋sein」構文に対応するものでもある（注５）。

Die Tür ist geöffnet.　　（状態受動）
ドアは開かれている。
← Die Tür ist geöffnet worden.（動作受動）
　ドアは開かれた。
〔参照〕Die Tür ist offen.　　（述語形容詞）
　　ドアは開いている。

３．形成における制限

人称受動の表現機能を、被動作者の視点から当該の事柄を捉え、「出来事」として述べることであると、非人称受動の表現機能を、主語を視野の外に置き、行為のみを際立たせることであると、また、状態受動の表現機能を、被動作者がある行為によって引き起こされた結果的状態にあることを述べることであると特徴づけた。このように、受動文はそれぞれ明確な表現機能を持っているのであるが、次に、これらの表現機能に関連づけつつ、それぞれの受動文の形成に関する規則性について述べることにする。受動文の形成規則が単に文法的に規定されているならば、意味論的考察の対象にならないのであるが、受動文の形成規則はきわめて意味的な現象なのである。

３．１．人称受動文は、被動作者の視点から当該の事柄を捉え、「出来事」として述べる表現と定義した。人称受動文は、たとえば次のような動詞（あるいは用法）から形成されないと言われるが、これらの動詞（あるいは用法）が今述べた人称受動の表現機能と適合しないことは明らかであろう。

（イ）再帰構造

Er wäscht sich4.
彼は自分の体を洗う。
→ *Er wird von sich gewaschen.

（ロ）能動的な行為を表さない動詞

ein Haus besitzen
家を所有している
→ *Das Haus wird von ihm besessen.

einen Brief bekommen／erhalten
手紙を受け取る（無意志動詞）
→ *Der Brief wird von ihm bekommen.

（ハ）４格名詞が内容物、量、金額などを表す動詞

Frisches Obst enthält Vitamine.
新鮮なくだものはビタミンが豊富だ。
→ *Vitamine werden von frischem Obst enthalten.

Die Münze gilt nicht viel.
この貨幣は価値があまりない。
→ *Viel wird von der Münze nicht gegolten.

Der Anzug kostet 2000 Mark.
この背広は二千マルクする。
→ *2000 Mark wird von dem Anzug gekostet.

（ニ）４格名詞が主語の身体および着衣の一部を表す動詞

den Hut aufsetzen
帽子を被る
→ (*)Der Hut wird von ihm aufgesetzt.

den Kopf schütteln
頭を振る
→ (*)Der Kopf wird von ihm geschüttelt.

（ホ）４格名詞が知識・思考内容などを表す動詞

Er kannte das Buch nicht.
彼はその本のことを知らなかった。
→(*)Das Buch wurde (von ihm) nicht gekannt.

Er stellt sich3 die Szene vor.
彼はその場面を想像する。
→ *Die Szene wird sich von ihm vorgestellt.

（イ）の再帰的用法は、同一人物に関する表現なのであるから、そもそもが受動

形式を必要としないであろうし、また、（ロ）（ハ）の事例は、行為性を表すものではないから、これも、人称受動という表現機能にはそぐわないものである。また、（ニ）（ホ）のような事例は、身体部分や知識・思考内容という動作主の一部として属するものであり、この全体・部分という関係が、本来、動作主に置かれるべき視点を被動作者としての部分に移すことを不自然にしていると考えられよう。現状ではある程度感覚的にしか述べることが出来ないが、これらの事例は、当該の事柄を被動作者の視点から表現する必要がない、あるいは不可能なものであると考えられる。
なお、動作受動文の容認性に関し、これが動詞のレベルだけでは決められず、文意味のレベルにおいてはじめて規定されることを示す事例がある。たとえば、動詞 besuchen はふつう受動文を作る動詞と言われるが、結合する語句によって非文になる場合があるのである。このことは、人称受動文の容認性が人称受動の表現機能（被動作者の視点から当該の事柄を捉え、「出来事」として述べる）に合致するか否かに基づくことを明白に示していると言えよう（注６）。

Die Hauptstadt wird jedes Jahr von vielen Touristen besucht.
この首都は毎年多くの観光客によって訪れられる。
→ *Die Hauptstadt wurde von Hans besucht.
*この首都はハンスによって訪れられた。

人称受動文の容認性は、動詞の意味のレベル、文意味のレベルのそれぞれにおいて、当該の受動文の表わす意味内容、すなわち受動文の持つ構造的意味と当該の動詞の持つ意味の形成する文意味が有意義な情報になるか否かによって決まるのである。

３．２．非人称受動文は、主語を視野の外に置き、行為のみを際立たせるための表現と定義した。非人称受動文はふつう、次に示すような、出来事（状態変化）を表す動詞、関係や状態を表す動詞、主語に行為性の認められても、空間的移動を表す動詞からは形成されないと言われるが、これらの動詞が今述べた人称受動の表現機能と適合しないことは明らかであろう。非人称受動は、動作性の富む人の行為を表わす動詞の場合にのみ可能なのである。

（イ）出来事： sterben 死ぬ
*Gestern wurde gestorben.
*昨日死ぬことが行われた。
（ロ）関係・状態： stehen 立っている

*An der Haltestelle wurde lange gestanden.
*停留所で長く待つことが行われた。

（ハ）移動： kommen

*Nach München wird gekommen.
*ミュンヒェンに来ることが行われた。

ただし、本来、非人称受動を形成しない、特に移動を表わす動詞は、命令文にしたり、修飾語句や話法の助動詞を付加すると、非人称受動が可能になることがある。これは、命令文化、適当な修飾語句や話法の助動詞の付加によって空間的移動における動作を際立たせることが発話を構成する上で有意義になるためであると考えられる。

（イ）*Ins Dorf wird gegangen.
*村へ行くことが行われる。
Ins Dorf wird gegangen !
村へ行け！

（ロ）*Nach London wird geflogen.
*ロンドンへ飛ぶことが行われる。
Nach Londen wird nur einmal am Tag geflogen.
ロンドンへは一日一便飛んでいます。

（ハ）*Auf dem Rasen wurde gestern gegangen.
*芝生の上を歩くことが行われる。
Auf dem Rasen darf nicht gegangen werden.
芝生の上を歩いてはいけない。

３．３．状態受動は原則的に、動作受動が可能な動詞からのみ作られるが、動作受動の可能な動詞すべてから作られるわけではない。２．３．に述べたように、状態受動の表現機能は、被動作者がある行為によって引き起こされた結果状態にあることを表すことにある。したがって、状態受動文は、４格目的語に強く作用することによって継続的な（残存する）結果状態を引き起こすことを表わす他動詞から作ることが出来る。その典型的な事例は、４格目的語の状態変化を引き起こす他動詞であり（注７）、逆に、動作のみを表す動詞あるいは継続相の動詞からは作ることができないのである。

（イ）結果志向の動詞

et4 öffen …4を開ける

Die Tür ist geöffnet.
ドアは開けられている。

j4 anziehen …4に服を着せる

Das Kind ist angezogen.
子供は服を着せられている。

（ロ）行為・状態志向の動詞

et4 schütteln …4を揺する

*Der Baum ist geschüttelt.
*木は揺すられた状態にある。

j4 lieben …4を愛する

*Der Lehrer ist von den Schülern geliebt.
*先生は生徒から愛された状態にある。

なお、状態受動は本来的に状態を表し、行為そのものが背後に隠れているため、動作主の表示は不可能であるが、動作主が強く意識されうる場合には動作主を表示することが可能である。

Die Straße ist von Lampen beleuchtet.
通りはランプで照らされている。
Er ist von seiner Familie beansprucht.
彼は家族の面倒を見なければならない。
Die Thesen sind von ihm gebilligt.
これらのテーゼは彼によって承認されている。

4．おわりに

受動文のように、一種の組み合せによって形成される現象は、単に形式的な側面から扱うべきではない。言語の、組み合せに基づく「生成性」は、言語の経済性に基づく基本的な特徴の一つである。ドイツ語には無数と言ってよいほどの表現があるが、それらは決して無秩序に生成されているのではなく、組み合せによる一定のメカニズムに従って創り出されているのである。ドイツ語の様々な表現はどのうなメカニズムによって生成されるのか、この「生成メカニズム」の解明はドイツ語研究の大きな、かつ有意義な研究目標になりうるであろう。また、この「生成メカニズム」の習熟こそが語学教育の目指す最終的な目標であると考えられる。

◆----------

注１：授与動詞以外でも、利害の３格に関して、bekommen　受動が可能な場合がある。ただし、以下に示すように、不可能な場合もあり、容認性の基準に関してはまだはっきりしていない。

j3 vorlesen

→ Karl kriegte jeden Abend vorgelesen.

j3 einschenken

→ Wir kriegten reichlich eingeschenkt.

j3 auftun

→ Wann kriegen wir aufgetan ?

容認不可能な事例：

*Karl kriegte gefolgt.

*Karl kriegte von allen zugehört.

*Karl kriegte herzlich gratuliert.

*Karl kriegte von allen Seiten zugesprochen.

*Karl kriegte gewöhnlich überall ausgewichen.

*Karl kriegte für seine Hilfe nachdrücklich gedankt.

注２ 類例：

Die Straße blieb gesperrt.

Karl blieb von allen verachtet.

Die Benutzun blieb uns von den Behörden untersagt.

Tiere bleiben vom Gesetz gegen inhumane Behandlung geschützt.

注３：事柄に関与する項のどれを主語にするかは、文法的に重要な意味を持つ。所有関係の表現において、所有者を発話の中心に位置づける場合は haben　を用い、所有物を発話の中心に位置づける場合は gehören　を用いる。したがって、動詞 haben　には既知のものを目的語にすることができない。既知の所有物に関する所有関係を表わす場合は、動詞 gehören を用いるのである：

Mein Vater hat／besitzt ein Auto.

*Mein Vater hat／besitzt das Auto.

Das Auto gehört meinem Vater.

注４：状態受動と動作受動は、明らかに表現機能が異なるのであるが、動詞によっては同じ様に用いられることがある：

Die Lampe ist/wird von einem straken Haken gehalten.

Die Wiese ist/wird von einer Landstraße durchzogen.

また、含意の関係で同義になることもある：

a. Die Liste ist von Karl zusammengestellt.

Die Liste ist von Karl zusammengestellt worden.

b. Mit 10 Mark wären die Plätze aber sehr teuer bezahlt.

Mit 10 Mark wären die Plätze aber sehr teuer bezahlt worden.

c. Ihr seid herzlich zu unserem Abschiedsfest eingeladen.

Ihr seid herzlich zu unserem Abschiedsfest eingeladen worden.

注5：Helbig／Buscha, Deutsche Grammatik, Leipzig 1977 は、状態受動を次のように定義している：

Das Zusandspassiv drückt einen -- statischen -- Zustand aus, der das Resultat eines vorhergehenden -- dynamischen -- Vorgangs ist. (S. 148)

Das (logische) Objekt des aktivischen Satzes wird .. zum Träger eines zumindest einer Zeitlang gleichbleibenden Zustandes. (S. 149)

Das Partizip II tritt damit -- im Unterschied zum Vorgangspassiv -- aus dem prozeßhaften Bereich des Verbalen heraus und nähert sich den adjektivischen Prädiktiva (als Zustandsbezeichnung). (S. 149)

注6：完了文の形成の助動詞に sein を用いるか haben を用いるかも、最終的には動詞の意味内容によって決められるのであり、未来完了時制の形成に関しても同じ様なことが言える。

注7：動詞の用法によって状態受動の形成が異なることもある：

Der Ball ist gefangen worden.

→ *Der Ball ist gefangen.

Der Dieb ist gefagen worden.

→ Der Dieb ist gefangen.

◆ 受動文資料

ドイツ語の受動文の意味機能として、視点の転換が挙げられる。視点が４格目的語に向けられるということによって、ふつう、４格目的語のテーマ化が考えられるであろうが、しかし、受動文の主語はかならずしも常に発話のテーマというわけではない。受動文において視点が４格目的語に向けられるということには、発話のテーマ化以外に、どのような表現機能があるのであろうか ―― このような問題提起に基づき、トーマス・マン＝ファイル（ブデンブローク ス）から収集した事例を挙げる。第１グループは、受動文の主語がテーマを形成していないと考える事例（Ⅰ）、第２グループは、受動文の主語が関係文の主語になっている事例（Ⅱ）である（数字は最初の３桁がページ数、次の２桁が行数を表わす）。

Ⅰ．受動文の主語がテーマでない事例

（A）主文における受動文

04128
es sind bei Gott hier ehemals <u>andere Geschäfte</u> <u>gemacht</u> worden ...

07932
nach Frankfurt wurden als Entschädigungssumme <u>25000</u> <u>gezahlt</u>: macht 595000, und so hätten die Dinge bei Vaters Tode gelegen, wären alle diese Spesen nicht im Laufe der Jahre durch rund 200000 Kurantmark Verdienst korrigiert worden.

08523
auf ihren grauen, gepolsterten Ohrlocken saß eine Haube mit grünen Bändern, die über die schmalen Kinderschultern hinabfielen, und nie war an ihrem kümmerlichen schwarzen Kleidchen <u>etwas</u> wie Putz <u>gesehen</u> worden ausgenommen die große, ovale Brosche, auf der in Porzellanmalerei das Bild ihrer Mutter prangte.

13916
es darf <u>keine Wahrheit</u> <u>niedergeschrieben</u> oder <u>gelehrt</u> werden, die vielleicht nicht mit der bestehenden Ordnung der Dinge übereinstimmt ...

16522
die Halle war mit Blumen geschmückt und ein Altar an ihrer rechten Seite errichtet worden.

20826
es sind mir Wechsel vorgelegt worden ...

21009
ich werde schon dafür sorgen, daß auch kein silbernes Brotkörbchen und kein Schlafrock beiseite geschafft wird ...

21113
es hatte sich erwiesen, daß die Erkrankung seines Sohnes keine unmittelbare Gefahr in sich schließe, daß aber eine Luftkur im Süden, in Südfrankreich, dringend ratsam sei, und da es sich günstig getroffen hatte, daß auch für den jüngen Sohn des Prinzipales eine Erholungsreise geplant worden war, so hatte er die beiden jungen Leute, sobald Thomas reisefähig war, gemeinsam nach Pau abreisen lassen.

37416
"Tony", sagte die Konsulin nach einer Weile, "ich sehe nun, daß dir in der Tat ein Kummer zugefügt worden ist ...

40901
andere tauchten auf und wurden gesichtet.

54401
Vergleiche mit denen früherer Jahre wurden angestellt, und es ergab sich, daß dieser seit langer Zeit der größte war.

54407
es wurde alter Rotwein von der Firma Möllendorpf getrunken.

56935
Waschkörbe voll Kleider und Leinenzeug werden aus dem Hause geschafft ...

60506
ein paar Bemerkung über den neuen Direktor wurden gewechselt, den Konsul Hagenström zweimal hintereinander für einen grundehrlichen Mann erklärte, worauf der Senator verstummte.

71531
verschiedene junge Leute wurden noch aufgerufen, um sich über ihr Wissen um Hiob, den Mann im Lande Uz, auszuweisen, und Gottlieb Kaßbaum, Sohn des verunglückten Großkaufmanns Kaßbaum, erhielt trotz seiner zerrütteten Familienverhältnisse eine vorzügliche Note, weil er mit Genauigkeit feststellen konnte, daß Hiob an Vieh siebentausend Schafe, dreitausend Kamele, fünfhundert Joch Rinder, fünfhundert Esel und sehr viel Gesendes besessen habe.

73010
es wurden weder drohende Worte auf angehefteter eherner Tafel gelesen, noch scheute die bittende Schar das Antlitz ihres Richters ...

73917
Blätter mit den obszönsten Bleistiftzeichnungen wurden emporgehoben, umhergeschickt und gierig belacht ...

74918
wurden hier furchtbare Hindernisse bewältigt, Drachen getötet, Felsen erklommen, Ströme durchschwommen, Flammen durchschritten ?

72519
eines Tages jedoch, vielleicht nach den Ferien, Gott allein wußte, warum, war man gestürzt, vernichtet, abgeschafft, verworfen, und ein anderer wurde mit Vornamen genannt ...

【メモ】----------
総称的主語
11833
Verdienen wird groß geschrieben.

（B）副文における受動文

04916
wenn von dem Erbteil, das euer ist, ein Haus gekauft wurde ...

25805
"im Falle einer abermaligen Verheiratung meiner inniggeliebten ältesten Tochter Antonie", hieß es weiter, "darf angesichts der Tatsache, daß bereits an ihre erste Ehe 80000 Kurantmark gewendet worden , als Aussteuer die Summe von 18000 Talern Kurant nicht überschritten werden

33417
das aber weiß ich, und das möchte ich denn doch aussprechen, daß es in diesem Leben nicht darauf ankommt, wie etwas ausgesprochen und ausgedrückt wird, sondern wie es im Herzen gemeint und empfunden ist, und wenn du dich über Herrn Permaneders Ausdrucksweise mokierst ...

34117
... aber der Unterschied ist, daß damals ein großes Wesen gemacht wurde und alle mich drängten und quälten, und daß sich jetzt alle ganz still verhalten und es als selbstverständlich nehmen, daß ich Ja sage;

41402
jetzt heißt es, daß die Vorschläge im Sitzungssaale eingelaufen sind und daß von jeder der drei Kammern ein anderer vorgeschlagen wurde: Hagenström, Buddenbrook, Kistenmaker

54004
aber man war kaum damit fertig, als große Kristallschüsseln mit einem gelben, körnigen Brei zum Imbiß herumgereicht wurden.

54014
zur Erfrischung gab es auch Weingelfe in Gläsern, wozu englischer Plum-cake gegessen wurde.

57009
dergleichen ist unvermeidlich, wenn ein Haushalt aufgelöst wird, in dem zuletzt sowieso schon ein bißchen lax regiert wurde.

61921
aber die Zeit begann, da einem Vater Gelegenheit gegeben wird, auch seinerseits auf seinen Sohn zu wirken, ihn ein wenig auf seine Seite zu ziehen und mit männlichen Gegeneindrücken die bisherigen weiblichen Einflüsse zu neutralisieren.

63406
aber obgleich dann Eis und Champagner an der Table d'hote serviert ward, obgleich Eselritte und Segelpartien in die offene See hinaus veranstaltet wurden, liebte der kleine Johann diese Sonntage nicht sehr.

64505
selbst sein schmales, schräg zu dem Mundwinkeln hinablaufendes Junglings Schnurrbärtchen, dem nicht Spitze noch Schwung hätte gegeben werden können, trug dazu bei, diesen unmartiglischen Gesamteindruck zu verstärken.

67216
Frau Permaneder verstummte so eingeschüchtert und unangenehm berührt, wie harmlose Leute verstummen, wenn in Gesellschaft plötzlich etwas Gutes und Ernstes ausgesprochen wird, dergleichen sagt man doch nicht

68236
die beiden Ärzte hielten dafür, daß auf jeden Fall für die Nacht eine Barmherzige Schwester herbeigeschafft werden müsse.

69824
dorthin zog die Senatorin, im Herbst des Jahres 76, mit ihrem Sohne, ihren Dienstboten und einem Teile ihres Hausrates, während ein anderer Teil davon unter den Wehklagen Frau Permaneders zurückgelassen werden und in den Besitz des alternden Junggesellen übergehen mußte.

71911
er übersah, daß dieser oder jener Schüler ein Buch mit sich heruntergebracht hatte, um sich im letzten Augenblick ein wenig zu präparieren, übersah, daß seine Pensionäre Herrn Schlemiel, dem Kustos, Geld einhändigten, um sich Bäckereien holen zu lassen, daß hier eine kleine Kraftprobe zwischen zwei Tertianern in eine Prügelei ausartete, um die sich sofort ein Ring von Sachverständigen bildete, und daß dort hinten jemand, der auf irgendeine Weise eine unkameradschaftliche, feige oder unehrenhafte Gesinnung an den Tag geleg hatte, von seinen Klassengenossen zwangsweise zur Pumpe befördert wurde, um zu seiner Schande mit Wasser begossen zu werden ...
...

(C) 指示冠詞を伴う名詞および指示代名詞

04623
auf wiederholtes Verlangen und nach mehrmals gegebenem Beispiel geschah es dann endlich auch, daß auf dem Trommelfell ein kurzer Wirbel geschlagen wurde, wenn auch schwach und technisch unvollkommen, so doch hinreichend, um eine gewisse, wenn auch vielleicht nicht bis zum Menschlichen fortgeführte organische Gliederung des geheimnisvollen Gebildes zu erweisen.

27825
ein Einwand, den Thomas bei Gelegenheit ganz vorsichtig und halb im Scherze gegen die Übungen erhoben hatte, war mit Milde und Würde zurückgewiesen worden.

31929
aber die Sache ist, daß so eine Vorstellung, versteh mich recht, nur durch eine andere Vorstellung, eine Gegenvorstellung aufgehoben werden kann ...

41309
jede im Senate erledigte Stelle muß binnen vier Wochen wieder besetzt werden;

45523
ein solches Geschäft ist von uns in hundert Jahren nicht gemacht worden, und ich bin nicht gesonnen, mit derartigen Manövern den Anfang zu machen.

49228
auch heute, da doch die weitaus meisten Drahtnachrichten in bloßen Glückwünschen bestanden, mußte während der Geschäftszeit jede Depesche sofort und unter allen Umständen überbracht werden.

49726
ein Satz Haydn, einige Seiten Mozart, eine Sonate von Beethoven worden durchgeführt.

58108
... und das, nachdem schon ein anderes Viertel von Tiburtius erschlichen wordenü

59130
unter der Aufsicht des Senators war dort in den letzten Tagen ein wenig geräumt und Überreste alter Buddenbrooks waren beiseite geschafft worden.

66831
daß jedermann wie durch einen hoffnungslosen Zynismus trübe gestimmt werden mußte, " na, und Sie, Buddenbrook, tun Sie noch war ?

(D) 数量的な受動文主語

04125
aber weiter wird ja nichts importiert

05430
einmal er war noch ein Knabe hatte er den Vorbereitungen zu einer Hochzeit beigewohnt, wobei viel Bier gebraut wurde denn es bestand die alte

Sitte, das Bier im Hause zu brauen), und zu diesem Ende stand ein großes Brauküben vor der Türe aufgerichtet.

06131.
und es ist nennenswert, wenn zum ersten Frühstück vorn im Terrassenzimmer, während durch die offene Glastür vom Garten die Morgenluft hereinstreicht, statt des Kaffees oder des Tees eine Tasse Schokolade verabreicht wird, ja, jeden Tag Geburtstagsschokolade mit einem dicken Stück feuchten Napfkuchens.

07416
nach einem Schweigen sagte er nachdrücklich: es ist nichts geändert worden, bis zum Schlusse, Johann ?

08001
dann wurden ferner 100000 an Gotthold ausgekehrt und noch 267000 nach Frankfurt;

23516
du sollst sehen, alles wird durch eine neue, vorteilhafte Partie wieder gutgemacht werden

23819
es wurden dann noch einige Briefe über seine Pläne gewechselt, und im Sommer 1851 segelte Christian Buddenbook in der Tat nach Valparaiso, wo er sich eine Position verschafft hatte.

25724
im übrigen gingen, wie sich versteht, die Bestimmungen dahin, daß alles nach Möglichkeit beisammengelassen werden sollte, daß Frau Elisabeth Buddenbrook im Prinzip Universalerbin sei und das ganze Vermögen im Geschäfte verbleibe, wobei Herr Marcus konstatierte, daß er das Betriebskapital als Teilhaber un 120000 Kurant verstärke.

29335
ja, hiermit wird manches ausgewetzt ...

29424
und dabei wand er sich und machte ein krauses Gesicht, wie wenn ihm an der Börse eine faule Offerte gemacht wurde.

35609
vieles zwar war noch aus der Zeit ihrer ersten Ehe vorhanden, aber es mußte durch Neuankäufe ergänzt werden, und eines Tages langte aus Hamburg, woher manches bezogen ward, sogar ein Schlafrock an ...

35621
"nur wenige Verlobungskarten waren versandt worden daß aber Julchen Möllendorpf, geborene Hagenström, eine erhalten hatte, dafür hatte Madame Grünlich gesorgt, von einer Hochzeitsreise ward abgesehen, weil Herr Permaneder "so a Hetz" verabscheute und Tony, vor kurzem vom Sommeraufenthalt zurückgekehrt, schon die Reise nach München zu weit fand, und die Trauung, die diesmal nicht die Säulenhalle, sondern die Marienkirche zum Schauplatze hatte, fand in engem Familienkreise statt .

36001
ich kann nur dankbar sein, wissen Sie, daß mein Vater , Großvater und Urgroßvater mir die Wege geebnet haben und daß viel von dem Vertrauen und dem Ansehen, das sie sich in der Stadt erworben haben, ohne weiteres auf mich übertragen wird, denn sonst könnte ich mich gar nicht so regen ...

36201
bitte, das Handtuch, Wenzel", schloß der Konsul, und wenn dann noch über den augenblicklichen Kurs des Roggens ein Wort gesagt worden war, der auf fünfundfünfzig Taler stehe und noch immer verflucht zum Fallen inkliniere, wenn vielleicht noch eine Bemerkung über irgendein Familienereignis in der Stadt gefallen war, so verschwand Herr Wenzel durch das Souterrain, um auf der Straße sein blankes Schaumgefäß aufs Pflaster zu entleeren, und der Konsul stieg über die Wendeltreppe ins Schlafzimmer hinauf, wo er Gerda, die unterdessen erwacht war, auf die Stirn küßte und sich ankleidete.

39610
und nun, da der Frühling gekommen, der Frühling des Jahres 61, nun ist er da und empfängt das Sakrament der heiligen Taufe, er, auf dem längst so viele Hoffnungen ruhen, von dem längst so viel gesprochen, der seit langen Jahren erwartet, ersehnt worden, den man von Gott erbeten und um den man Doktor Grabow gequält hat ...

51334
im Hinblick auf die Weisheitszähne, die dermaleinst kommen würden, mußten vier Backenzähne, die soeben weiß, schön und noch vollkommen gesund herangewachsen waren, entfernt werden, und das nahm, da man das Kind nicht überanstrengen wollte, vier Wochen in Anspruch.

60904
zum Beispiel wurden alle Glockenzüge abgeschafft und das Haus durchaus mit elektrischen Klingeln versehen schon aber war das Rückgebvaude vom Boden verschwunden, und an seiner Statt stieg ein neues empor, ein schmucker und luftiger Bau, dessen Front der Beckergrube zugekehrt war und der für Magazine und Läden hohe und weite Räume bot.

66317
zwar wurde nichts an ihm gelähmt;

67212
zerklüfteten Erscheinungen hinein, um seine Lebenskraft zu erproben, von der noch nichts verausgabt wurde, aber man ruht an der weiten Einfachheit der äußeren Dinge, müde wie man ist von der Wirrnis der inneren,

72224
bald nach dem Einzug des neuen Direktors war auch unter den vortrefflichsten hygienischen und ästhetischen Gesichtspunkten mit dem umbau und der Neueinrichtung der Anstalt begonnen und alles aufs glücklichste fertiggestellt worden.

（E）テーマを形成しない副文が受動文主語

05410
es kann nicht geleugnet werden, daß der Konsul nach diesem oder jenem Satze die Neigung verspürte, es nun genug sein zu lassen, die Feder fortzulegen, hinein zu seiner Gattin zu gehen oder sich ins Kontor zu begeben.

06819
und es ist niemals aufgeklärt worden, ob dies ein bewußter Scherz war.

37818
Tony hatte sich gleich nach Tische in ihr Schlafzimmer zurückgezogen, denn während des Essens war ihr durch die Konsulin die Vermutung bestätigt worden, daß Thomas um ihre Ankunft wisse ...

44504
mit dem Einverständnis des Direktors, ja, auf seinen Wunsch hin, war beschlossen worden, daß Frau Antonie wenigstens vorderhand bei den Weinschenks wohnen, daß sie der unerfahrenen Erika im Haushalte zur Seite stehen sollte ...

61603
Frau Antonie hatte bei Tische über Hugo Weinschenk gesprochen, dessen Gemütszustand äußerst traurig sein sollte, und dann war die Frage erörtert worden, wann man wohl, mit einiger Aussicht auf Erfolg, dem Senate ein Gnadengesuch werde einreichen können.

64118
er hatte vor Gericht aus tiefster Überzeugung beteuert, und von Sachverständigen war es ihm bestätigt worden, daß das kecke Manöver, welches er seiner Gesellschaft und sich selbst zu Ehr' und Vorteil unternommen, in der Geschäftswelt ais Usance gelte.

74101
Direktor Wulicke stieß einen Laut aus, wie wenn die tiefste Saite des Kontrabasses heftig angestrichen wird.

（F）機能動詞構造の４格目的語が受動文主語

08118
übrigens wurde nach ein paar Tagen, als der Konsul gutgelaunt aus dem Kontor zu Tische kam, dennoch der Beschluß gefaßt, Möllendorpfs Anton zu engagieren.

09124
auch wurden in einigen Jahren, wenn der Konsul Geschäfte gemacht, Reisen von größerer Ausdehnung unternommen.

25606
aber der Buddenbrook'sche Anteil an der Kröger'schen Hinterlassenschaft von 400000 Kurantmark hatte, da Justus eine Menge im voraus verbraucht, volle 300000 betragen, und obgleich Johann Buddenbrook nach Kaufmannsart beständig geklagt hatte, war den Verlusten doch durch einen etwa fünfzehnjährigen Verdienst von 30000 Talern Kurant die Waage gehalten worden.

35617
was die Hochzeitsfeierlichkeiten anging, so verliefen sie genau, wie Tony es erwartet und nicht anders gewünscht hatte: es wurde nicht viel Aufhebens davon gemacht.

71932
wer sich aber gar auf der Straße mit einem Spazierstock hatte sehen lassen, an dem wurde in der Turnhalle auf ebenso schimpfliche wie schmerzhafte Art eine öffentliche Züchtigung vollzogen ...

Ⅱ．4格目的語が関係文の主語になった受動文の事例

01816
es war das 'Salz und Brot', das der Familie von Verwandten und Freunden zum Wohnungswechsel übersandt worden war.

16409
Tony's Freundinnen darunter auch Armgard von Schilling, die in einer turmhohen Kutsche zur Stadt gekommen war tanzten mit Toms und Christians Freunden darunter auch Andreas Gieseke, Sohn des Branddirektors und studiosus iuris, sowie Stephan und Eduard Kistenmaker von 'Kistenmaker & Söhne' im Eßsaale und auf dem Korridor, der zu diesem Behufe mit Talkum bestreut worden war ...

19629
es war ein ganz harmloser Feldstein, kaum von der Größe eines Hühnereies, der, zur Feier der Revolution von der Hand irgendeines Krischan Snut oder Heine Voß geschleudert, sicherlich nicht böse gemeint und wahrscheinlich gar nicht nach dem Wagen gezielt worden war.

23407
er fühlte in seinem Stolz als Geschäftsmann sich bitter gekränkt und verwand schweigend die Schmach, so plump übers Ohr gehauen worden zu sein.

27322
er erzählte die Geschichte eines Hundes, der in einer Schachtel von Valparaiso nach San Franzisko geschickt worden und obendrein räudig war.

38720
wie eine Pflanze, um mich dieses Bildes zu bedienen, wie eine Blume, die in fremdes Erdreich verpflanzt worden ...

44703
und während der folgenden vierzehn Tage vollbrachte Frau Permaneder, unterstützt vom Tapezierer Jacobs, eines ihrer Meisterstücke: die vor-

nehme Herrichtung jener geräumigen ersten Etage, die in einem Hause der mittleren Beckergrube gemietet worden war, und deren mit Blumen reichlich geputzte Räume dann das heimkehrende Paar umfingen.

47330
was war es für ein Angebot, das ihm da gemacht worden war ?

49709
dort ließ er sich nieder, umfaßte seine Knie mit beiden Händen, verhielt sich still und lauschte: auf die Klänge sowohl wie auf das, was gesprochen wurde.

50004
kaum hie und da verstand er ein Wort von dem, was gesprochen wurde, und was erklang, ging meist weit über sein kindliches Verständnis hinaus.

50110
es kommt so wenig darauf an, auf ein Instrument dressiert zu werden, sondern vielmehr darauf, ein wenig von Musik zu verstehen, nicht wahr ?

51905
es gab da lange Rechenaufgaben zu lösen, die, nachdem man beide Seiten der Schiefertafel mit Additionen, Subtraktionen, Multiplikationen und Divisionen bedeckt hatte, am Ende und als Resultat ganz einfach Null ergeben mußten wo nicht, so steckte irgendwo ein Fehler, der gesucht, gesucht werden mußte, bis man das kleine bösartige Tier gefunden hatte und vertilgen konnte;

52835
es setzten die Ferien ein, und der Augenblick ging ziemlich glücklich vorüber, da Papa das Zeugnis las, das auch in der Weihnachtszeit notwendig ausgestellt werden mußte ...

54716
ein mattes Fieber summte in seinem Kopfe, und sein Herz, das von dem revoltierenden Magen ein wenig beengt und beängstigt wurde, schlug

langsam, stark und unregelmäßig.

56206
besuche, die anfänglich vorgelassen wurden, Freundinnen, Mitglieder des Jerusalemsabends, alte Damen aus der Gesellschaft und Pastorsgattinnen, empfing sie apathisch oder mit zerstreuter Herzlichkeit und entließ sie rasch.

56212
selbst dem kleinen Hanno, der in einer erträglichen Stude eingelassen wurde, strich sie nur flüchtig über die Wange und wandte sich dann ab.

57118
sie waren ins Nebenzimmer zurückgekehrt und setzten sich an den runden Tisch, während der Senator die Papiere zur Hand nahm, auf welchen die Gegenstände verzeichnet standen, die unter die nächsten Erben verteilt werden sollten ...

59113
die Damen drängten sich behutsam zum Händedruck um Frau Permaneder und ihre Tochter, wobei sie mit niedergeschlagenen Augen nicht mehr und nicht weniger murmelten, als was bei dieser Gelegenheit gemurmelt werden mußte, wärend die Herren sich anschickten, zu den Wagen hinunterzusteigen ...

59511
aber waren Ideale dazu da, erreicht und verwirklicht zu werden ?

61321
dennoch hätte er es nicht vermocht, das Kabinett mit dem Bewußtsein zu verlassen, irgend etwas davon unterlassen oder nur flüchtig erledigt zu haben, aus Furcht, dieses Gefühls von Frische, Ruhe und Intaktheit verlustig zu gehen, das doch nach einer einzigen Stunde wieder verloren war und notdürftig erneuert werden mußte.

61403

in der Kommode aber, mit dem gewartigen Spiegelaufsatz , dessen Platte mit Kämmen, Bürsten und Präparaten für die Pflege des Haupthaares und Bartes bedeckt war, lagerte der Vorrat von verschiedenartiger Leibwäsche, die beständig gewechselt, gewaschen, verbraucht und ergänzt wurde

61535
denn ihre Tochter, die gleichfalls gebeten worden war, hatte nachmittags ihrem Gatten im Gefängnis einen Besuch gemacht und fühlte sich, wie stets in diesem Falle, ermüdet und unwohl, weshalb sie zu Hause geblieben war.

62208
da waren zum Beispiel, geleitet von dem Turnlehrer Herrn Fritsche, die 'Turnspiele', die zur Sommerszet allwöchentlich draußen auf dem Burgfelde veranstaltet wurden und der männlichen Jugend der Stadt Gelegenheit gaben, Mut, Kraft, Gewandtheit und Geistesgegenwart zu zeigen und zu pflegen.

62314
was Kai betraf, so mied er die 'Turnspiele', weil er die Disziplin und gesetzmäßige Ordnung verabscheute, die dabei beobachtet werden mußte.

63403
am Sonntag erschien, gleich einigen anderen Herren, die während der Woche von ihren Geschäften in der Stadt zurückgehalten wurden, der Senator bei den Seinen und blieb bis zum Montagmorgen.

65011
und siehe da, bei diesem Klange schlug der kleine Johann seine goldbraunen Augen auf und richtete sie so groß, klar und liebevoll wie noch niemals auf seines Vaters Gesicht, dieses Gesicht mit den geröteten Lidern unter den hellen Braunen und den weißen, ein wenig gedunsenen Wangen, die von den lang ausgezogenen Spitzen des Schnurrbarts starr überragt wurden.

65724
besser, wahrhaftig, dieser Wille webt frei in raum und zeitloser Nacht, als daß er in einem Kerker schmachtet, der von dem zitternden und wankenden Flämmchen des Intellektes notdürftig erhellt wird

66324
was er aber mit besonderer Ausführlichkeit, Eindringlichkeit und Anstrengung, sich ganz verständlich zu machen, beschrieb, war eine scheußliche Anomalie, die er in letzter Zeit an sich wahrgenommen hatte und die darin bestand, daß er an gewissen Tagen, das heißt bei gewisser Witterung und Gemütsverfassung, kein offenes Fenster sehen konnte, ohne von dem gräßlichen und durch nichts gerechtfertigen Drange befallen zu werden, hinauszuspringen ...

67428
zwischen ihnen hindurch schritt ziemlich geschwind, mit gelüftetem Zylinder, ein kaum mittelgroßer Herr, der eine seiner hellen Brauen ein wenig emporgezogen hielt und dessen weißliche Wangen von den lang ausgezogenen Schnurrbartspitzen überragt wurden.

67933
und er ging langsam durch die Straßen, mechanisch Grüße erwidernd, die ihm dargebracht wurden, mit sinnenden und ungewissen Augen, als dächte er darüber nach, wie ihm eigentlich zumute sei.

68531
mit gänzlich nassem Gesicht, aber gestärkt, erleichtert und vollkommen im seelischen Gleichgewicht, erhob sie sich und war sofort imstande, der Todesanzeigen zu gedenken, die unverzüglich und in höchster Eile hergestellt werden mußten, ein ungeheurer Posten vornehm gedruckter Todesanzeigen ...

68835
was man zunächst in der Sache zu tun hatte, war dies, daß man Kränze schickte, große Kränze, teure Kränze, Kränze mit denen man Ehre einlegen konnte, die in den Zeitungsartikeln erwähnt werden würden und denen man

ansah, daß sie von loyalen und zahlungsfähigen Leuten kamen.

69026
unter Anwendung ihrer Kehlkopfstimme verlas sie viele Male die Zeitungsartikel, in denen, wie zur Zeit des Geschäftsjubiläums , seine Verdienste gefeiert, der unersetzliche Verlust seiner Persönlichkeit beklagt wurde.

69121
er lief, den Zylinder in der Hand, auf leisen Sohlen die Haupttreppe hinunter und rief mit durchdringender Flüsterstimme über die Diele hin, die soeben von Steuerbeamten in Uniform und Kornträgern in Blusen, Kniehosen und Zylindern überflutet wurde: "die Zimmer sind voll, aber auf dem Korridor ist noch ein wenig Platz ...

69510
sein mütterliches Erbe zwar, dessen Zinsen übrigens schon immer zur Hälfte nach Hamburg gewandert waren, wurde, soweit es noch nicht im voraus verbraucht war, von Herrn Stephan Kistenmaker verwaltet, der dazu durch seines toten Freundes Testament bestellt worden war;

69819
Herr Kistenmaker besorgte auch den Ankauf des neuen Hauses, einer angenehmen kleinen Villa, die vielleicht ein wenig zu teuer erstanden wurde, die aber, vorm Burgtore an einer alten Kastanienallee gelegen und von einem hübschen Zier und Nutzgarten umgeben, den Wünschen Gerda Buddenbrooks entsprach ...

70020
er war nicht gern dort, schrieb lamentierende Briefe an die Seinen und gab dem heftigen Wunsche Ausdruck, aus dieser Anstalt, in der man ihn sehr streng zu behandeln schien, wieder befreit zu werden.

70707
es galt, sich ungesehen ins Klassenzimmer zu stehlen, dort heimlich das Ende der Andacht abzuwarten, die in der Turnhalle abgehalten wurde, und

zu tun, als ob alles in Ordnung sei.

71930
wer mit emporgeklapptem Rockkragen betroffen wurde, durfte der Pumpe gewärtig sein.

72034
aus der Neigung zum Geschichtenerzählen, die er als kleiner Junge gelegt hatte, hatten sich schriftstellerische Versuche entwickelt, und kürzlich hatte er eine Dichtung vollendet, ein Märchen, ein rücksichtslos phantastisches Abenteuer, in dem alles in einem dunklen Schein erglühte, das unter Metallen und geheimnisvollen Gluten in den tiefsten und heiligsten Werkstätten der Erde und zugleich in denen der menschlichen Seele spielte, und in dem die Urgewalten der Natur und der Seele auf eine sonderbare Art vermischt, gewandt, gewandelt und geläutert wurden, geschrieben in einer innerlichen, deutsamen, ein wenig überschwenglichen und sehnsüchtigen Sprache von zarter Leidenschaftlichkei ...

72533
hätte jemand den traurigen Mut besessen, dagegen zu protestieren, so wäre er der Aussicht verlustig gegangen, jemals geduzt und mit Vornamen genannt zu werden.

72833
da er aber herzlich unbegabt war und außerdem nicht geglaubt hatte, heute aufgerufen zu werden, so wußte er dennoch nur wenig und verstummte schon nach den ersten Worten.

73012
er las mit gequältem und angeekeltem Gesichtsausdruck, las mit Willen schlecht und unzusammenhängend, vernachlässigte absichtlich einzelne Bindungen, die in Kilians Buch mit Bleistift angegeben waren, sprach fehlerhafte Verse, stockte und arbeitete sich scheinbar nur mühsam vorwärts, immer gewärtig, daß der Ordinarius alles entdecken und sich auf ihn stürzen werde ...

73602
aber er hatte wenig Aussicht, engagiert zu werden;

73621
und als dann Herr Modersohn eintrat, konnte er trotz der heftigsten Anstrengungen die Tür nicht hinter sich schließen, weil ein dicker Tannenzapfen in der Spalte stak, der erst von Adolf Todtenhaupt entfernt werden mußte ...

75129
auf der Haut der Brust und des Bauches werden nun einzelne linsengroße, rote Flecken sichtbar, die durch den Druck eines Fingers entfernt werden können, aber sofort zurückkehren.

72027
"dieser Roderich Usher ist die wndervollste Figur, die je erfunden worden ist", sagte er schnell und unvermittelt.

72710
es war klar, daß Doktor Mantelsack heute außerhalb jeder Ordnung fragte und sich gar nicht darum kümmerte, wer am längsten nicht examiniert worden war.

73730
rief Petersen, der vom Galgenhumor ergriffen worden war.

☆ 本資料の元になった「トーマスマン=ファイル」は、樋口忠治氏（九州大学）の作成したものであり、同氏に心から感謝致します。

ロシア語動詞の態

中 澤 英 彦

0.

ロシア語の態の研究史は永く、ロシアはもとより、その他の外国においても、一定程度の成果を挙げている。それに対して日本のロシア語学において、態は我々の知る限りでは、あまり研究されない文法項目の一つである。

また研究も態の本質の規定や態を構成する成員の数をめぐるものがほとんどである。ところがそれらの成果を踏まえて、いざ具体的な例を分析しようとするととまどうことがしばしばである。従来の研究の成果は、必ずしも現実を完全に説明しているとは言えない。

そこで小稿では、我々なりの理論的枠組を構成する前段階として、従来の研究により導きだされた枠組みの有効性を、具体的用例にあたって検証しようと思う。我々の態の研究の第一歩である小稿では、特に問題の多い ся動詞における態と活動体との関係を焦点に据えたい。

0.1

まず態のカテゴリーを Шелякинにならって簡単に規定しておこう。

態のカテゴリーは、二つの対立する文法的な形態とその意味からなり、動作の主体・客体関係をことばの中で実現するものである。ロシア語には能動態と受動態があり、受動態が形態的にも内容的にも特徴表示項である。そのことは、受動態を示す特別な形態論的形態が存在すること、通常、主格プラス態の形態によって表現されるという、統辞論的明確さ、さらに意味論的な狭さにそれが見られる［1-193,194］。

ロシア語の態の特徴は、形態上の複雑さであろう。形態論的に区別されるのは、形動詞における能動形・受動形だけで、それ以外では能動・受動 актива-пассиваという統辞論的な構文の助けを借りる［1-196］。

もう一つの特徴は、受動態形の形成には、語義的、文法的な、また文脈上の複雑な制約があるということである。これらの制約は動詞の他動・自動性、その他と結びついている。他動詞・自動詞のうち、他動詞の一部のみが受動態を形成し、自動詞は能動態を形成する。

しかし、制約はそれだけではない。

例えば、統辞論的な制約には、以下のようなものがある。

Петя подарил Маше книгу.--Книга подарена Маше Петей.は可能であるが、

ペーチャはマーシャに本　　本はペーチャによってマーシャ

をプレゼントした。　　にプレゼントされた。

Маша подарена книгой.

マーシャは本によって（を？）プレゼントされた、は不可能である。それは通常、能動文の第二アクタントだけが受動文の第一アクタントの位置をしめるからである、と説明される［2-212］。

さらに、論理関係からいうならば、当然受動構文が用いられると予想される場合にも、能動形が用いられることがあるが、それでもロシア語では決して非文法的とは感じられない。

Я пришел к вам,чтобы удалить зубы.

（歯医者さんにやってきた患者が）歯を抜きに先生のところへ来ました。

Маша сшила себе новое платье в ателье.

マーシャは、ブティクで新しいワンピースを新調した。

このように、他の言語、例えば英語と比べて、ロシア語では受動構文の使われる割合がはるかに少ない。

ただし、どの意味領域の語彙が受動構文になじまないのか、などの問題はまだ完全には解明されていない。

1.0

では、ロシア語において態は具体的にはどう表現されるであろうか。ロシア語の場合には、動詞に態のカテゴリーがあるだけでなく、完了体、不完了体という体のカテゴリーもあり、両者は密接に結びついている。小稿は、上で見たように態のカテゴリーの特徴表示項は受動態であるので、受動態、そのうち特に ся動詞の表現を見てみよう。

この態と体、さらに態のカテゴリーと関係する他動詞・自動詞および再帰動詞との関係を見るならば、

再帰形　　完了体、不完了体

非再帰形 他動詞 完了体、不完了体

　　自動詞 完了体、不完了体　　というように分類される。

このうち非再帰形の自動詞 は、完了体、不完了体ともに、能動態の表現に用いられるので小稿の対象とならないが、残りはすべて受動態の表現に用いられるのである。

1.1

上に述べたものを簡単に実例で見ていくとしよう。

再帰形　完了体　被動形動詞の過去形は主として状態を示すために用いられるので、動作の意味を強調するとき用いる［4-46 ］が、使用はまれである［5-616］。

Вчера получилась большая почта из Тулы.昨日トゥーラから来た大きな郵便物が受け取られた［3-85］。

再帰形　不完了体

Дом строится　рабочими.家は労働者によって建てられつつある。

非再帰形 他動詞

完了体の被動形動詞過去形

Картина нарисована этим художником.その絵はこの画家によって描かれた。

不完了体の被動形動詞過去形は、完了体に比べるとまれであり、口語か古めかしさを感じさせる。なおかつすべての語からつくられるわけではない［4-30,45.5-615.］。

Дом строен был тем же итальянцем.その建物は全く同じイタリア人の手になるものだ。

不完了体被動形動詞現在は、動作や過程そのものを示すために用いられるが、文章語的な文体であり、規則的には作られず［5-615］、まれである［4-45］

Нами ты была любима.我々によって君は愛されていた。

1.2

この中で特に受動態の表現で中心になるのは、以下の被動形動詞過去形とся動詞である。

1.被動形過去形

Письмо напечатано/было напечатано/будет напечатано.

手紙は印刷済みだ/された・印刷済みだった/印刷されるだろう・済みだろう［6-112］。

2. ся 動詞　Письмо печатается/печаталось/будет печататься.

手紙は印刷されている/された/されるだろう［6-112］。

この二つの形は受動態の表現にかなり自由に用いられるとはいえ、もちろん無条件に用いられるのではなく、それぞれ制限がある。

1.の被動形過去形の場合、

Письмо только что напечатано.　手紙はちょうど印刷されたところだ、と言えないこともないが、Письмо только что напечаталиの方がふつうである。

このように、完了体から作られる被動形過去形は、なんといっても、中心的機能は完了体の意味、特に動作の結果としての状態を示すことである。現実の動作を表現しにくい。そこでその意味を表そうとすると、完了体のся動詞を例外的に用いるか、不定人称文を使わざるを得なくなる。

では 2.の再帰動詞の場合はどうだろうか。これを少々詳しく検討しよう。形態論、文体論以外でも、最も複雑な問題を抱えているからである。ся動詞は不完了体の受動態を主に表現し、不完了体の ся動詞は過去形、現在形、未来形、不定形、副動詞、能動形動詞にもなりうる。形態上の自由さを持っている。

受動態の研究を実証的におこなったHarrison［4］にならうと、ся動詞による受動構文の主語は活動体でもよい。

Строители хорошо оплачиваются.建設労働者には高給が支払われる。

動作主も活動体になりうる、

Дети часто балуются родителями.子供は親にだめにされることが多い。

というように、ほとんどあらゆる場合に受動態の表現が用いられるかのようである。

ところが、アカデミア文法［7］でいうように、不活動体の事物の名称にくらべ人間を表す名詞は実際には受動構文の主語になりにくいのである［7-415］。

Книги собираются в ящики.受動的意味、本は箱に集められている。

Дети собираются в школу. 中動的意味、子供たちは学校に集まる。

特に、主語の人間に及んでいく物理的動作を表す動詞述語は、受動的意味を表現せず、動作主を示す造格と共には用いられない。

Дети провожаются в школу отцом.子供達は父親に学校へ送られていく。

とはいえず、Отец провожает детей.というべきである［7-415］。

Ребенок умывается и одевается няней.「その赤ちゃんはうばによって顔を洗ってもらい、着物を着せられる」も不可能で、

Няня умывает ребекна.「うばが赤ちゃんの顔を洗ってやる」のように表現する。

この場合不定人称文を使うと主語がだせないので、どうしてもうばという動作主を挙げる必要があれば、例文のように能動文を使わざるを得ないのである。ただし、アカデミア文法によれば、「主語が人間であり、述語が再帰動詞であっても、動作主が集団、組織、指導機関руководящее учреждение ならば、動作主を表す造格と共に用いることができる。この場合、動作主の造格が省略されていても受動の意味は保たれる」という補足説明がある［7-415］。

この規定だけでは下に見る例などは完全には説明がつかない。

しかし、最近でた文法書でも［8-273］

後接辞сяを持つ受動相の動詞は大部分三人称単数、複数形と形動詞の形が用いられるが、しかし、一人称、二人称および不定形や副動詞の形でも用いられる。

Каждый день я ослепляюсь солнцем и подхожу к окну,чтобы любоваться его лучами. 毎日私は日の光に目をくらませられながら/幻惑させられながら、その光に見惚れるために窓べによります。

としているだけである［8-273］。活動体の主語というはっきりした記述こそないが、一人称、二人称でも用いられるとしており、一見すると ся動詞による受動表現が常に可能であるという誤解を与えかねない。

この点ではアカデミア文法［7］の記述と本質的にはほとんど変わるところがない、といえるだろう。

この制約についての記述を、ся 動詞の意味分類とともに最も徹底して行なっているのは、Harrisonである。

2.0

Harrison は、Виноградов [9] の再帰動詞の分類を援用して、まず本来の再帰動詞、つまり主体によって主体自身になされる物理的動作を表す動詞ついて考察する [4-11,12] 。

Я бреюсь в этой парикмахерской.僕はこの理髪店でひげ剃ってもらいます。

Она причесывается в этой парикмахерской.彼女はこの美容院で整髪してもらいます、はともに可能であるが、このとき、動作主を表す造格を持ち込むと、ふつうではない文になる。

Я бреюсь этим парикмахером. 僕はこの理髪師にひげを剃ってもらう。

この文の意味は、

Меня бреет этот парикмахер.

という能動の文で表すのである。

もし主語が動物だとやはり能動文を用いることになる。

Кошку моет девочка. 猫は少女に洗ってもらう。

この意味を再帰動詞を用いて Кошка моется девочкой.と言うことはできないのである。 本来の再帰動詞は、再帰の意味が非常に強いので、

Окно моется рабочим. 窓は労働者によって洗われる、は自然であるが、

Окно моется. は、ナンセンスである。窓は決して自らを洗うことはできない。

このようなことから、Harrison は、本来の再帰動詞は受動態を表現する際に、活動体の主語と動作主を用いることはできないという規則を導きだす [4-12] 。

彼は次に、実際には主体自身に行なわれるのではないが、意味的に本来の再帰動詞に近い動詞のグループ、例えば、готовиться 準備する заниматься従事する、などを調べる。

彼によれば、このグループの動詞は再帰的意味が本来の再帰動詞より弱いので、

Она готовится к экзамену профессором Ивановым.

彼女はイヴァーノフ教授によって試験の準備をされている。

Овцы собираются пастухом. 羊は牧童によって集められる。

は、少々不自然ではあるが、可能であるとしている。もちろん、不活動体の主

語ならば受動態となりうる。

Книги собираются в бибилотеке.書物は図書館に集められる。

このようにして、彼はつぎつぎに動詞のグループを分析していくのである。彼の結論は、活動体の主体については、再帰動詞の受動態を避けようとする傾向がある。その理由は、活動体の主語を用いるならば、主語が動作に参加することを暗示し、再帰的意味をだすからであるとしている。

Harrisonの結論を我々は大筋において正しいと考えるものの、彼が、動詞の再帰性にあまりにも依存し過ぎており、動詞以外のものにたいする関心がうすれてしまっている。さらに、動詞の分類基準があいまいだが、そのあいまいな分類にすべて依存しており、いざ具体例にあたろうとすると、うまく処理しきれないきらいがあるといえる。

たとえば、かれの結論だけでは、

В поликлинике больные осматриваются опытными врачами/опытным врачом.

「診療所では患者はベテランの医師によって診察される」は、主体を示す造格は単数でも、複数でも可能である。

これをどう説明するであろうか。

また、

1.Кошка моется девочкой.　猫は少女によって洗われている。

2.Овцы пасутся пастухом.　羊は牧童によって放牧されている。

3.Коровы кормятся доярками. 雌牛は搾乳婦によって餌を与えられている。

4.Лошади седлятся ковбоями. 馬はカウボーイによって鞍をつけられる。

の相違をどう説明するであろうか。

インフォーマントによれば 、自然さは1.,2.3.,4.の順に増すのである。

標準的な辞典［10,11］を見ても、

1.мыться 自分自身を、自分の顔を、体を洗う。洗うの被動形:洗うの 再帰形

2.пастись（家畜や、鳥について）放し飼いにされている、放牧されている:（家畜、野生の草食動物、鳥について）放し飼いになっている。

3. кормиться （動物について、口語）食べる、常食とする:食べる、常食とする、餌を取る。

4. седлаться の見出しはなく、седлать 鞍を何かの動物の背に固定する

（Ожегов）:седлаться　седлать（驢馬や馬などに）の動物の背に鞍をつける、固定する、の被動形 とあり、 再帰動詞か受動かは判断できない。

我々はHarrisonとは幾分異なる方法を取らねばならない。

2.1

もともと、態とは、動詞によって表される主体の動作が主語にむかうものとしてみるか否かという視点の問題であるから、動作の方向というものが重要となる。そこでそれを顕在化させるために、動詞によって表される動作の方向（矢印←→）と「活動性」というものを考えてみたい。方向（矢印）の起点は動作主である。活動性とは、当該の動作を行なう能力を仮に名付けたものである。

1.Кошка моется девочкой.　の場合には、猫も少女もмыть できるので、矢印は
→　　←　　となり、衝突が起こる。つまり、定まった視点が持てなくなるのである。

2.Овцы пасутся пастухом.の文では、牧童は放牧でき、羊は放し飼いになっていられるので矢印は衝突する。
→　　←

3.Коровы кормятся　доярками.の例では、場合によっては、牛は何か餌をとることがあり、搾乳婦は餌を与えることができるので、矢印が衝突する。
→　　←

4.Лошади седлятся ковбоями. では、馬は自ら鞍をおくことはないので、カーウ　ボーイ　だけから←がでる。矢印は衝突せず、一つの視点つまり受動態的視点が決定する。

さらに上述の例を見てみると、осматривать は、外からの検査、聴診によって健康状態、何かの器管の状態を判断する:ある目的で検査する、という辞書の意味であるから、

В поликлинике больные　осматриваются　опытными врачами/опытным врачом.
←

矢印は医師から主語に向かい受動態の視点になることがわかる。

Harrisonの挙げた例も同様に解釈できる。、

Кошка моется девочкой.
→　　←

Окно моется рабочим.　「洗う」という動作に関して、活動性を持つのは労

← 働者だけである。矢印は左り向きになり、受動態 Окно моется. 活動性なし。よって、視点定まらず、これだけでは無意味な文になる。こう見てくると、Harrisonの例で、同じ動詞 мыться を含むいくつかの例を矛盾なく説明できることがわかる。

3.0

ся動詞の受動性については、動詞自体の意味分析はもちろん必要だが、それに尽きるものではない。動詞によって表される動作の方向を決定する要素すべてを考慮に入れねばならないのである。そのとき、活動体の名詞は動作の方向に影響を与えることが最も多いので、活動体の文中における役割（主語か、動作主かとか）が態表現の可否を決定するうえでかなり重要な役割を演ずるのである。

動作の方向性と活動性の考えが他の受動表現にも適用できるかいなかについては、今後の課題としたい。

引用文献 [] 内の最初の数字は文献番号を、次の数字はページをさす。

1.Лопатин В.В.,Милославский И.Г.,Шелякин М.А. Современный русский язык теоретический курс. М.,1989.

2.Касевич В.Б. Семантика Синтаксис Морфология. М.,1988.

3.Русский язык Энциклопедия. М.,1979.

4.Harrison, W.The Expression of the Passive Voice. Studies in the Modern Russian Language .Cambridge ,1967.

5.АН СССР Русская грамматика.М.,1980.

6.木村彰一 『ロシア文法の基礎』 白水社、 1974.

7.АН СССР Грамматика русского языка.М.,1960.

8.Шведова Н.Ю.,Лопатин В.В. Краткая русская грамматика.М.,1989.

9.Виноградов В.В. Русский язык (Грамматическое учение о слове). М.,1972.

10.Ожегов С.И. Словарь русского языка М.,1972.

11.АН СССР Институт русского языка Словарь русского языка в четырех томах. М.,1983.

中国語の受動文

望月圭子

目次

0．　まえがき

1．　受動態のプロトタイプ

2．　中国語受動文のタイプ

2．1．「被」受動文

2．2．「叫／让」受動文

2．3．「给」受動文

2．4．意味的受動文

3．各種受動文の統語構造

3．1．「被」受動文の統語構造

3．2．「叫/让」受動文の統語構造

3．3．「给」受動文の統語構造

3．4．意味的受動文の統語構造

4．まとめ

0．　まえがき

中国語の受動態は、動詞に形態変化が生じないという意味で、日本語・英語と著しく異なる。従って果して受動態といえるのかどうか、結論のついていない構文も存在する。以下、必ずしも伝統的観念にとらわれることなく、中国語の受動態を論じる。

1．　受動態のプロトタイプ

中国語の受動態を論じるにあたって、何を基準として受動態とみなすかをまず明示しておきたい。ここでは、柴谷（1985, p.837）に挙げられている次のような‘受動態の典型’の特徴づけを基準にすることにする。

表１

a.　第一義的な語用論的機能：動作主の非焦点化(defocusing of agent)[1)]

b.　意味論的特性：

Ⅰ　意味論的結合価：
　述語動詞（動作主、被動者）
Ⅱ　主語が影響を受ける。

c.　統語的特性：

Ⅰ　統語的コード化：
　動作主　→　φ　（コード化されない）
　被動者　→　主語
Ⅱ　述語動詞の結合価：
　能動態＝Ｐ／n；
　受動態＝Ｐ／n-1

d.　形態論的特性：

能動態＝Ｐ；
受動態＝Ｐ［+passive］[2)]

表１の理解を助けるため、柴谷（同上,p.832）の次の記述を紹介しておく。

統語論的にコード化された諸要素の焦点度は、次にしめすような文法関係に関わるハイエラーキーによって、高から低へと連続的に変化する。

主語　＞　直接目的語　＞　間接目的語　＞　斜格目的語

２．　受動文のタイプ

一般に中国語の受動文には次の四つのタイプがあるといわれている。

Ａ　「被」受動文

これは書面語的な受動文である。

（１）　张三被李四打了。＜張三は李四に殴られた＞

B　「叫／让」受動文
これは口語的な受動文である。

（2）　张三叫／让李四打了。＜（1）に同じ＞

C　「给」受動文
これも口語的な受動文である。

（3）　张三给李四打了。＜（1）に同じ＞

D　意味的受動文
これは受動態であることを示す標識をもたない受動文である。

（4）　信写好了。＜手紙はちゃんと書いてある＞

以上に示したA～Dの、受動文としての典型の度合を、表1で示した基準によって、以下、検討していく。

2.1.「被」受動文

まず、「被」受動文（1）（＝张三被李四打了。）を検討しよう。動作主の非焦点化については、（1）に対応する能動文（5）との比較によって（1）における動作主の非焦点化が明白となる。

（5）　李四打了张三。＜李四は張三を殴った＞

つまり、（1）の動作主「张三」は主語の位置にあるが、（5）では目的語の位置に移っており、従って非焦点化が行われていることがわかる。それどころか、「被」受動文は動作主が表層に現れない、次のような表現も可能なのである。

（6）　张三被打了。＜張三は殴られた＞

この（6）は表1の次の要件を満たしている。

a.　動作主の非焦点化。（6）は‘動作主が文脈依存のＰＲＯになった’文とみなすことができ、これは究極の非焦点化である。

b.　Ⅰについていえば、（６）の述語動詞「打」は、［動作主、被動者］を必要とする２価動詞であるから、Ⅰの要件を満たしている。Ⅱについていえば、（６）の主語「张三」が影響を受けていることは明かである。

c.　（６）の動作主「张三」はコード化されていないし、被動者「李四」が主語になっているから、Ⅰの要件を満たしている。また、述語動詞の項が能動文に比べて一つ減っているから、Ⅱの要件も満たしている。

d.　（６）には対応する能動態にはない「被」を持っているから、d.の要件を満たしている。

以上みてきたように、（６）は柴谷の挙げる特性をすべて満たしている。従って、最も典型的な受動文ということができる。

次に、例文（１）（＝张三被李四打了。）を検討すると、（１）は 、ｃ.Ⅰの‘動作主 → φ ’という要件を満たしていないし、ｃ．Ⅱの述語動詞の結合価が一つ減るという要件も満たしていないから、（６）に比べて典型的な受動文とはいえないことになる。

２．２．「叫/让」受動文

「叫/让」受動文が「被」受動文と最も異なる点は、「叫/让」受動文は、稀な例外はあるとしても[3]、動作主を省略できない点である。例えば、（２）（＝张三叫李四打了。）は、動作主「李四」省略して次のように言うことはできない。

（７）　＊张三叫打了。(いわんとする意味は、<張三はなぐられた>)

なぜ（７）が成立しないかと言えば、「被」が受動専門の動詞であるのに対して、「叫/让」は、もともと使役を表す動詞と考えられるからである（詳しくは後述）。動作主を省略できないのであるから、表１について言えば、ｃ.Ⅰのうち、‘動作主→φ’という要件と、ｃ.Ⅱの要件を満たしていない。これらの、「叫/让」受動文がみたしていない要件は、（１）（＝张三被李四打了。）が満たしていない要件とまったく同じであり、従って典型の度合が（６）（＝张三被打了。）に比べると低下しているということになる。

２．３．「给」受動文

「给」受動文が「被」受動文・「叫/让」受動文と異なる点は、「给」受動文は、二重目的語をとる動詞「给」の、授与を表す機能から派生したという点である（詳しくは後述）。しかし、例えば（３）（＝张三给李四打了。）の「给」は「被」に置き換えることができるし、また「被」受動文の場合と同じように、動作主の「李四」を省略することができる。従って、「给」受動文の受動文としての典型の度合は、表１による限り、「被」

受動文と全く同じということになる（表１についてのいちいちのチェックは省略）。しかし、これはどうも直感に反するようで、表１の特徴づけは、中国語にはそのままあてはまらないようだ。その理由として次の要因が考えられる。つまり、中国語の受動表現が、受動標識である「被」「叫/让」「给」の本来の語彙的意味に大きく左右されてしまうのである。

なお、「给」は、使役文にも使われるが、これについては後述する。

２．４．意味的受動文

次にあげる（８）（９）（１０）（１１）はいずれも意味的受動文である。

（８）　信写好了。＜手紙は書き終わった＞

（９）　啤酒喝了。＜ビールは飲んだ＞

（１０）　那件新闻广播了。＜あのニュースは放送された＞

（１１）　那本书已经出版了。＜あの本はすでに出版された＞

（８）～（１１）には、一見してわかるように、次のような特徴がある。

①　受動を示す要素がない。

②　動作主が現れていない。

③　対象を表す名詞句が文頭に位置している。

これら意味的受動文が通常の受動文と異なる点は、受動を示す標識がつかわれていない点である。また、もう一点、「叫/让」受動文と違って、動作主が現れていない点があげられる。以上の点をふまえて、表１に基いて検討してみると、ｄ.の形態的特性、即ち、

能動態＝P;

受動態＝P[+passive]

という要件が満たされていないだけである。とすると、意味的受動文は、受動文としての典型の度合が非常に高いということになる。しかし、これも、実感と甚だずれているように思われる。その理由については、以下、３．４．で説明する。

3．1．「被」受動文の統語構造

「被」受動文の最大の問題は、「被」を動詞と見なすか、それとも介詞（英語でいう前置詞）とみなすかという問題である。

湯（1990,p.240）では、次のように「被」は介詞と見なされている。

(12) a　扑满被他用锤子敲碎了。＜（素焼の）貯金壺は彼に金槌で粉々にされた＞

b　扑满[vp[被他][用锤子][v敲碎了]]

筆者は「被」を動詞とする立場をとるが、まず、中国語の動詞の一般的特徴をあげて、「被」が動詞としての資格を持っているかを検討しよう。

＜中国語の動詞の一般的特徴＞

① アスペクト辞「着、了、过」を後ろに付加できる。

② 副詞の修飾を受けられる。

③ ‘重畳’できる。（例：「看」＜見る＞→「看看]＜ちょっと見る＞）

④ ‘能願動詞’（能力、願望、可能、必然、義務、推量などの意を表し、英語の助動詞に近いとされる）を前に付加できる。

⑤ ‘趨向動詞’を後ろに付加できる。（例：「跳下去」＜飛び降りる＞）

⑥ 補語を後ろに付加できる。（「吃得很慢」＜食べるのがとても遅い＞）

⑦ 数量詞/時間詞を付加できる。（「去一次/走了一个小时」＜一度行く/一時間歩いた＞）

⑧ 反復疑問文をつくることができる。（「你去不去？」＜君は行くか、行かないか＞）

⑨ 二つ以上の節を目的語として取れる。（「我知道他住了一天就回国。」＜私は彼が一日滞在してから帰国することを知っている＞）

上の一般的特徴のうち、「被」は②、④、⑨の特徴しかもっておらず、一般的動詞と見なせないことは明かである。しかし、「被」を介詞とみなす分析にも不合理な点がある。

それは、介詞は、後続する名詞を省略することもできないし、二つ以上の節を目的語に取ることもできないのに対し、「被」は、この二つが可能であるという点である。「被」の後の名詞が省略可能であることは、すでに２．１．で述べたが、「被」が二つ以上の節を目的語として取る現象の例をあげておこう。

橋本(1988,p.332f.)は、複数の目的語節を取りうる例として次の例をあげている（英訳は橋本による）。

（１３）　我被他拉住不让走。[4)]

I was caught and not allowed to walk by him.

（１４）　我被他跑过来拦住。[5)]

I was held back by him who came running to me.

では、「被」受動文はどのような統語構造をもつのか。例えば、最も典型的な「被」受動文（１５）ａ は（１５）ｂ のようなＳ構造を持つと筆者は分析する。

（１５）　ａ　张三被李四打了。

ｂ　张三$_i$[vp [v 被][s 李四打了 e$_i$]]

つまり、「被」を目的語節をとる動詞と見なすのである。この分析に従えば、「被」の後の動作主を省略した（１６）ａ は（１６）　ｂのようなＳ構造をもつことになる。

（１６）　ａ　张三被打了。

ｂ　张三$_i$ [vp [v 被][s ＰＲＯ 打了 e$_i$]]

（１６）ｂ では、省略された動作主は、「被」の補文の主語の位置にあるＰＲＯと分析される。このＰＲＯは、文脈依存のＰＲＯといえる。

また、（１３）のように、二つの節を補文としてとる「被」受動文（（１７）ａ として再録）も、（１７）ｂ のようなＳ構造をもつと分析される。

（１７）　ａ　我被他拉住不让走。

ｂ　我$_i$[vp [v 被][s [s 他$_j$ 拉住 e$_i$][s ＰＲＯ$_j$ 不让 e$_i$ 走]]]

要約して言えば、介詞には絶対に見られない二つの現象、即ち、後続する名詞の省略及び二つ以上の節を補文としてとるというこの二つの現象は、「被」を動詞としてみなす分析によって説明可能となる。

次に、「被」受動文が動詞の意味素性によって成立したりしなかったりする現象について述べておきたい。次の（１８）（１９）の例文を見てみよう（例文は李临定(1986)による）。

（１８）　a　我们拆（了）棚子了。＜私たちは小屋を取り壊した＞

　　b　棚子被他拆了。＜小屋は彼によって取り壊された＞

（１９）　a　我们搭（了）棚子了。＜私たちは小屋を組み立てた＞

　　b　＊棚子被他搭了。＜小屋は彼によって組み立てられた＞

（１８）の「拆」＜取り壊す＞と（１９）の「搭」＜組み立てる＞は互いに反義語であるが、「拆」が能動文にも「被」受動文にも用いられるのに、「搭」は「被」受動文には用いられない。　また、平行する対比として、（２０）と（２１）が挙げられる（例文は李(1986)による）。

（２０）　a　他们卸（了）粮食了。＜彼らは穀物をおろした＞

　　b　粮食被他们卸了。＜穀物は彼らによっておろされた＞

（２１）　a　他们装（了）粮食了。＜彼らは穀物を積んだ＞

　　b　＊粮食被他们装了。＜穀物は彼らによって積まれた＞

（２０）の「卸」＜おろす＞と（２１）の「装」＜積む＞は、互いに反義語であるが、「卸」は、「被」受動文が可能だが、「装」は、能動文（２１）ａに対応するような「被」受動文が不可能である。李(1986, p.342)は、こうした現象は＜除去する＞と＜取得する＞という動詞の意味の違いに由来する、と述べている。つまり、‘被害’のニュアンスを示す「被」受動文は、動詞の意味によって成立したりしなかったりするわけである。中国語で、＜除去する＞意を持つ動詞はプラスのイメージで捉えられ、＜取得する＞意を持つ動詞はマイナスのイメージで捉えられるとするならば、次のような＜除去する＞意を持つ動詞、例えば、「拆」「卸」等は、そのマイナスのイメージゆえに被害のニュアンスを示す「被」受動文に用いることができ、＜取得する＞意を持つ動詞、例えば「搭」「装」等はプラスのイメージが被害のニュアンスと相反して、「被」受動文に用いることができない

いと推定される。動詞の意味素性と「被」受動文の成立の可否関係については、これからの課題としたい。

３．２．「叫/让」受動文の統語構造

「叫/让」は、もともと使役専用の標識であったが、清代に入ってから、受動文にも用いられるようになった、というのが定説のようである。特に橋本(1987)は、この事実をアルタイ語の影響としている。たしかにアルタイ語族の満州語には、接中辞-bu-があり、これは使役・受動両用である。しかし、接中辞-bu-がなぜ使役・受動両用なのかという解明はなされていないし、英語にも使役・受動両用の文型があるから、アルタイ語族の影響と断定するのはまだ時期尚早ではないだろうか。

柴谷(1982,p.270)から、使役・受動両用の文型の英語の例を引用してみよう。

（２２）　I had my car stolen (by the street gang).

柴谷によれば、この構文は、＜自分の自動車を盗まれた＞という意味にもとれるし、＜自分の自動車を盗ませた＞という意味にもとれる。二つの解釈が可能である理由は、柴谷は述べていないが、英語でも、「叫/让」同様、‘have’が使役・受動の両義をとりうるのである。中国語にも英語にも、使役・受動両用の現象があるということは、使役と受動の関係について、もう少し普遍的な見地から考えてみる必要がありそうである。

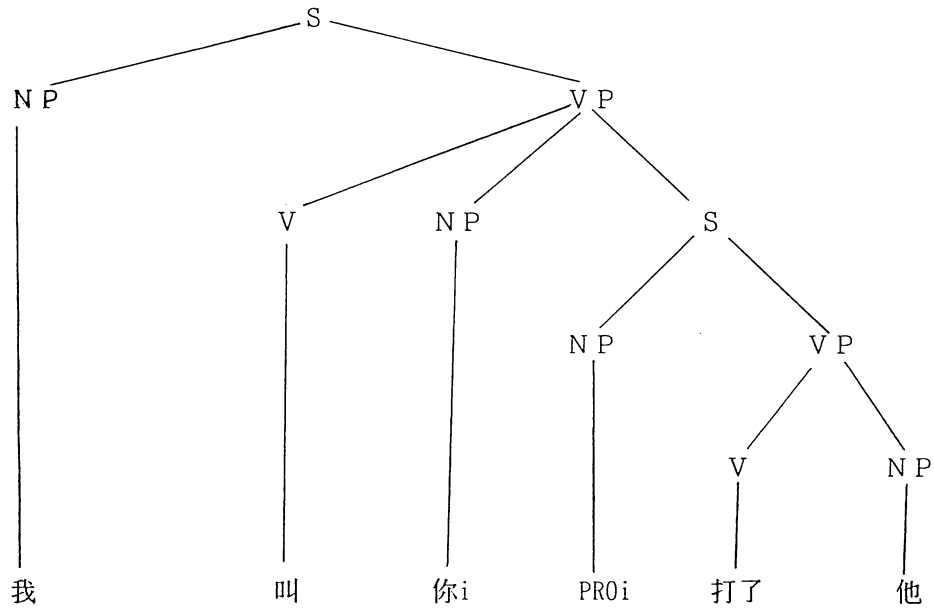
さて、上述のように、「叫/让」はもともと使役専用だったと言われている。それがアルタイ語の影響かどうかは定かではないが、何らかのきっかけで受動をも表すようになったのは、「叫/让」の機能に、そのきっかけをうけいれるだけの下地があったものと思われる。以下、その下地とは何かについて述べてみたい。

まず、「叫」の使役用法の構造（２３）を考えてみる。

（２３）　我叫你打了他。＜僕は君に彼を殴らせた＞

（２３）の「叫」は不完全他動詞である。従って、（２３）の「叫」は目的語と補文（ここではVPに直接支配されたＳ）をとり、（２４）のような構造をなしていると考えられる。

（２４）



（２４）の構造は所謂‘兼語式’構造であって、日本語に直訳すると次のようになる。

（２５）　僕は君に［君が彼を殴ることを］させた。

ところで、もし（２３）の補文の目的語が「他」ではなくて、主文の主語（＝我）と同一指示の空範ちゅうであるならば、そのＳ構造は次のようになる。

（２６）　我i［vp［v　叫］［np 你j］［s　ＰＲＯ$_j$ 打了 e$_i$］］

（２６）中のＰＲＯおよび‘e’は音声形式を持たない空範ちゅうであるから、（２６）は表面的には（２７）となる。

（２７）　我叫你打了。

（２７）の意味は（２６）と等価であるから、（２７）の意味を日本語に直訳すれば、（２８）のようになる。

（２８）　僕は君に［君が僕を殴ることを］させた。

（２８）は結局（２９）の意味につながる。

（２９）　僕は君に殴られた。

以上の観察は、元来、使役文として使われていた「叫/让」構文が、受動文としても使われるメカニズムを説明するものであると思う。なお、「叫/让」受動文は、２．２で述べたように目的語をとる「被」受動文とは異なり、兼語式文であるから、動作主格の名詞はかならず現れる。

以上述べたことを要約すると、次のようになる。

① 「叫/让」受動文は、「叫/让」使役文から派生されたものである。

② 「叫/让」使役・受動文は、いずれも兼語式文である。

③ 「叫/让」使役・受動文の両者の差は次の点にある。即ち、「叫/让」使役文は主文の主語と目的語が同一指示でないのに対して、「叫/让」受動文は同一指示である。

④ 「叫/让」受動文は兼語式文であるため、動作主格の名詞句を省略することができない。

３．３．「给」受動文の統語構造

「给」はもともと日本語の＜やる＞に当たる語である。日本語の３項動詞の＜やる＞には、視点を異にする対応する表現、＜もらう＞があるので、間接目的語の受動化が起こらない[6)]。

（３０）　太郎が次郎に本をやった。

（３１）　＊次郎は太郎に本をやられた。

（３２）　次郎は太郎に本をもらった。

中国語には＜もらう＞に当たる３項動詞がないので、普通、次のように言う。

（３３）　太郎给了次郎一本书。＜太郎は次郎に本を一冊やった＞

しかし、（３３）は（３２）と次の点で異なる。即ち、（３３）は事態を主語「太郎」（動作主）の側から述べているのに対し、（３２）は「次郎」（被授与者）の側から述べ

ているのである。要するに視点が異なっているのであり、「给」は＜やる＞であって、＜もらう＞のではないのである[7)]。

また、次のことを確認しておく必要もある。即ち、日本語には次のような表現はない。

（３４）　＊僕$_i$ は君$_j$ に[$_{NP}$[$_s$ ＰＲＯ$_{i/j}$ がこの手紙を見る]こと]をやる。

つまり、日本語の＜やる＞の場合、節が形式名詞＜こと＞を伴って直接目的語になることがないのである。ところが、「给」はそれが可能である（但し、＜こと＞に対応する要素を必要としない）。

（３５）　我$_i$ 给你$_j$ [$_s$ ＰＲＯ$_{i/j}$ 看看这封信]

（３５）は、ＰＲＯのコントローラーが何であるかによって（３６）のように二通りに解釈される。

（３６）ａ　僕は君のためにこの手紙を見てあげる。（←僕は君に僕がこの手紙を見ることを与える：ＰＲＯ$_i$ のとき）

ｂ　僕は君にこの手紙を見せてあげる。（←僕は君に君がこの手紙を見ることを与える：ＰＲＯ$_j$ のとき。これは、一種の使役態と考えられる）

以下、（３６）のような表現が受動態とどうつながるかについて述べる。まず（３７）を考えよう。

（３７）　张三给李四偷走了（他的）钱包。＜張三は李四に（自分の）さいふを盗まれた＞

（３７）は（３８）のようなＳ構造を持つ[8)]。

（３８）　张三$_i$ [$_{vp}$[$_v$ 给][$_{NP}$ 李四$_j$] [$_s$ PRO$_j$ 偷走了（他$_i$的）钱包]]
（文頭の「张三」は主語ではなく、主題と考える。以下、同様）

（３８）を日本語に直訳すると（３９）になる。

（３９）　張三は李四に、李四が（彼の）さいふを盗むことを与えた。

ところで、上述のように、「被」受動文は動作主を必ずしも示す必要がない。「被」受動文のこうした現象への類推作用が働き、（４０）のような動作主を欠く「给」受動文が

現れたものと考えられる。

（４０）　张三给偷走了钱包。＜張三はさいふを盗まれた＞

さらに（４１）のように、非生物名詞が主題となっている文も現れるが、これは西洋語の影響かもしれない。

（４１）　钱包又给人偷走了。＜さいふはまた人に盗まれた＞

また、（４２）の構造についても説明しておきたい。

（４２）　张三给李四打了。＜張三は李四に殴られた＞

（４２）のＳ構造は（４３）のようになる。

（４３）　张三i[vp[v给][Np 李四$_j$] [s PRO$_j$ 打了e$_i$]]

（４３）のように、補文主語の位置にある PRO の先行詞が間接目的語（（４３）では「李四」）で、補文の目的語の位置にある e の先行詞が主題（（４３）では「张三」）である場合、受動文として解釈されるのである。

要約すると、「给」受動文の原型は、（３８）であり、この原型に、「被」受動文への類推、西洋語からの影響が働いて（換言すれば、誤用が正用となって）、さまざまなタイプの「给」受動文が生じたと考えられる。このような変化に伴って、「给」受動文も本来の動詞から、介詞あるいは助詞・副詞へと移行していると考えられる。

なお、「给」受動文は、中国南方での使用が多い。

３．４．意味的受動文の統語構造

結論から先にいえば、所謂‘意味的受動文’は、実は‘主題―評言’タイプの文および‘能格動詞文’であると筆者は分析する。以下、この分析の根拠を説明する。まず、所謂意味的受動文（４４）（４５）を見てみよう。

（４４）　信写好了。＜手紙はちゃんと書いた＞

（４５）　饭碗打破了。＜茶碗は割った＞

（４４）（４５）について、吕・朱(1951,p.14) の説明を要約して引用しよう（要約の責任は筆者にある）。

受動態は、「饭碗被他打破了。」<茶碗は彼によって割られた>のように、おおむね動作主を必要とするが、もし動作主が不明のときには、「饭碗被人打破了。」<茶碗は人（だれか）によって割られた>のように不特定名詞「人」を形式的に使うか、あるいは単に「饭碗打破了。」と言う。また、主語にとって不愉快でないことには、普通受動態を使わない。そこで、「信写好了。」<手紙はちゃんと書いた>、「货送来了。」<荷物は送られてきた>のような、受動態の形式は持っていないが、受動の意味は持っているパターンが普通に使われる。

彼らのこの見解を、筆者が拡大解釈すると、次のようになる。

中国語では、受動態は、主語（あるいは話者）にとって不愉快な事態でなければ、一般には使わない。一方、‘主題—評言’文は主題に焦点をおいた表現である。そこで、主語（あるいは話者）にとって不愉快でない事態を、被動者に視点をおいて表現しようとすれば、（４４）のような‘主題—評言’文で表すのが普通である。

従って、筆者は、（４４）（４５）を意味的受動文とせず、‘主題—評言’文とみなす。

ところで、所謂‘意味的受動文’の例を、参考書・辞典・論文で調べてみても、動作主が現れている例文は皆無といってよい。例えば、一番例文の量が多い李珠(1989)にすら一例もないのである。筆者の見た限り、唯一の例外は、（４６）である。

（４６）　那本书我买到了。<あの新刊書は私は買って手にいれた>

中国人の語感からすると、（４４）（４５）と（４６）の間には、動作主の有無によって生じる、ニュアンスの差が生じているのであろう。

次に、所謂意味的受動文を能格動詞文とみなす根拠について述べよう（通例、‘自・他両用動詞’が自動詞として機能している場合、‘能格動詞’と言う）。まず、次の例文を見てみよう。

（４７）　门开了。<戸が開いた>（<戸を開けた>ではない）

（４８）　汽车停了。<自動車が停まった>（<自動車を停めた>ではない）

（４９）　苏联队打败了。<ソ連チームが負けた>（<ソ連チームが負かした>ではない）[9]

上の各文の「开」「停」「打敗」は、それぞれ共に能格動詞であるから、（４７）～（４９）を意味的受動文とすることはできない。さらに、次のような例もある。

（５０）　那本书已经出版了。＜あの本はすでに出版された＞

（５１）　那个消息已经播送了。＜あのニュースはもう放送された＞

（５１）（５２）の「出版」「播送」は、まだ能格動詞ではないと思うが、多くの例を挙げている李珠(1989)に、（５２）のような例が見られる[10]。

（５２）　（快来啊，）饭烧糊了。＜（早く来なさい、）ご飯が焦げてしまったよ＞
（＜ご飯を焦がしてしまったよ＞ではない）

（５２）の「烧糊」は能格動詞であるから、（５２）を意味的受動文の例とすることはできない。一般的に、「烧糊」のような‘动结式动词’（動詞とその結果を表す要素が結合してできた複合動詞）には能格動詞が多い。例えば、次の（５３）の「气死」も、このタイプの能格動詞である。

（５３）　我气死了。＜私は死ぬほど腹がたった＞（「他气死我了。」＜彼は私を死ぬほど腹をたたせた＞と比較していただきたい）

さて、李珠が意味的受動文として挙げている例文中の動詞には、

「丢」　＜なくす、なくなる＞、　「解放」　＜解放する、自由になる＞
「解决」＜解決する、落着する＞、「成立」　＜成立させる、成立する＞
「提高」＜高める、高まる＞、　「增加」　＜増やす、増える＞
「改」　＜改める、改まる＞

などがあり、これらは全て能格動詞である。中国人自身、自動詞、他動詞および自・他両用動詞の区別を明確に意識していないようで、実際、中国語の辞典には自・他動詞の区別の標識がついていない。筆者の見解では、能格動詞を用いた所謂‘意味的受動文’は、能格動詞文と分析されるべきである。

以上、所謂‘意味的受動文’は、‘主題-評言’文あるいは能格動詞文と分析できることを述べた。

なお、最後に、次のようなタイプの文にもふれておきたい。

（５４）　他死了妻子。＜彼は妻に死なれた＞

この（５４）は、日本語訳からわかるように、日本語で‘間接受動文’あるいは‘迷惑の受身文’といわれる文に相当するものである。もし単に事実だけを述べるのならば、（５４）は（５５）のような表現になる。

（５５）　他的妻子死了。＜彼の妻は死んだ＞

（５４）の特殊性は、「死」が本来１項動詞であるのに、（５４）では、２項動詞として機能している点である（「他」は経験者であり、「妻子」は動作主（？）である）。注目すべき点は、「他」にとって好ましくない事態が生じたときに、（５４）のような表現が使われることである。従って次の（５６）は成立するが、（５７）は成立しない。

（５６）　李教授死了他最得意的学生。＜李教授はお気に入りの学生に死なれた＞

（５７）＊李教授死了学生。＜李教授は学生に死なれた＞

（５６）の場合、「李教授のお気に入りの学生が死んだ」という事実があり、次にそれによって「李教授」が影響をうけたという別個の事象があって、両者が合体しているのである。この合体という点では、日本語の間接受動文と全く同じである。

４．まとめ

以上、中国語の受動文について概観してきたが、典型的な受動文は「被」受動文といえる。それは、「被」受動文の統語構造は受動態専用のものであり、かつ動作主が現れる必要がないからである。

「叫/让」受動文は、本来使役文であり、かつ動作主が必ず現れるという点で、「被」受動文よりも典型度が落ちる。

「给」受動文は、本来授与動詞で、＜…てやる＞という語彙的色彩がまだ残っている。動作主を表さなくてもよい点は、「被」受動文と同様であるが、その多彩な用法の一つとして、受動態の用法が存在するのであるから、典型度の度合は、「叫/让」受動文よりさらに落ちる。

所謂‘意味的受動文’は、実は受動文ではなく、大半は‘主題-評言’文であり、一部は能格動詞文である。冒頭に挙げた柴谷(1985)の‘受動態の典型の特徴づけ’が必ずしも中国語に適用できるとは限らないのは、中国語の受動態が、日本語の＜くれる、られる＞および英語の‘ be ＋ ～ed ’といった形態論的標識とは異なり、語彙的標識の使用によるものであるからである。

細部は未解明な部分が多いが、中国語の受動態の大枠について概説した。

(1991.1.3.)

注

1）　柴谷(1985)によれば、ここで言う‘焦点’とは、談話文法でいう焦点、つまり新情報を担う要素といったものではなく、久野暲の言う‘視点’あるいは‘感情移入’に同じか近いものと受け取られる。
なお、柴谷(1982,p.261)に次の記述が見られる（黒点は引用者による）。

……、ヴォイスとは、動作主から発せられた動作が対象に行き着く状況を二つの違った側（または視点）から述べさせる文法機能である。動作主の側から述べる表現を能動態といい、対象の側から述べる表現を受動態という。

2）　ここの‘passive’は、‘受動標識’の意と思われる。

3）　稀な例外として、次の例がある。

嚇，连话都不叫说了！<おや、話もさせないんだね>（岩波中国語辞典「叫」の項）

ただし、これは「叫」の使役用法である（後述）。

4）　この例文を非文とする中国人もいる。しかし、李临定(1986,p.213)では、この文を次のような過程を経てできたものとしている。

他拉住我＋他不让我走（＝他拉住我不让走）

→我被他拉住＋他不让我走→我被他拉住不让走

5）　李临定(同上,p.214)では、次のような過程を経てできたものとしている。

他跑过来＋他拦住我→他跑过来＋我被他拦住→我被他跑过来拦住

6）　柴谷(1982,p.265)参照。

7）　「给我！」を＜僕にくれ＞と訳しても構わないが、これはあくまでも意訳であり、直訳は＜僕に与えよ＞である。

8）　中右(1987,p.105)に、次のような図が挙げられているのは、「给」が受動態に用いられることの傍証になるであろう（配列型の後半、および例語の大半を省略）。

日本語の法・相・態述語の配列型

【行為　→　　【過程　→

行為 過程 状態	── 使役態	── 接受態	── 受動態 ── 自発態 ── 可能態		（以下省略）
殺す	させる	てやる てもらう	られる		

ついでながら、英語の‘give’にも類似の現象がみられる。

① You gave me to understand that ….
＜君は僕に…ということをわからせてくれた＞

② I was given to understand that ….
＜僕は…ということがわからせられた→僕は…ということがわかった＞

9）　郭绍虞(1985,p.211)は、受動態で述べられる行為は、主語にとって不如意・不愉快あるいは望まない出来事である場合がほとんどであるから、「被打敗」＜打ち負かされる＞とは言っても、「被战胜」とは言わないのだ、という趣旨の説を述べている。

10）　李珠(1989,p.151)は、曹禺の台本『家』について調べたところ、受動文78例中、意味的受動文は65例あった、と報告している。なお、吕文华(1987)は、「被」受動文と意味的受動文を対応させた文例を多く挙げている。

参考文献

傅雨贤(1986)　「被动句式与主动句式的变换问题」,《汉语学习》第2期,1-7頁。

郭绍虞(1985)　『照隅室语言文字论集（郭绍虞文集之一）』，上海古籍出版社。

橋本萬太郎(1987)　「汉语被动式的历史・区域发展」,《中国语文》第1期,36-49頁。

Hashimoto,Mantaro J.(1988) The structure and typology of the Chinese passive construction, "Passive and Voice" edited by Masayoshi Shibatani, pp.329-354,John Benjamins Publishing Co.,Amsterdam/Philadelphia.

黄正德(1988)　「中文的两種及物動詞和两種不及物動詞」,第2届世界華文教学研討会へ提出論文,台北。

木村英樹(1981)　<被動と結果>,《日本語と中国語の対照研究》第5号,27-46頁日中語対照研究会。

児玉徳美(1990)　<意味役割と文法関係と格形態素(4)>,立命館言語文化研究2巻2号。

輿水優(1985)　『中国語語法の話-中国語文法概論』,光生館。

李临定(1986)　『现代汉语句型』,商务印书馆。

李临定(1988)　『汉语比较变换语法』,新华书店。

李珠(1989)　「意义被动句的使用范围」，『世界汉语教学』第3期。

吕叔湘・朱德熙(1951)　『语法・修词讲话，第三讲』，旅大人民出版社。

吕文华(1987)　「"被"字句和无标志被动句的变换关系」,『句型和动词』168- 181頁,语文出版社。

望月八十吉(1969)　<中国語の'はめこみ構造'>,『人文研究』20巻10分冊,14-29頁,大阪市立大学。

望月八十吉(1970) ＜‘给’について＞,『人文研究』21巻4分冊,15-30頁,大阪市立大学。

望月八十吉(1974) 『中国語と日本語』,光生館。

中右 実(1987) ＜日英語のテンスとアスペクト-テンス・アスペクト理論への統一的視点-＞,Kansai Linguistic Society7,pp.92-107.

大河内康憲(1982) ＜ヴォイス：中国語の受身＞,『講座・日本語学10;外国語との対照Ⅰ』,319-332頁,明治書院。

大河内康憲(1983) ＜日・中語の被動表現＞,《日本語学》4月号。明治書院。

柴谷方良(1982) ＜ヴォイス：日本語・英語＞,『講座・日本語学10;外国語との対照Ⅰ』,256-279頁,明治書院。

Shibatani,Masayoshi(1985) “Passive and related constructions:A prototype analysis”, Language,vol.61,pp.821-848.

湯 廷池(1989) 『漢語詞法句法続集』,台湾學生書局。

湯 廷池(1990) 「現代中国語文法研究の方法論について」,日本中国語学学会関東支部および関西支部例会における講演のハンドアウト。

山崎直樹(1987) ＜受動態のプロトタイプにたいする中国語からのふたつの寄与＞《開篇》3号,27-42頁,早稲田大学文学部564研究室。

中国社会科学院语言研究所现代汉语研究室(1987)『句型和动词』,语文出版社,北京。

マレーシア語の受動構文

正　保　勇

1．受動構文の定義 —— 序にかえて

受動構文の定義に関しては，実に様々な定義がなされている。例えば，Talmy Givón に於ける定義は次の様になっている。

> Passivization is the process by which nonagent is promoted into the role of main topic of the sentence. And to the extent that the language possesses coding properties which identify main topics as subjects and distinguishes them from topics ,then this promotion may also involve subjectivalization.

この定義は，受動構文をそれの持つ機能の面から眺めて，その特徴を一般化したものである。この定義はフィリッピンのビコル語（Bikol)の様に動作主以外の全ての要素が受動化によって，主題になり得る様なタイプをも受動構文の中に取り込むことができる。これに対して，Perlumutter & Postal(1974)の次の様な定義に従えば，ビコル語の様なタイプの構文は受動構文の範疇から外されることになる。

(i)The active ＳＵＢＪＥＣＴ case ceases to bear any grammatical relation to its verb ,and

(ii)the ＤＩＲＥＣＴ ＯＢＪＥＣＴ becomes subject.

ビコル語に於いては，非動作主が受動化によって主題となる場合，それは形態論的特徴によって示されるだけで，位置の移動を伴わないが，Talmy Givon の定義では，この様なタイプの構文も受動態と見做される。

受動構文では，多くの場合，動作主の格下げや，削除が起こるのが普通であるが，イムバブラ・ケチュア語（Imbabura Quechua）の様に，受動態となっても能動態のときの動作主の主格がその儘維持されるタイプもある。又，フイリッピンの言語では，受動態でも通常動作主が顕現する。Talmy Givon の定義を採用すれば，この様な動作主の格下げや削除が起こらないタイプの構文も受動構文の扱いを受けることになる。しかし，もし Edward Keenan（1975）が主張するように，受動化は，基本的には動作主の主語の位置からの格下げであって，非動作主の主語の位置への昇格は飽くまでもその結果として生じたという立場をを取れば，イムバブラ・ケチュア語や，フイリッピンの言語の様なタイプの構文は受動構文の範疇から外されることになる。

Edward Keenan の様に，受動化に於いて中心的役割を果たすのは主語の位置で

あり，この戦略的位置を昇格した非動作主が占めている構文が受動構文であるという定義を採用すれば，通時的に観て主題化から発展を遂げたと考えられる受動構文が漏れることになる。又，幾つかの言語においては，共時的に観て受動化と主題化との間に関連性が観られるものがあるが，Edward Keenan の様に受動化に関わってくるのは主語のみであるという立場を取ると，受動化と主題化との間に観られる関連性を考慮の対象外に置くことになる。

これに対して，Talmy Givon の定義では，共時的に観て主題化との関連を示す様な受動構文も取り込むことができる。例えば，ビコル語の次の様な構文も受動構文の中に入ってくる。

(1) na-taʔó　kang-laláke　ʔang-líbro　sa-babáye
ACC-give　AGT-man　TOP-book　DAT-woman
(The book was given to the woman by the man.)

この構文の主題は，主題化構文の主題と同様の制限を持つ。即ち，主題の位置を占める名詞句は定名詞であっても，総称名詞であっても構わないが，不定名詞であってはならない。

又，次の例はザンビア，コンゴ，アンゴラの国境地帯で話されるバンツウ語の一方言に於ける受動構文であるが，この受動構文も起源的に主題化構文から発展してきたものであることを示している。

(2) Nzua　a-mu-mono　kwa　aana
John　they-him-saw　by　children
(John was seen by the children.)

この構文に於いて，a- は，起源的には三人称複数形の主語代名詞であったが，今では，これが動詞の受動形を特徴付けるる要素となっている。又，-mono は三人称の目的語代名詞であるが，目的語代名詞は主題化構文に於いては義務的に現れる要素である。そして，現在では，この目的語代名詞は受動構文に於ける派生主語との一致を示す屈折接辞としての役割を実質的には果たしている。以上の事実から，このバンツウ語の受動構文が，通時的に主題化と深く関わっていることが分かる。Talmy Givón の定義に従えば，この様な主題化と密接に関係する構文も受動構文と見做しうる。

以上観てきたように，Talmy Givon の定義は，もし他の定義を採用すれば受動構文の範疇から外されるかなり多くの構文を取り込むことができる。

次に，Ronald W. Langacker & Pamela Munro (1975) による受動構文の定義を観てみよう。Langacker によるアメリカ・インディアンの言語であるユト＝アズテク語の研究と，Munro による同じくアメリカ・インディアンの言語であるモハ

ヴェ語の研究成果に基ずいて，Langacker とMunro は両言語に於ける受動構文の特徴として次の様なものを挙げている。

(i) BEという主文の動詞の下に埋め込まれた補文節の主語は空席となっており，表層ではこの主語の位置を補文節中の目的語が占める。

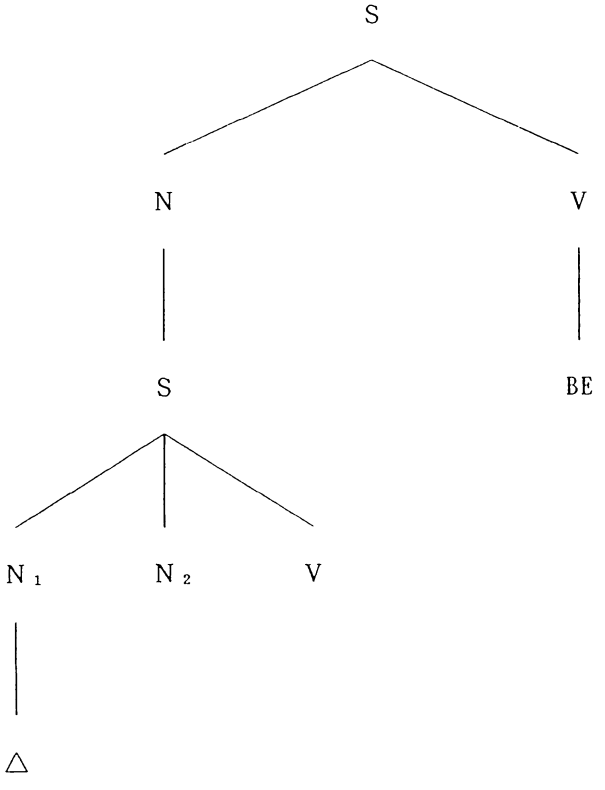
(ii)BEは抽象的で能動的な動詞であるDOと対立する静的或いは存在を表す述語である。

(iii) 深層の（論理的或いは意味上の）主語は不特定である。その存在は想定されてはいるが，その同定は指示的手段によっても，語彙的内容によっても行われない。

(iiii)道具格や動作主を示す語句は受動態の必須な要素とは見做されない。

この(i) に関連して，Langacker とMunro が想定したユト＝アズテク語とモハヴェ語の受動構文の深層構造を図示すれば次の様になる。

(3)



次に，Noam Chomsky (1981) に於ける受動構文の定義に就いて観てみる。Chomsky は受動構文の特徴として次の項目を挙げている。

(i) [NP,S]は，θ役を受けない。

(ii)[N,VP]は，VP内のNPからどれか一つNPが選択されるとき，VP 内に於いて格を受けない。

今，この定義を英語の受動態の文に当て嵌めて考察してみる。次の英文(4) の深層構造は(5) のようであると考えられている。

(4) John was killed.

(5) [$_{NP}$ e] was killed John.

(5) の“John”はこの位置でθ役を受けるが，英語の動詞の受動形は目的格を付与しないので，格を受けることができる主語の位置へと義務的に移動することになる。こうして，(4) の文が派生する。英語の場合には，主語の位置への移動が義務的であるが，スペイン語やイタリア語の様な空範疇の主語を許す言語では，この空範疇主語が自身の持つ主格を目的語に転送することができるので，英語の場合の様に目的語の主語の位置への移動は義務的ではない。次はChomsky が挙げているイタリア語の受動構文の例であるが，動詞の後にある“Giovanni”はこの位置で主格を空範疇主語からの転送によって受け取ることができるので，主語の位置へ移動しなくても文法的な文となっている。

(6) Fu arrestato Giovanni.

(Giovanni was arrested.)

しかし，英語の受動構文に於いては，常に受動形動詞の後の名詞句の主語の位置への移動が起こるわけではなく，次の例のように，受動形動詞の後に格を受ける必要のない節が来ている場合には，移動が起こらないこともある。

(7) It was believed that the conclusion was false.

名詞句の移動が起こらなかった主語の位置はθ役を受ける必要のない非独立変項である冗語的有形代名詞によって埋められることになる。Chomsky のθ理論と格理論からの受動構文の定義では，(6) や(7) の様に受動形動詞の後の位置からの名詞句の移動が生じていないタイプも排除されないことになる。

以上幾つかの受動構文に関する定義を観てきたが，これらの定義の中では受動構文の果たす機能の面から行ったTalmy Givón の定義が様々なパターンの受動構文をその範疇の中に包摂し得るという点で，又主題化と受動化の関連性をも考慮に入れているという点では優れていると言えるかもしれない。しかし乍ら，Chomsky も述べている様に，受動構文というのは，同一言語の中においてさえ自然類を構成することはまずないのであるから，異なる言語間で受動構文の共通点を探ろうとする試みは，共通点よりは寧ろ相違点のみ多く現れ，徒労に終わるだけであろう。異なる言語間に見られるある共通の機能を有する現象を指す便利な記述範疇とは成り得るかも知れないが，そこに包摂される現象は等質的なもので

はあり得ない。従って，どういう定義を採用するかによって，ある構文が受動態と見做されることもあるし，そうでない場合もあることになる。次章に於いては，以上述べたTalmy Givon(1979),Ronald W. Langacker & Pamela Munro(1975), Noam Chomsky(1981)の提案する受動態の定義の全てに合致する構文がマレーシア語にあるかどうか観てみる。

2．受動構文の定義に合致する構文

Za'ba(1926) では，次の様な文を受動構文の例として挙げている。

(8) Surat itu dibaca oleh Ali.

(9) Dibaca surat itu oleh Ali.

(10)Surat itu dibacakan kepada saya.

(11)Saya dipandangnya.

(12)Dipandangnya saya.

これらの例をみてまず気がつくことは，一人称と二人称の人称接辞が動詞の語根に付いた所謂人称形が現れる構文は受動構文として認められていないということである。

(13)Rumah itu kubeli.

(14)Rumah itu kaubeli.

マレーシア語では次の様な文は通常認められない形であるので，動作主が三人称の場合の形と，動作主が一，二人称の場合の形とが相補的分布を成しているところから，この(13)と(14)の様な形を動作主が一，二人称の場合の受動形であるとする考えもある。

(15)* Rumah itu dibeli olehku.

(16)* Rumah itu dibeli oleh kau.

例えば，Dr. Nik Safiah Karim(1986)では，(13)と(14)の様な形も受動構文として扱っている。しかし乍，動作主が三人称の場合には，その動作主が明らかで言う必要のないような時や，動作主が一般的な人であるような時には，上の(10)の様に動作主が現れない場合もあるのに対して，動作主が一，二人称の場合には，動作主を削除することができないという相違点がある。接辞の形とはいえ，動作主が常に現れるという事実は，Langacker とMunro の受動態の定義の(iii) 項に照らすと，受動態としての条件に欠けるところがあると言える。この語根に一，二人称の人称接辞が付いた構文に就いては，又後で触れることになるが，今はこの形を除外して，上で述べた定義に合う，問題のない形だけを考えることにする。そういう構文の例を集めてみると次のようなものがある。

(17) Setelah pemeriksaan dijalankan, doktor memberitahu Beadel bahawa isterinya telah mati. (Variasari, Mac 1990, P.84)

(18) Nasi sudah ada Jelapangnya penuh dengan padi. Lauk boleh dicari. Ulam pucuk boleh diambil di belakang rumah. (Ranjau Sepanjang Jalan, P.7)

(19) Dalam keadaan kebingungan itu, surat Saghjalam tadi pun dijumpai orang, lalu dipersembahkan kepada raja. (Ceritera Seri Rama, P.10)

(20) Dapat dikatakan bahawa sepanjang abad ini bahasa Melayu telah mengalami pergolakan yang amat pesat. (Pelita Bahasa, Januari 1990, P.28)

(21) Adakah kita dikejar waktu atau mengejar waktu… .(Jurnal Dewan Bahasa, September 1990, P.14)

(20)を除いた全てについて言えることは，意味上の目的語が動詞の前の位置，即ち通常は主語や主題が占める位置に来ているということである。これは，意味上の目的語，即ち非動作主が主語或いは主題になっていることを，文中の位置によって示していると思われる。又，この様な意味上の目的語の文頭への移動は，Chomsky の定義の中にあったように，動詞の受動形態素が格吸収によって目的格を与えられなくなった所為であると考えられる。(20)に於いては，意味上の目的語の文頭への移動が起こっていないが，これは，節は格を受ける必要がないから，この位置から移動しなくても構わないのである。(17),(18),(20)に於いては，動作主が現れていない。(19)は動作主が一般的な人々を表す“orang”であるが，この語の前に動作主を表すときに使われる“oleh”を付けることができないという点で，他の動作主を表す実質的な意味を有する名詞句とは異なっている。この語は殆ど実質的な意味を有しないから，これを省いても文意に変更を来すことはない。(21)は，意味の上で対立する二つの語句が並んでいることによって，前半の部分が受動の意味を有していることが意味の上からも確かめられる。

以上の(17)から(21)迄の例は先に述べた受動態の定義の孰れに照らしても，受動構文と呼ばれる資格がある構文と考えられる。しかし乍，マレーシア語に於いては，表面上の形はこれらの例と同じく，受動態の様に見えるが，そう考えると，不都合を生じるような構文がある。次の章に於いてはこの様な構文が齎す問題点に就いて考えてみる。

3．受動構文と考えると不都合な点が生じる例

3.1.等位構文の中での主題の一貫性の点から

次の下線部は倒置した受動構文であると言われることが多いが，もしそうだとすると，二番目の等位節中の主語は“lubang bayan itu”となり，前半の等位節中の主語である“ia”と主題の一貫性の点から齟齬を来す。

(22) Setelah hari pun malamlah, ia pun datang kepada sarang bayan itu, lalu ditutupnya lubang bayan itu.(Hikayat Bayan Budiman,P.41)

又，次の文に於いては，後半の等位節の主語はゼロとなっているが，この文は前半の等位節に現れる“kayu api”を想定された主語に取る受動構文と考えると，前半の等位節中の主語である“Mak Dah”と主題の一貫性の点から整合性を欠くことになる。

(23) Mak Dah bekerja mencari kayu api dan dijualnya di istana raja.
(Awang Lotong , P.1)

又，次の文では，“maka”以下に四つの等位節の連結があるが，これら全てが受動構文であると考えると，二番目と，四番目の等位節には倒置した主語が既にあるので，意味を成さない文となる。逆に，これら四つの等位節全てを受動文ではなく，これらの等位節全てを貫いて“saudagar”が主語となっていると考えればば主題が一貫していて整合性がある。

(24) Syahadan ,pada suatu hari ,datanglah anak kera itu hendak bermain-main dengan anak saudagar itu seperti adat sediakala juga , maka segera ditangkap oleh saudagar dan dibunuh akan dia,diambilnya hatinya lalu diubat anaknya itu. (Hikayat Bayan Budiman,P.40)

3.2.派生主語を持たないもの

次の様な文に於いては，派生主語が現れていないし，削除された派生主語があるとも思えない。従って、この構文を受動構文と見做すのは可成り無理がある。

(25) Bagaimana dengan Juak dan Mun ? Van Yin seperti disoal tentang itu sekiranya dia mau merantau mencari kerja.(Juak ,P.23)

(26)Jika seorang kamu makan,hendaklah dimakan dengan tangan kanan.
(Selamat Pagi Malaysia,1990 年8 月10日テレビ放送第一チャンネル)

3.3.受動の意味に解釈すると不自然さが伴う例

次の例では，孰れも動作主自身の身体部分が意味上の目的語になっている。もしこれらの例を受動文と考えると極めて不自然な文となる。何故なら，動作主の

動作が及ぶ先が動作主自身の身体部分である場合には動作主を主語に立てた言い方をするのが普通であるからである。

(27) Tangannya diraupkan ke wajah bujurnya ,lalu bangun menyangkutkan tikar ke kerusi. (Dewan Siswa , Ogos 1990, P.33)

(28) Perlahan-lahan kedua belah matanya dilangut ke atas dan … .
(Ranjau Sepanjang Jalan , P. 4)

(29) Matanya digosok-gosok kerana masih mengantuk.
(Puteri Cempaka Kuning , P. 16)

又，次の例は命令文であるが，これらの文を受動態と考えると，直接聞き手に対してある行為の遂行を求める文でありながら聞き手以外のものが主語になっている文となり，この種の文の持つ機能からしても受動構文と取るのは不自然である。

(30) Tolong jangan diseksa budak itu lagi. (Pelita Bahasa ,Mac 1990 , P.27)

(31) Sudahlah jangan dikenang barang yang lepas. (Pelita Bahasa ,Mac 1990, P.26)

3.4. [NP,VP]に主格以外の格が付与されている可能性

次の例では，意味上の目的語に相当する部分に，前置詞の"akan"が現れている。主語に"akan"が付くことはないので，これらの例は意味上の目的語に主格以外の格が与えられていることを示している。

(32) Setelah bertemu ,diceritakan oleh Raja Shaksha kepada Maharaja Rawana akan hal Raja Balikasha hendak memerangi negeri Indera Puri itu dari awal hingga akhir … .(Ceritera Seri Rama ,P.16)

(33) "…apabila dilihat oleh budak itu akan anak bayan itu , nescaya diambilnyalah akan anak bayan itu dengan senangnya .(Hikayat Bayan Budiman , P.14)

Paul J. Hopper (1983) では，この "akan" に依って動詞の後の名詞句に与えられている格が対格であることが分かると述べているが，"akan" は次の例に見られる様に，主題を表示する際にも用いられる。

(34) Adapun akan raja itu terlalu amat adilnya. (Hikayat Bayan Budiman P. 67)

又，(32)や(33)もそうであるが，この様な環境に現れる"akan"に導かれる名詞句は殆どの場合旧情報であるという事実も考え併せると，この "akan" は，(34)の主題を表示するものと同じものであろうと考えられる。即ち，この様な"akan"は，

次の例に現れるような“akan ” と同じものであり，(32)や(33)の形は，元々は文頭の位置にあった主題を表す語句が右方への倒置によって派生したと見るのが妥当と思われる。

(35) Maka akan raja ,jikalau hamba hendak perbuat seperti budak raja itu , dapat juga hamba perdayakan. (Hikayat Bayan Budiman , P.29)

又，次の文では被動者の前に“akan”が付いていないが，Asraf(1981) に依れば，この文は音調の上から，(37)と同じ音調，即ち倒置文の音調を示すという。

(36) Saya ba ca buku itu
(3: ba, 2: Saya, 1: buku itu)

(37) Be sar rumah itu
(3: sar, 2: Be, 1: rumah itu)

以上のことから，“akan”のあるなしに拘らず，被動者が旧情報と成っている場合，その被動者は元々主題であったものが動詞の後の位置に移動したものと考えられる。Paul J. Hopper(1983)では，意味上の目的語が人称形の動詞の後に置かれる形を能格構文という名で呼んでいるが，この構文に於いては意味上の目的語は殆ど限定的であると述べている。Paul J. Hopper は“Hikayat Abdullah”をコーパスとして用いているが，それに基ずいた統計に依れば，能格構文に於ける被動者は94パーセントが限定的であるという。しかし乍，ごく少数ではあるが，次例に見られる様に非限定的な名詞が現れる形も無いわけではない。

(38) Maka setelah dilihat oleh baginda cincin itu ,maka ia pun terlalu sukacita lalu diambilnya akan anak raja itu menjadi anaknya serta dikuruniainya persalinan.(Hikayat Bayan Budiman ,P.62)

従って，この様な場合には，元々主題であったものが動詞の後の位置に移動したとは考え難いから，非限定的な非動者は最初からこの位置を占めていると考えなければならない。このことに就いては後で又触れることにする。

4．Paul J. Hopperの考え

第二章で観てきたように，マレーシア語には，受動態の定義に合う構文がある一方で，第三章で観てきたように，受動構文とは考えられない構文も存在していることも分かった。Paul J. Hopper(1983)も又，マレーシア語に受動構文と能格構文の二種類を認めている。Paul J. Hopper の理論の基礎を成す概念は「他動性」という概念である。彼の考えに依れば，物語は，順次継起する出来事のみを

追う筋の部分と，情景描写や敷衍的説明の二つの部分から構成されているという。そして，彼は前者を前景（foreground）と呼び，後者を後景（background）と呼んでいる。そして，前景としての描写機能を前景化と呼び，後景としての描写機能を後景化と呼んでいる。他動性は発話に於ける前景化と密接に結びついているというのが彼の主張である。ある出来事が前景としての性格を帯びていればいる程，言い換えれば，それの出来事としての現実性の度合いが高い程その描写に用いられる表現の他動性も上がることになる。この様に，発話に於ける機能と関係付けて捉えられた他動性の面から眺めた時，大きな違いを示す二種類の構文がマレーシア語には認められるという。彼は，次の基準により，先ず受動構文と能格構文にコーパスを分け，その後で，各々の構文の他動性を十の他動性検出のためのクリテリオンに徴して計測している。

（i）能格構文：動詞の人称形で始まるもの

（但し，“pun” を伴う被動者で始まる場合や，被動者と動詞の人称形との間に“semuanya” が介在しているようなものはここに入れる。）

（ii）受動構文：被動者で始まるもの

彼は例外的に能各構文に所属させるべき例として次のものを挙げている。

（39）dan bunga chandana semuanya di-bahagikan

この構文が被動者で始まりながら，受動構文には入らず能格構文に入るのは，右方へと遊離した数量子の“semuanya”がその前の語句を受け直した形になるので，その前の語句が主題としての性格を帯び，その為に動詞が主題から切り離された形になり，結果として動詞で始まっているのと変わりがなくなる為であるという主張をPaul J. Hopperはしている。彼はもう一つの例外的に能格構文に入れる場合の “pun” を伴う被動者で始まる例を挙げていないが，恐らく Harimurti Kridalaksana(1990)が Paul J. Hopper の理論に就いて言及している部分で挙げている次の様な文を想定しているのだろうと思われる。

（40）Maka segala penganan itu pun dibahagikanlah kepada segala budak-budak.

この例に現れている“-lah”は，Paul J. Hopperに依れば，能格動詞には付くが，受動形動詞には付かないという。以上の様な基準にしたがってPaul J. Hopperは，“Hikayat Abdullah”の中の150 の節から受動構文と能格構文各々50の節を抽出し，その他動性の度合いを測定した。その測定の結果はつぎの様であるという。下記の数値は孰れも10を最高値とした場合の平均値である。

（i）受動構文：4.78

(ii) 能格構文：8.62

この数値から見る限り，能格構文は受動構文の約二倍の他動性を示している。この両構文間の他動性に関する数値の開きは，この両構文を別のものとして区別する必要がある事を示唆していると思われる。

5．結語

以上第二，第三，第四章で観てきたことを総合すると，マレーシア語には，形態論的には同じ動詞の形であっても，受動構文と，能格構文の二種類の区別をする必要があるということが分かった。もし動詞の形態が同じであるならば，この両構文を区別する際の手掛かりは何なのであろうか。Paul J. Hopperが主張する様に，両構文は物語の展開の中で果たす機能を異にするのであるから，物語の中で前景化の機能を果たしているか，それとも後景化の機能を果たしているかという点から，ある程度の区別立ての手掛かりは得られると言えよう。勿論，以上の観点は重要であるが，それとは別に，語順の上での違いというのもそれと同じくらい重要な観点であろう。Paul J. Hopperが述べている様に，被動者，即ち意味上の目的語が人称形動詞の右の領域にあれば，能格構文で，人称形動詞の左の領域にあれば，受動構文であるという区別の方法は可成り妥当性があると言える。この事は，被動者が人称形動詞の左にあっても，能格構文のグループに入れられる例外的な構文を検討してみればよく分かる。例えば，次の文に於ける下線部分は，被動者が人称形動詞の左に来てはいるが“pun”を伴っているので，Paul J. Hopperの分類基準に従えば，能格構文となる。

(41) Maka diberinya pakai oleh serimala patung itu. Maka akan burung dua ekor itu pun diberinya makan kepada tangan patung itu sehari-hari hingga besarlah anak burung itu.(Hikayat Bayan Budiman , P.35)

Paul J. Hopperも主張している様に，“pun”が主題を示す機能を果たすことは，次の様な例によっても知られる。

(42) Maka oleh dayang-dayang itu pun dibawanya naik ke istana.

(Hikayat Bayan Budiman ,P.67)

(43) Maka pandai emas itu pun pergilah ia pada tempat itu lalu diambilnyalah ditanamkan kepada tempat yang lain pula.

(Hikayat Bayan Budiman P. 34)

そして，この両文の場合共，主題が元あった位置に代用形を残している。この代用形を残すと言うのは，主題化変形の一つの特徴である。例えば，次の主題文に於いても，主題の元あった位置，即ち動詞の目的語の位置に-nyaという代用形を

残している。

(44) Buku itu sudah saya membacanya.

(42)と(43)の例から考えると，(41)に於ける“burung dua ekor itu” は能格構文の領域である動詞の右側の領域から主題化変形によって文頭の位置へ出た事を示していることになる。即ち，“burung dua ekor itu ”が元占めていた位置を示せば次の様になる。

(45) Maka diberinya makan dua ekor itu kepada tangan patung itu sehari-hari hingga besarlah anak burung itu … .

この様に，“pun” によって，人称形の動詞の左側，即ち受動構文の縄張りに現れている被動者の出自が能格構文の領域である事が分かる。しかし乍，同じ様に被動者に“pun” が付いていても，次の例のように人称形の動詞に“-lah”が同時に付いているものは，受動構文と見做すべきであろう。

(46) Maka segala penganan itu pun dibahagikanlah kepada segala budak-budak. (Jurnal Dewan Bahasa , Jun 1990 , P. 438)

それは何故かと言えば，次々と継起する出来事のみを追う時の表現に現れる，前に出てきた言葉で言い換えれば，前景化の機能をもった“pun … -lah”は自動詞が出てくる文では使われるが，他動詞が出てくる文では“pun” のみが現れるのが普通であるからである。例えば，次の(47)では自動詞が使われているので，“pun … -lah”が出ているのに対して，(48)では他動詞が使われているので，“pun” は現れているが，“-lah” は現れていない。

(47) Maka perempuan itu pun lenyaplah. (Hikayat Bayan Budiman , P.19)

(48) Maka baginda pun memanggil Perdana Menteri. (Hikayat Bayan Budiman ,P.27)

(47),(48) の例から考えると，(46)の “-lah” が付いた動詞は，自動詞化していると考えられる。この事はつまり，この動詞が目的格の格付与能力を失っているということである。又，(47)は，(43)で観たように主題の“perempuan itu” は自動詞の“lenyap”の後ろから出てきた事を示しているから，結局(47)は次の(49)の文が元になっているのだと言える。

(49) Maka lenyaplah perempuan itu.

“-lah”は次の文が非文法的なことから分かるように，主題との場所の入れ替えの際には現れない。

(50)* Ditutuplah kanak-kanak yang menjadi nenek matanya.

この事から考えると，(46)の“segala penganan itu” は主題として文頭の位置を占める前は倒置して動詞の後ろの位置を占めていた主語であったということにな

る。(41)の主題である“burung dua ekor” が動詞の右側の能格構文の領域との繋がりを保っているのに対して，(46)の“segala penganan itu” の方は起源的には動詞の右側の出であったと考えられるが，今はもう既に動詞の右側の領域との繋がりを断ち切って左側の領域に入るに充分な資格を得たと考えられる。次の例は，(41)と同様に“pun” のみが現れているので，動詞の右側の領域，即ち能格構文の占有領域との繋がりを保っている。つまり，この文は前景化の機能を有している文であると言うことになる。

(51) Maka Seri Dewa Raja menyeru anaknya katanya ,‘ Umar, Umar , naik kuda itu .’ Maka kuda itu pun dinaiki oleh Tun Umar.

次に，動作主を表す“oleh”句の位置と能格構文との関係について観てみる。次の例では，“oleh”句が人称形動詞の前に置かれているが，先行する出来事との連関を示す“maka”でこの文が始まっていることからも分かるように，この文は前景化の機能を有している。即ち，この文は能格構文であると考えられる。そしてこのパターンの文は旧情報ではあるが当面の主題としての資格を失っていたものを新たな主題として持ち出す際に典型的に使われる形であると言える。

(52) Maka kata Seri Dewa Raja ,‘ Khoja, cemeti kuda itu.’ Maka oleh Patan ini dicemetinya. Maka oleh kuda itu dicampakkannya ke bawah rumah … . (Sejarah Melayu ,P.149)

この文の二番目の文は新たな主題として “Patan ini ” を立てている。しかし，三番目の文では又主題の交替が起こり，今度は ”kuda itu” が新たな主題として復活したことを示している。

今の例とは異なり，次の文では“oleh”句が人称形動詞の後の位置を占めているが，この場合も前景化の機能を果たしていると考えられる。この事は，“oleh”句が動詞の右側の能格構文の占有領域に含まれている事を考慮すれば当然の帰結である。

(53) Maka setelah dilihat oleh baginda cincin itu , maka ia pun terlalu sukacita lalu diambilnya akan anak raja itu menjadi anaknya serta dikuruniainya persalinan. (Hikayat Bayan Budiman ,P.62)

又，次例のように“oleh”句が動詞の右側のしかも被動者の後に出現する形もある。この様な構文も前景化の機能を果たしていると考えられる。

(54) Maka titah baginda ,‘Dipertidaknya laki-laki kita oleh Betara Majapahit maka kita dikirimi subang.’(Sejarah Melayu ,P.32)

(55) Maka dituliskan oleh Ferhad sehelai ,terlalu amat baik tulisannya itu. (Hikayat Bayan Budiman ,P.67)

能格構文においては，(54)の様に動作主を表す“oleh”句が被動者よりも後に来る例は非常に数が少ない。これは次のような受動構文では，“oleh”句が通常被動者よりも後に置かれるのと対照的である。

(56) Tetapi dilihatnya raja itu sangat rapi dikawal oleh menterinya empat orang ,serta empat puluh orang hulubalang yang sangat gagah semuanya. (Cerita Seri Rama ,P.9)

又、次の下線部も能格構文であると考えられるが，これは関係節中に現れているので，後景化の機能を果たしていると考えられるが，この様な場合には受動構文の場合と同様被動者の後に現れている。

(57) Akan hal dua belas orang -orang Raja Shaksha yang telah dijilat bekas tapak kaki mereka oleh Saghjalam itu pun mulalah mendapat bisa yang amat sangat hingga mereka tidak sedarkan diri.

(Cerita Seri Rama ,P.9)

これまで観てきた様に，人称形の動詞を境にして，その右側は能格構文の領域で，その左側は受動構文の領域であるというのは概ね正しいと言える。次に，等位構造中のギャップとそれの解釈上の先行詞との関係という視点から眺めた場合，動詞の右側と左側で有意な相違が出るかどうかを観てみることにする。次に掲げる文は全て等位節続詞の“lalu”によって結ばれた二つの等位節から成っていて，後半の等位節の主語の部分にギャップが現れている。そして各文に付されている下付き文字は，このギャップが前半のどの名詞句と同一指示的となるかを示している。

(58)-a. Budak itu$_i$ saya$_j$ tumbuk lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

b. Saya$_j$ tumbuk budak itu$_i$ lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

c. Budak itu$_i$ ditumbuk Amin$_j$ lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

d. Budak itu$_i$ ditumbuknya$_j$ lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

e. Budak itu$_i$ ditumbuk oleh dia$_j$ lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

f. Budak itu$_i$ ditumbuk oleh Amin$_j$ lalu $\phi_{i,j}$ pergi berlari.

g. Ditumbuk $\underset{j}{\underline{\text{Amin}}}$ akan $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

h. Ditumbuk$\underset{j}{\underline{\text{nya}}}$ $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

i. Ditumbuk oleh $\underset{j}{\underline{\text{dia}}}$ akan $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

j. Ditumbuk oleh $\underset{j}{\underline{\text{Amin}}}$ akan $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

k. Ditumbuk $\underset{j}{\underline{\text{Amin}}}$ akan $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

l. Oleh $\underset{j}{\underline{\text{Amin}}}$ ditumbuk $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

m. Oleh $\underset{j}{\underline{\text{Amin}}}$ $\underset{i}{\underline{\text{budak itu}}}$ ditumbuk lalu $\underset{j}{\phi}$ pergi berlari.

これらの文を観て気がつくことは，動詞の人称形が一人称の場合と，三人称の場合とで，動詞の右側の領域で，ギャップの解釈に相違が出ているということである。つまり，一人称の場合には，ギャップは動作主（即ち一人称）と被動者の孰れとも同一指示的となるのに対して，三人称の場合には，ギャップは動作主とのみ同一指示的となりうるという違いが見られる。もし動詞の右の領域が能格構文の占有領域であるとすれば，ギャップの先行詞の解釈に関しても同じ傾向を示すと予想されるが，実際にはそうなっていない。これまでの論から言えるように，もし動詞の右側が能格構文の占有領域だとすれば，三人称の場合も一人称の場合と同じにギャップの解釈は二通りに成る筈である。ところがデータでは，一通りの解釈しか許さないという結果になっている。これは，三人称の場合も，元々は二通りの解釈を許したが，ある段階で被動者を先行詞とする解釈が消えたと考えられる。能格構文に於いては被動者が優位に立つというのは汎言語学的傾向だと言われているから，三人称の場合に被動者を先行詞に取れなくなったということは，相対的に動作主の勢力が強くなり，能格構文的傾向が動詞の右側では薄れたと考えられる。三人称の場合の左側の領域は依然能格構文的機能を維持していると考えられるが，被動者を先行詞として取る解釈が左側の独占となった為に，一人称の場合のようなバランスが崩れ，相対的に左側の被動者の地位が上がったと考えられる。言い換えれば左側の領域での受動構文化が進んだと言える。Paul J. Hopper(1983) の統計では，能格構文と受動構文の被動者の内，定名詞となっている割合は，夫々94パーセント，84パーセントとなっていて両構文ともかなり

高い数値を示している。右側の領域に現れる旧情報の被動者は左側の領域の主題が移動したものと考えられるから，若干受動構文の方の数値が低いということはあるが，両数値がかなり接近しているのは当然のことと言える。この数値によっても分かるように，能格構文の被動者は本来は旧情報であると言える。しかし，先ほど観た様に，三人称の人称形の場合には，右側の領域における被動者が左側の領域の被動者との関連を失ったために，右側の領域の被動者は先行の文脈と関係を持たない新情報が出現するようになったと考えられる。この右側に現れる新情報の被動者は，θ役が与えられない動詞の前の位置に移動することも可能である。それでもしこの新情報の被動者が此処に動い場合，この新情報の被動者が本来有している格は絶対格であるが，他の構文では主語が占める位置である為，益々受動構文の主語としての性格を帯びるようになる。この事が最もはっきりした形で現れるのは，次のような能格構文の被動者が左に移るような場合である。

(59) Dalam kereta itu ,ditemui dua butir bom ,satu penutup letupan, pisau dan kapak. (Variasari,Mac 1990, P.85)

この文の被動者を左に移した次のような形は，被動者が主語の位置を占めている点に於いても，又動作主が削除されている点に於いても受動態としての資格を充分持ち合わせていると考えられる。

(60) Dua butir bom ,satu penutup letupan ,pisau dan kapak ditemui dalam kereta itu.

又，次の例では一人称の動作主を持つ能格構文の被動者が右側の領域から左側の領域に移った例である。この場合にも被動者が新情報でしかも主語の位置を占めている点で，多少受動構文に近くなったとは言えるが，常に　動作主が，接語の形態ではあるが，現れるという事がこのタイプの能格構文が完全に受動形としての地位を獲得することのブレーキとなっていると考えられる。

(61) Bilaman kacamata tak kupakai ,kepalaku sakit. (Kamus Pembaca , P.179)

(62) Ketika tombol pintu kupulas , Ku Izham sedang menghabiskan lafaz doanya yang terakhir kukira. Tangannya diraupkan ke wajah bujurnya ,lalu bangun menyangkutkan tikar ke kerusi. (Dewan Siswa , Ogos 1990, P.33)

(62)の例は第二章の冒頭の部分であり，状況の説明をしている部分であると考えられる。従って，その一部である下線部も背景化の機能を果たしていると考えられる。このタイプの構文は，先ほど述べたように，受動構文としての資格は得ていないが，被動者が動詞の左側の領域にある構文は，この構文のように，背景化

としての機能を果たしている場合が多い。同じことは，(62)の破線部の能格構文に就いても言える。この構文は意味の上から，受動構文ではなくて，能格構文であると考えられるが，先ほどの下線部の場合と同様，被動者が動詞の左側に来ている。そして，この場合にも背景化の機能を果たしている。この事から，動詞の左側の領域には能格構文も，受動構文も現れるが，この領域では両構文とも，次の受動構文と同じように，背景化の機能を果たしていると言うことができる。

(63) Lima hari lamanya ia berjalan demikian itu ,barulah sampai ke tengah negeri itu. Dilihatnya dekat dengan istana raja ada sebuah rumah besar ,tempat kediaman orang-orang dagang yang tiada berkeluarga . Mereka ini yang berjumlah seribu orang ramainya , sentiasa diberi makan percuma oleh raja negeri itu. (Cerita Seri Rama , P.8)

参考文献

1) Chomsky,Noam(1981).*Lectures on Government and Binding* . Dordrecht-Holland/Cinnaminson-U.S.A.:Foris Publications.

2) Givón,Talmy(1979).*On Understanding Grammar* .Newyork: Academic Press.

3) Hopper,Paul J.(1983).Ergative,Passive, and Active in Malay Narrative.In Flora Klein-Andreu (Ed.), *Discourse Perspectives on Syntax* .Newyork:Academic Press.

4) Keenan,Edward(1975).Some universals of passive in relational grammmar. *Papers from the 11th Regional Meeting*.Chicago:Chicago Linguistic Society. 5)

5)Langacker,Ronald W. & Pamela Munro(1975).Passives and their meaning .*Language Vol.51,No.4*.

東京外国語大学　語学研究所　刊行物

語学研究所所報	第１号	1960（昭和35）年3月
〃	第２号	1961（昭和36）年3月
〃	第３号	1962（昭和37）年3月
〃	第４号	1963（昭和38）年3月
〃	第５号	1964（昭和39）年3月
〃	第６号	1965（昭和40）年3月
〃	第７号	1966（昭和41）年3月
〃	第８号	1970（昭和45）年3月

語研資料１	Anfitrite fermosa neste caso nao quis que falecesse (Os lussiadas,VI.22)	池上　岑夫	1974
語研資料２	翻訳理論と一般言語学	磯谷　孝	1975
文部省科学研究費による外国語教科書研究編纂についての報告			1970年（昭和45）3月
やさしいベンガル語（その１）	山田和子編著		1971（昭和46）年3月
動詞の時制中心初等スペイン語	原　誠		1971（昭和46）年3月
スウェーデン語・デンマーク語・アイスランド語・ノルウェー語			
基礎モンゴル語教本			
基礎英語学			
語研資料３	関東・東北方言の地理的・年齢的分布（ＳＦグロットグラム）		1985（昭和60）年3月
語研資料４	「アディゲ語の音声と音韻」		1986（昭和61）年3月
語研資料５	ドイツ語の「状態受動」		1986（昭和61）年3月
語研資料６	ドイツ語の意味論的分析資料		1987（昭和62）年3月
語研資料７	現　実　分　析		1987（昭和62）年3月
語研資料８	スペイン語の語彙の頻度と広がり		1988（昭和63）年3月
語研資料９	ヒンディー語略語集		1989（平成元）年3月
語研資料10	ドイツ語の統語論的意味論的研究資料		1990（平成２）年3月
語研資料11	連続講演会　1990年		1991（平成３）年3月

語研資料12

言語研究 I

1991（平成３）３月発行

編　者　　渡瀬　嘉朗，在間　　進，敦賀陽一郎

発行所　　東京外国語大学　語学研究所

〒114　東京都北区西ケ原４－51－21

電　話　03-3917-6111　内340